

# アジアの人々の協働から学ぶ

XXIX



第29回国際ワークキャンプ報告書(インドネシア)

A REPORT OF INTERNATIONAL WORK CAMP (INDONESIA)

2015

桃山学院大学

# KEBAHAGIAN









## 目 次

語句説明	1
感謝 清水 真一	2
サービス・ラーニングの先駆け、桃大国際ワークキャンプ ～より充実したプログラムとして発展することを願って～ 松平 功	3
トッケイとカカオとワークキャンプと 巖 圭介	6
第30回IWCに参加する学生へのメッセージ 梅谷 進康	8
第29回IWCの引率を終えて 木戸 裕也	10
IWC29 Member introduction	12
インドネシアの学生	13
スケジュール	14
テーマ「Kebahagiaan」	18
募金活動	19
事前研修（合宿含む）	20
インドネシアナイト	21
プリンピンサリ村	22
アスラマ	23
ホストファミリー	25
小学校訪問	26
日本語プログラム（中学校）	27
高校訪問	28
看護学校訪問	30
ワーク内容	31
日本食パーティ	32
交流会について	33
教会	34
バニユボ村	35
離村式	36
大学訪問	37
エヴァリュエーション	38
文化探訪	39

## 参加学生のレポート

「IWCでの軌跡」	学生隊長 高岡大毅	40
「インドネシアで学びえたもの」	学生副隊長 大口麗王	43
「私の18日間」	学生副隊長 岩田莉菜	46
「ありがとう」	廣澤真子	48
「Kebahagiaanは達成できたのか」	学生副隊長 宮下捷	51
「海外でボランティアを経験して」	大本航平	54
「出会いに感謝」	芝山みちる	57
「IWCでのたくさんの体験と出会い」	永本愛理	59
「成長させてくれたIWC」	石橋朔	62
「たくさんの出会いと感謝」	井須奈々絵	65
「この夏学んだこと」	奥野なつみ	67
「体験による成長」	奥村真弘	70
「IWC29thによって得られたもの」	芥子桃佳	72
「財産を得た夏」	倉部拓実	75
「インドネシアの文化および生活について」	佐藤匡	79
「ワークキャンプでの日々」	林周	81
「インドネシアワークキャンプを通して」	岩永周子	84
「インドネシアでの体験」	西川誠一朗	87
「異文化での体験・経験」	牧野拓弥	89
「豊かということ」	増田俊輔	92
	Gede Indeo Mario A	95
	Made Febby Wijaya	96
	Bruno Kosten	97
	Ni Kadek Dearly Yuliantari	98
	Forman Suprandata	99
第29回国際ワークキャンプ預り金精算書		100
第30回国際ワークキャンプ参加者募集要項		101

## 語句説明

### 【あ】

IWC	国際ワークキャンプ (International work camp) の略語。私たちは29回目なので「IWC29th」。
アスラマ	バリ・プロテスタント・キリスト教会が運営しているウィディア・アシ財団によって設立された児童養護施設のこと。現在のバリ島に7ヶ所あり、私たちは第2・4・5アスラマを訪問した。
石井美和さん	現地で私たちIWC29の健康面や精神面のあらゆる面でサポートしてくれた現地の看護師の方。
イブ	インドネシア語で「お母さん」という意味。ホームステイ先のお母さんやアスラマで働く女性を私たちは「イブ」と呼んでいた。

### 【か】

交流会	子ども達との親交を深める事を目的と開催された会。子ども達と歌ったり踊ったりした。
-----	--

### 【た】

チャブレン	大学付牧師。すごく頼りになりました。
-------	--------------------

### 【は】

バティック	ろうけつ染め布地の特産品のこと。インドネシアの民族衣装のひとつ。これを着るとかっこよくなる。
パパ	インドネシア語で「父」の意味
バニュポ村	バリ島の北西部に位置する村で、アスラマで暮らす一部の子どもの出身村である。
Hari ini	インドネシア語で「今日」という意味。賛美歌の一つ。

### 【ま】

マンディ	「お風呂」「水浴び」という意味。アスラマでは朝と夕方に水浴びする。
------	-----------------------------------

### 【ら】

ルピア	インドネシアの通貨単位 (1円=110円)
-----	-----------------------

### 【わ】

ワーク	今年のワークは、第5アスラマ・ムラヤにある壁造りを行った。
ワルン	お菓子や食材、日用品などを扱うお店のこと。各お店によって、ものの値段が違う。おすすめは、遠い方のワルンです☆

## 感謝



国際ワークキャンプ実行委員長 清水 真一

第29回国際ワークキャンプ（以下、IWC）を無事終えることができましたことを感謝とともにここにご報告申し上げます。1988年を初回として本年で第29回に至ったという長いIWCの歴史の流れを振り返ったとき、今一度これまでのIWCの資料に目をとおす作業にせまられました。その中でふと目にとまったことがあります。第一回インドネシア・ワークキャンプの報告書の題名が『アジアの人々との協働から学ぶ』（1988）からその後の第三回では『アジアの人々の協働から学ぶⅢ』（1989）に変わっている、という些細な点です。容易に看過してしまう、とるに足らない小さな点ですが、第三回では「と」が削除されているのです。じつはあたらしく気付いたのではなく、敬愛する藤間繁義先生（桃山学院大学名誉教授）の二十数年前のお言葉に再会させていただいたのだ、といった方が正確かもしれません。「～との」では、ワークキャンプの機会を与えてくださっているバリの人々が我々と遠く距離を隔てた存在という含みを拭いきれず、バリの人々は我々と同じアジアの同朋であるという視座につくとき、「～との」ではなく「～の」こそ要を得た表現であるのであって、「ともに」という「同労者」であるバリの人々から学ぶという認識こそ「協働」の意味だ、と語られていた先生のお言葉が脳裏によみがえったということです。IWCの原点の再確認をさせていただき幸いにあずかった次第です。

世界市民の養成という理念を掲げるなか、「協働」の思いは過去から今回の第29回IWCまで脈々と継承されています。今回のIWCでは、松平功チャプレンを団長に、巖圭介先生（社会学部教授・学部長）、梅谷進康先生（社会学部准教授）、木戸裕也学生支援課員が引率をしてくださいました。ワーク隊は、この引率団と一回生から四回生まで全学年にわたる計二十名の学生とで構成され、これに、現地看護師の石井美和氏が合流するというかたちになりました。事前研修は二十回にも及び、インドネシア語学習は由比邦子兼任講師（インドネシア語担当）に多くの時間を割いていただきました。また、小池誠先生（国際教養学部教授）、三宅亨先生（経営学部教授）にはそれぞれのご専門、経験を踏まえたご講義をいただきました。また、健康管理については懇切丁寧なご指導を今井敏子学生支援課員（保健室）よりいただきました。また、朝倉康仁庶務課員、和田早苗氏（チャペル事務室）には事前の全般的な現地情報の収集をも含め、年度当初のIWC参加募集から事前・事後研修の全期間にわたり多くのお力添えをいただきましたことも申し添えておかなければなりません。第28回IWC参加学生諸君にもいろいろお世話になりました。

現地でのワークの詳細については本報告書の本篇に譲ることにして、ワーク隊をあたたかく迎え入れ、支えてくださったプリンビンサリ村の人々、ディアナブラ大学の学生諸君、ムラヤの生徒たち、とくにアスラマの子どもたちに感謝しなければなりません。また、ワーク隊の訪問を受け入れてくださり、学生たちに多くの学びの機会を与えてくださったバニュボ村の方々にも深謝しなければなりません。ワーク隊を見守ってくださったバリの日本領事館、バリ・プロテスタント・キリスト教会、ディアナブラ大学等々の関係諸機関・組織に感謝申し上げます。ワーク隊のワークサイト（ムラヤ）での手配、川の護岸工事のための資材の調達等々、陰に陽にワーク隊を懸命に支え続けてくださったスイクラマ氏ならびに現地スタッフの方々にも御礼申し上げます。御蔭をもって計画した分の護岸工事をこの乾季にすすめることができました。

最後になりましたが、桃山学院大学の学生がIWCという「協働」の業へ参加することを物心ともに支えて下さり、かけがえのない学びを可能にくださった桃山学院大学および教育後援会に対しこころより御礼申し上げます。また、独立行政法人日本学生支援機構からも奨学金の支給を受けました。この紙面を借りまして感謝申し上げます。

## サービス・ラーニングの先駆け、桃大国際ワークキャンプ ～より充実したプログラムとして発展することを願って～



離村式にて、スィクラマさん(左)と

第29回国際ワークキャンプ(インドネシア)団長

チャブレン 松平 功

国際ワークキャンプ(インドネシア)(以下IWC)は、近年多くの大学で模索され始めているサービス・ラーニングと同系列の学習プロジェクトです。本学のIWCも他大学が行っているサービス・ラーニングと同様に、何かを必要としている地域や国に赴いて、学生たちがそこでしか得られない多くを体験し、心と体で自分たちに必要な事柄を修得していこうとするプログラムです。桃山学院大学が、このような学びを29年も前から始めていたことに少々驚きを感じます。また、そのように考えるとIWCはサービス・ラーニングの先駆けであり、プロトタイプでもあると言えるのかもしれませんが。

さて、今回6回目の引率でIWCの内容を熟知しているということと、団長という責務もいただいておりますので、サービス・ラーニングとしてのIWCをより充実したものになりたいという以前からの思いを実行に移すことができました。と言いますのは、団長とは複数いる引率の責任者のことですが、それだけではなくスケジュールやイベント内容の組み立てや管理も行い、それらの変更や修正を容易にできる立場にあるからです。

改善点や変更点は大きく分けて五項目になります。その第一として、事前事後学習の手直しを行いました。以前は毎週月・木の5時限目に学生たちを集めてインドネシア語やインドネシア文化の学習と危機管理などの情報を事前に伝達していたのですが、このスケジュールでは殆どの学生たちの専門科目や資格講座などと重複してしまいます。特に社会福祉学科の学生たちは、1回から3回生までの必修科目スケジュールと重なってしまうため、事前と事後学習の参加が不可能であるとわかりました。学生の参加不可能なプログラムを立てても仕方ありません。そこで、全学年の授業科目表をキリスト教センターの朝倉さんに分析してもらった結果、金曜日の5時限だけが空いているとの回答を得ました。その時間帯は就活講座が行われているのみなので、学生も集まりやすいと考えて金曜日の5時限を事前事後学習のコマとしてスイッチすることにしました。以前までは週二回あった事前学習を一回に調整変更するのは少し大変でしたが、この修正でIWCの応募が殆どの学生に可能となりました。



ブリンビンサリ村の大自然

第二の改善点は、事前学習と並行して個別カウンセリングを実施したところにあります。IWCでは、

現地で行う多くのプログラムのための準備が必要不可欠です。例えば、日本文化を小・中・高校や看護学校で教える授業の作成、児童養護施設での交流会練習、衛生指導の提案と作成、しおりの作成、募金集めなどですが、その準備のために事前学習の授業以外にも、現地に行くまでに何度も集まる必要が生じます。このような状況の場合、いつものことですが、積極的に活動する学生とそうではない学生の違いが明確になってきます。そこで、学生たちの参加状況や準備の進捗状況などを各参加者に尋ねて活動の促進を図り、それと並行して、バリに赴く意味や目的などを再認識させていくことが大切となります。このカウンセリング法には、現地に行くまでの間に燃え尽きてしまう学生が出てくるのを予防するという意味もありますが、明確な学習目的を持ってプログラムに参加させることに大きな意義があります。今回は、各学生一度のみしか実行できませんでしたが、もっと多くのカウンセリングを振り返りの時間も合わせて、現地に行く前に持った方が良かったのではないかと考えています。

第三の変更点は、現地での「振り返り」の実施です。今までのIWCでは「振り返り」の時間を持たず、学生同士が中心となって反省会をはじめとする企画型ミーティングを開いていました。しかし、前々からそれだけでは不十分であると感じていました。と言いますのは学生だけが集うミーティングでは、どうしても目の前の課題をこなそうとし過ぎてノルマ追求型の集団意識に陥りやすくなり、今までの出来事の想起、反省、学びなどに焦点を合わせることが困難になるのです。そこで、今回から数回の「振り返りミーティング」を持つように設定しました。キリスト教センターから事前準備の段階で振り返りシートを各学生に渡してもらい、各々が毎日の振り返り内容を書き込めるようにしておき、現地での全体ミーティングに備えることができるように整えてもらいました。振り返りは企業などで用いられている「K・P・T法」を取り入れて、Keep（良かった点、続けていきたい事柄）、Problem（問題点、後悔したこと）、Try（試すべき事柄）といった内容を全員が意見しながら共有し議論できるようにしました。初めての試みでしたので、もたついたところなどが多々あったのですが、引率をご一緒していただいた巖主介教授と梅谷進康教授の大きな助けで何とか形にできるものにはなりました。正直な所、彼ら



トッケイ（トカゲ）の子ども

のヘルプなしでは無理だったと思います。さて、「振り返り」の時間を持って感じたことは、これからもIWCには絶対に「振り返り」が必要であるということです。ただ、少し失敗だったと感じたのは、このKPT法による「振り返り」を現地で開始してしまったところにあります。日本での事前学習の折にでも最低2回は、この「振り返り」による学習ミーティングをしておくべきだったと後悔しています。

第四の変更点は、エバリュエーションの方向転換にあります。元々、エバリュエーションとは現地に赴いた学生が児童養護施設の改善点を模索し、査定して要望書を作成し、その運営母体であるウィディア・アシ財団とバリ・プロテスタント・キリスト教会に提案するというものでした。しかし、児童養護施設は我々日本からだけではなく、アメリカ、ドイツ、オランダ、オーストラリア、シンガポールなどのボランティア学生たちによって年々改善されており、正直なところ近年は施設の改善点を発見するのが一苦労といった感がありました。そのような経緯からも、このエバリュエーションの矛先を施設から180度変換して、学生自身を査定する機会として用いることにしました。バリの児童養護施設や村の人々の中で、インドネシアの大学生と共に協働した自分たち自身について振り返り、「何を学んだのか」、「何を後悔し、何ができなかったのか」、また「どのようにこの経験を自分

の未来に繋げていくのか」、そして「現地の方々への感謝の言葉」を4チームに分かれて作成し、英文にして最終日にバリ・プロテスタント・キリスト教会の本部で発表するという形式を選びました。当然、このエバリュエーションの作成は、それまで行ってきた「振り返りミーティング」と関連付けられた内容を基に行われています。そういう意味において、IWCは自分たちの学びを中心に構成されるものとして改善されたのです。これによってIWCは、より充実したサービス・ラーニングとしての発展を遂げたことになりました。また、このエバリュエーションのさらなる充実を図るために、次回からエバリュエーションの開催場所をインドネシア学生の母校であるディアナプラ大学で、大学の学長、幹部たちや学生たちの前で行うことを提案しています。インドネシアと日本の学生との協働において、「現地の学生と一体何を学んだのか」また「この経験から生まれくる自分たちの将来的展望」などを、そのエバリュエーションで取り扱うことができれば、いっそう万全で理想的なプログラムになるのではないかと考えています。

最後の改善点は、事後研修にあります。以前からIWCは現地から帰ってきて終わるというプログラムではありませんでした。帰国後には報告書の作成と報告会の準備などが行われてき



バニユボ村の教会前にて

ました。しかし、事後学習の内容が曖昧であったため、報告書作成に積極的に取り組むのは一部の学生だけで、学生によっては一度も事後研修の時間に現れない者さえいたのです。今回は事後研修の内容を一から見直しました。事後研修の内容を詳細に述べる紙面がありませんので割愛いたしますが、重要な改善点は第一に報告すべき内容やエピソードなどを再度の振り返りによって想起させることと、そして第二にすべてのポイントに学生担当者を振り分けて全員が報告活動に専念できるようにと構想していることです。これによって、事後研修のモチベーションにばらつきが多かった学生たちの内的動機を与えて、報告会まで覇気ある学習態度で臨むことができるようになるかと信じています。

次回のIWCは、30周年の式典と組み合わせて行われる予定です。これだけ長く続いているプログラムは他にはないでしょう。ここまで続けることができたのは、IWCに関わる多くの教職員の方々の努力や大学同窓会および大学教育後援会のご支援のおかげです。現地では、たった18日間のプログラムですが、多くの方々の後ろ盾によって学生たちは他では学ぶことのできない体験をすることができます。与えられている沢山の恵みに感謝するとともに、桃大IWCはサービス・ラーニングの先駆けだという思いを新たにしながらも、さらなる改良によって大きく躍進する学習プロジェクトにしていただけだと願っています。

## トッケイとカカオとワークキャンプと



社会学部 巖 圭 介

桃山学院大学に着任して17年、今回初めてインドネシアワークキャンプに引率という形で参加できました。これまで、内モンゴル砂漠緑化ボランティアやヨーロッパエコスタディには何度も帯同させてもらいましたが、IWCは別格という感じでちょっと縁遠かったのですが、今回松平チャブレンからお声かけいただき晴れて体験できました。参加する学生と同じようにまったくの初めての経験をしてたくさんの学びを得ようと意気込んで行きましたが、学生ほど日々のプログラム実施のために準備を積み重ねてきたわけではなく、また毎日の運営はチャブレンとスィクラマさんをはじめ他の引率の皆さんがやってくさるので、結局とても楽な立場で気楽な毎日を送り好きなことをやってきました。トッケイもカカオもトビトカゲも見ることができて大満足でした。参加学生たちがそれぞれに感じたであろう達成感や視野の広がりや後悔の念や未来への想いなどを、同じ立場で共有できたとは思いませんが、彼らの活躍と成長をそばで見ることができて教員としてうれしい体験でした。



毎日朝早くから集合してその日のプログラムをこなしていく。寝坊して大幅に遅れたり、やるべきプログラムに尻込みしてきちんとできなかったり、といったトラブルも（ほとんど？）なく、順調にスケジュールをこなしていく学生たち。物足りない面ももちろんあったものの、私の目にはまずまずよくやっているというふうに見えました。長い滞在中には人間関係などで問題も生じますが、それを乗り越えようと話し合い悩む姿も微笑ましい。なにも起きない青春ストーリーなどおもしろくありません。

そんなストーリーの脇役というか背景の一部と化した私は、暇があればうろろと生き物を探し、何か見つけてはこそっと人に見せるヘンなおじさんとなりました。もちろん自分の興味を追求していたのですが、あえて付け加えるなら、君たちやらなきゃいけないこと以外にももっとまわりに目を向けてみようよ、ということ静かにアピールしていたのです。効果はなかったようです。

すべてが終わった今、参加した学生たちの中には何が残っているだろう。美しい思い出。いい体験。きっと口をそろえて言うでしょう。しかし、それしか残っていなかったとしたら、あなたは何も見ず何も考えていなかったのだということです。ワークキャンプ、というのは、ワーク＝作業・仕事をするために行くもの。いろいろ体験して、それを振り返って何を学びましたか、いい学びができましたね、めでたしめでたし、では意味がない。自分たちが現地に行って作業をしてどれだけ現地の子どもたちの役に立ったのか。汗を流して石と砂を運び、数ヶ月かけて用意した様々なプログラムをきちんと実

施して、大きな達成感を感じていることだろうと思うけれど、自分たちがどれだけ得たかではなく、現地の子どもたちがどれだけ得たか、ということを考えるべきでしょう。そう考えたときに、自分たちのあまりの無力さにうちひしがれ、もっとなにかできるはずだと悩んでこそ、大きな成長につながるのだと思います。

第2アスラマも第5アスラマもかなり施設が整ってきた今、なにが子どもたちのために一番必要かとスィクラマさんにたずねたところ、子どもたちを大学にまで行かせる学費が必要だ、と言われました。アスラマにいる子どもたちは、とりあえず食べるものと着るものと住むところを与えられ学校に行ける生活ができていますが、それだけでは足りない。卒業してすぐ働いてもたいした稼ぎはなく、また貧困家庭の再生産に戻ってしまいかねない。そうならないためには、いい仕事に就いて稼げるようになるために、高等教育を受けて専門的知識や技術を身につける必要がある、ということなのです。そうした問題意識を聞いてしまうと、塀を作るために石を運んだというのがいかに小さな貢献に過ぎないかを感じずにはられません。

一方、予定されたプログラムをこなす忙しい毎日の中で、やらなければならないことをやるだけでなく、一歩踏み出してやらなくてもいいことをやってみようとした学生がいたことには、明るい希望の光を見ました。いつもよりずっと朝早く起きてやってきて、子どもたちの朝の日常を観察しようとし、あるいはイブたちを手伝った者。道ばたのゴミ拾いをして道路をきれいにしたもの、集めたゴミをアスラマのゴミ箱に入れても問題は解決しないと気づいた者。自分の外に注意を向けることを覚えた者にとって、世界は果てしなく広がっており、もう二度と閉じることはないでしょう。

IWCが終わったこれからが始まりです。各メンバーがこの先どんなふうにな人生を歩んでいくのか、それを見るのが楽しみです。



## 第30回IWCに参加する学生へのメッセージ



社会学部 梅谷進康

### 1. 本稿のねらいと留意点

経験を伝承することは意義がある。この考えが正しいという前提に立って、筆者は次年度の国際ワークキャンプ（以下IWC）に参加する学生に向けて本稿を執筆する。

筆者は、引率教員という立場で第29回IWCに参加した。この経験をもとに次年度の第30回IWCに参加する学生が、主に現地（インドネシア）にいるときに意識して行動したほうがよいと思われる8つの助言をする。

この助言は、筆者がIWCにただ一度参加した経験にもとづいたものであり、絶対的に正しいものとはいえない。したがって、次年度のIWCに参加する学生は本稿の内容を吟味し、役に立つもののみを活用してほしい。

また、以下の助言は思いつくままに記したものであり、望まれる行動が網羅されていないことにも留意してほしい。

### 2. より良い活動にするための助言

#### ① 語学力を高める

海外での活動になるため、語学力が求められる。インドネシア語はもちろんのこと、英語が通じる場合が多いため英会話能力も高めて臨む。また、現地にいるときも語学力の向上に努める。なお、活動日程の最後にエバリュエーションがあり、学生は英文の作成と英語によるスピーチをしなければならない。

#### ② 積極的にかかわる

アスラマの子どもたちのみならず、そのイブやホームステイ先の人びと、そしてインドネシアの学生にも自分からコミュニケーションを図っていく。会話が上手にできないとしても、話そうとする熱意は相手に伝わる。また、非言語コミュニケーションで意思疎通を図ることも限定的ではあるが可能である。遊び道具や語学辞典といった物を介してのコミュニケーションも1つの方法である。

#### ③ 良いチームにする

現地での活動期間はおよそ3週間であり、短くはない。そのため学生同士のチームワークが試される。チームの瓦解を予防するには、第30回IWCの活動目標を共有するとともに、個々の学生が役割

を遂行することや、他のメンバーへの声かけと思いやりが求められる。また、メンバー間で楽しみを共有することは、チームの潤滑油となる。

#### ④ 責任感をもつ

隊長、副隊長、班長によるリーダーシップの発揮のみならず、メンバー1人ひとりが自分の担当をやり遂げる責任感をもつことが望まれる。ただし、メンバー同士で意見交換や助け合いをすること、そして状況によっては担当外のことにも積極的に関与する柔軟性をもつ。準備段階や現地での交流中に本当に困っているメンバーがいたら、「担当外だから関係ない」ではなく当事者意識をもってフォローする。

#### ⑤ 交流先のことを考える

交流のプログラム内容は、相手のことを考えて組み立てるようにする。具体的には、アスラマの子どもたち、小・中・高・看護学生といった対象に合ったものや教会という場にふさわしいものにする。内容が難し過ぎる場合は、アスラマの子どもや小学生などができない場合がある。また、高度なプログラムを追求し過ぎると、自分たちが上手に披露できない場合があるので注意が必要である。

#### ⑥ 「ほう・れん・そう」を心がける

教職員への報告・連絡・相談を心がける。例えば、交流会の準備状況の報告や内容の相談、食事前や移動前後の人数点呼の結果報告、トラブル発生時の報告、体調の相談などを行う。また、インドネシアの学生も含めた学生同士の情報共有や意見交換も欠かさないようにする。

#### ⑦ 体調管理に努める

現地の寒暖差は激しい。日中は暑く、夜明け前は寒い。実際、筆者は薄手のダウンジャケットを着て就寝したぐらいである。あわせて、食生活の違いや慣れない環境、日々の活動とその準備に没頭し、体調を崩す場合がある。また、活動期間の前半に頑張り過ぎて、後半息切れする場合もある。したがって、日本から持参する荷物の検討と、現地ではペース配分を考えながら、休めるときはしっかりと休養をとることが望ましい。

#### ⑧ さまざまなことに興味をもつ

IWCでは貴重な体験ができる。この機会を生かして、多様なことに興味をもってほしい。例としては、アスラマの子どもたちの生活状況や入所の経緯、イブたちの仕事内容、アスラマの運営や機能、アスラマがある地域のこと、IWCが継続できている理由、キリスト教や教会のこと、インドネシアの文化・自然環境・政治経済状況、日本とインドネシアの関係などが挙げられる。

### 3. 第30回の成功に向けて

第29回IWCに参加した学生は、情熱と目的意識をもって活動に取り組んだ。そしてさまざまな経験を積んだ。この学生の1人ひとりが、「活動をより良くするためには何が大切か」についての考えを持っている。第30回の学生は、IWCの先輩に積極的に尋ねてほしい。そうすれば活動を成功に導くための、数多くの示唆が得られるはずである。

第30回の学生には、IWCの先輩からの助言や今までの報告書などをもとに過去の活動を踏まえたうえで、自分たちの色を出した素晴らしいIWCにしてほしい。

## 第29回IWCの引率を終えて



学生支援課 木戸裕也

第29回国際ワークキャンプ（IWC）の引率をして感じたことは学生の逞しさとチャレンジ精神の旺盛さであった。日本とは異なる文化、環境のなかへ物怖じせず溶け込み、様々な行事をこなしていく学生達をみて非常に頼もしく思った。

学生達は、バリ島到着日に出会ったインドネシア学生達と、勉強してきたインドネシア語を交え会話をし、すぐに仲良くなっていった。プログラムの活動拠点となるプリンビンサリ村到着後も、児童養護施設（アスラマ）にいる子供達をはじめ、施設職員の方々ともすぐに打ち解けていた。それぞれ違う国に生まれた者同士だが、違いを認識したうえでお互いを受け入れる姿勢があつてこそだと思う。また、それを難なくやって遂げるところは、さすが海外でボランティアをしよう！という精神がある学生達だと思った。

今回のボランティアワークは、プリンビンサリ村から車で20分ほど走った所、ムラヤにある児童養護施設内の川の護岸壁工事の手伝いで、岩やセメント用の砂を運ぶ作業だった。役割分担を明確にし、適度な休息も取ることで段取りよく作業を行うことができた。この分担制の成果は現地の方々に食事（カレー）を作る際に、最も顕著に出ており、それぞれが自分の役割を全うすることで、美味しいカレーを現地の方々に振る舞うことができた。

ワークの前に入村式が行われたのだが、そこでの音楽、踊りは印象強く残っている。中でもガムランという打楽器は独特の音色を奏でていた。入村式後も現地の方が最後の離村式に向けての練習のため、近くの教会で楽器を演奏していたのを、ほぼ毎晩枕元で聞いており、今でも耳に残っている。

私達は地元の学校をいくつか訪問した。地域柄もあると思うのだが、現地の生徒達はみな熱心に学生の言葉に耳を傾け、用意したミニゲームも本気で取り組んでいた。事前準備の努力もあると思うが、学生達の一生懸命な姿勢が現地の生徒達を「一緒にやろう！」という気にさせていたと思う。学生達はワーク以外にも積極的に行動しており、早起きして施設の仕事を見学する、朝ホームステイ先から施設までの道中、ゴミ拾いをしながら来るなど、皆自分に何ができるかを考え、できることから行動していた。

アスラマの近くにはワルン（商店）があり、飲み物やお菓子などを購入することができた。私は日々ワークの後にマンディ（行水）をし、その後に買い物に行くのが日課になっていた。店主のおばちゃんと値段交渉をすることが楽しく、良い思い出となっている。一度溶けてしまってから再度凍り、破裂し

たような形のアイスクリームを食べた際は、デンパサールからこの村までの輸送の苦勞を知ったような気がした。

学生の皆さん18日間お疲れ様でした。ボランティアワークをはじめ、現地の生徒・子供達との交流、日々のミーティングや英語での報告会など盛りだくさんのプログラムで、あっという間に18日間が過ぎてしまったのではないのでしょうか。ここで経験した出会いや別れ、複数の人間で一つのことをやり遂げる難しさや達成感など、仲間と学んだことはたくさんあるはずです。是非これらの経験を残りの学生生活だけでなく、社会に出ても活かしてもらい活躍の場を広げてもらいたと思います。

最後に、今回IWCで関係した全ての方々に感謝いたします。Terima kasih !



## IWC29 Member introduction

### A班

芥子 桃佳	英語◎。頼れる姉御肌,マダム=ケシ
石橋 朔	29期のツッコミ担当。絶対的参謀。
林 周	冷静。けどな、時々見せる笑顔がイイネ、アマネ
佐藤 匡	秘密道具? 要らねえよ、俺が助けてやる。
増田 俊輔	The most cool boy. 「かつこいい!」「、、、」。
フェビィ	日本語ベラベラ。フェビィの踊りに全29期が惚れた。

### B班

高岡 大毅	我らが隊長。盛り上がり足りない? ちょっと行ってくる。
芝山 みちる	抜群の安心感。スレンダー美人。
大本 航平	音楽のことなら任してね。うーん、ちょっとwait。
大口 麗王	滲み出るお父さんオーラ。でもね、レオさん。クエ食べ過ぎ、、、。
倉部 拓実	ばっち。優しいっち。物事を深く考えるっち。
デオ	デオの周りには自然に人が。Nice (bad)boy☺

### C班

西川 誠一郎	「え!! 天然じゃないっすよ!!」気づいたナイスキャラ。
岩田 莉菜	子ども達に人気系かわいい系ピンク系素敵女子
廣澤 真子	縁の下の力持ち。みんなに笑顔をお届けます。
永本 愛理	えりスマイルでみんなを包容。力仕事も頑張るよ!
宮下 捷	IWCの塩顔イケメン、心もイケメン!
ブルーノ	ワイルドバーテンダーボーイ。But you're gentle man (笑)

### D班

奥村 真弘	俺さあ、抜けてるように見えて抜けてないんやんかあ。良さはギャップ。
牧野 拓弥	何回生とか関係ない? どこか可愛い気のある現役柔道部。
奥野 なつみ	男女問わず愛されるキャラ。天使。君は大天使。
井須 奈々絵	小顔×弾ける笑顔=全メンズの心を鷲掴み。
岩永 周子	ついに現地で開花した九州のイジられゆるキャラ最恐弓道部。
デリー	インドネシアン美人。照れやすい元気一杯の女の子。

### 引率教員&スタッフ

チャブレン	時には厳しく、でも時には厳しく。みんな大好き我らの団長。
梅谷 進康	サッカーの時の梅やんは忘れない。核心を突く助言に感謝
巖 圭介	おじボックルMrイワオ。トッケイに興味津々。完璧な英語。
木戸 裕也	29期の頼れるお兄さん。レディースからの人気爆発。
石井 美和	全てのケアは任せてね。いつもみんなを見てくれていました。
スィクラマ	幸せがつまっています。愛し愛される大きな紳士。
フォルマン	Mr Taxi。実はイジられてたお茶目な立役者

## インドネシアの学生

まず初めに、私はインドネシアの学生に感謝の気持ちでいっぱいです。私達は、インドネシアでの18日間を日本の学生のみならず、インドネシアの学生と共に生活をしました。私たち日本の学生は、インドネシアの文化を知らないままインドネシアに行き、沢山の驚きと共に沢山、迷惑をかけてしまいました。どの学生もトイレにトイレットペーパーを流してしまい、詰まらせてしまったということが一度はあったのではないかと思うほどでした。その中でも、沢山サポートしてくれて、沢山教えてくれました。そんなインドネシア学生に感謝の気持ちでいっぱいです。

インドネシアの学生は、日本の文化についてとても興味があり、沢山の質問を私たちに投げかけてくれました。コミュニケーションを取るのも、言葉のみならず、一緒にスポーツをしたり、ワークをしたりする中で生まれるコミュニケーションもあり、あっという間に仲良くなりました。初めて会ったとは思えないくらい安心感がありました。

実際に学校を訪問し、日本文化プログラムをするという時も、インドネシアの学生がインドネシア語で子ども達に説明をしてくれて、私達はそれを見守るということが多かったです。インドネシア語のできない私達は、せめてもっと英語の勉強をするべきだったと感じたことも少なくありませんでした。交流会や日本文化プログラム、協会訪問でインドネシアの学生と日本の学生がコミュニケーションを上手く取れなかったことから、失敗を招いたり、インドネシアの学生に勘違いさせてしまったりしたこともありました。しかし、いつも互いにサポートし合い、なんとか乗り越えてきました。

初めは長いと思っていた18日間はインドネシアの学生と一緒にいてくれたおかげで楽しめて、あっという間に終わってしまいました。気づくと残り日数もわずかとなり、別れの前日、インドネシアの学生と朝方まで話をして過ごしました。空港での別れの時、互いに抱き合ったり握手をしたりして、涙を流しながら別れを惜んでいる学生がほとんどでした。

私たちは、日本の学生のみでのワークキャンプではなくてよかったと心から思いました。同じ世代のインドネシアの学生が居たからこそ、わからないことを聞けたり、相談したりすることもでき、みんなが無事にワークキャンプを終えることができたのだと思います。沢山のことを教えてくれたインドネシアの学生に心から感謝しています。



## 2015年度 第29回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表

月日	曜日	時間	日 程	備 考
8/18	火	8時30分 8時30分 9時00分 11時00分 16時45分 17時05分 18時00分 19時00分 22時00分	関空4F中央コンコースに集合（服装ユニフォーム） 点呼 搭乗手続き(関西国際空港) GA883便にて出国 (所要時間6:45 時差-1時間) デンパサール空港到着 入国手続き ホテルチェックイン 夕食、インドネシア学生と合同オリエンテーション 就寝	荷物を持って集合  パスポート、旅行保険証等を忘れないように  入国手続き後バス移動 部屋割発表 自己紹介、ユニフォーム授与式等  プリ・サロン・ホテル・デンパサール泊
8/19	水	7時 7時15分 8時30分 9時 12時30分 13時30分 16時00分 18時00分 19時30分	朝の集い 朝食 日本・インドネシア学生 ホテルを出発（Tシャツ） 一部引率スタッフ日本領事館、バリ日本人会訪問等 プリンビンサリ到着、昼食 ミーティング ホームステイ先へ 夕食 ミーティングなし。夕食後各自ホームステイ先へ 帰宅、就寝	しおりを忘れないこと 両替用の五千円を集める ホテルチェックアウト：ソカでの点呼を忘れないこと 表敬、年会費納入、買物、両替等（担当者2名） アスラマ内見学、スタッフ紹介等  アスラマの子どもが各自案内  ホームステイ先家族とお土産を渡すなど交流  プリンビンサリ泊
8/20	木	7時 7時15分 8時 9時 12時 12時30分 15時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ出発（ワークの服装で） ワーク開会式 プリンビンサリへ移動 昼食 ミーティング 夕食 ミーティング 帰宅 就寝	第5アスラマ到着後、入村式準備を手伝う ワーク開始  日本語プロジェクトのため  プリンビンサリ泊
8/21	金	7時 7時15分 8時 12時 14時30分 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 出発：ムラヤ公立高校訪問（服装ユニホーム） 昼食・休憩・着替え ワーク プリンビンサリへ移動 夕食 ミーティング 帰宅、就寝	日本語プロジェクト 2年・3年の計4クラス 第5アスラマ  各自ホームステイへ帰宅  振り返り  プリンビンサリ泊

8/22	土	7時 7時15分 8時 8時30分 12時 12時30分 13時30分 18時 19時 21時30分	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク プリンビンサリへ移動 昼食・休憩 ミーティング 夕食 交流会 学生と子どもたち 帰宅、就寝	日本食班係りはショッピングへ  交流会準備          プリンビンサリ泊
8/23	日	7時 7時15分 8時30分  12時30分 14時 18時 21時30分	朝の集い 朝食 プリンビンサリ教会訪問（服装ユニフォーム）  昼食・休憩 昼食準備 日本食パーティー（服装ユニフォーム） 帰宅、就寝	    ホームステイ先家族と子どもたちを招いて プリンビンサリ泊
8/24	月	7時 7時15分 8時 8時30分 11時30分 12時 14時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク プリンビンサリへ移動 昼食 振り返りミーティング 夕食 小・中学校訪問のためにミーティング 帰宅 就寝	第2アスラマ  第2アスラマ       プリンビンサリ泊
8/25	火	7時 7時15分 8時 12時 12時30分 14時30分 16時 18時 18時45分 20時	朝の集い 朝食 小・中学校訪問・交流（服装Tシャツ） 小学校チームはムラヤへ移動 昼食・昼休み ワーク プリンビンサリへ移動 夕食 子ども達のDVDを鑑賞 帰宅・就寝	2グループに分かれて  第5アスラマ     子ども達のバックグラウンドを知る プリンビンサリ泊
8/26	水	7時 7時15分 8時 11時 13時 14時30分 16時 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 バニユボ村へ移動 バニユボ村到着見学 昼食 フリータイム 引率者、ホストファミリー訪問 夕食 フリータイム 帰宅、就寝	要マスク・飲み水 見学後プリンビンへ移動 第2アスラマ  二手に分かれる 第2アスラマ 子ども達の勉強の邪魔をしないこと プリンビンサリ泊

8/27	木	7時 7時15分 8時 8時30分 12時 15時 18時 18時45分 20時	朝の集い 朝食 ムラヤへ移動 ワーク 昼食・昼休み ワーク 夕食 ミーティング 帰宅・就寝	第5 アスラム 記念碑作成 第2 アスラム 振り返り  プリンピンサリ泊
8/28	金	7時 7時15分 8時 8時30分 12時 15時 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 看護学校訪問出発（服装Tシャツ） 日本語プロジェクト 昼食 ワーク プリンピンサリへ移動 夕食 エヴァリュエーション・ミーティング I 帰宅、就寝	第5 アスラム   最終振り返り：文章作成 プリンピンサリ泊
8/29	土	7時 7時15分 8時30分  12時 15時 16時30分 18時 19時 20時	朝の集い 朝食 運動会準備  昼食 運動会 エヴァリュエーションミーティング II 夕食 エヴァリュエーション作業 帰宅、就寝	班によってはエヴァリュエーション文章 を作成  子どもと遊ぶ 日本語文章完成：原案プリントアウト  プリンピンサリ泊
8/30	日	6時45分 7時30分 12時 13時 18時 19時 20時	朝の集いなし 朝食 出発（服装ユニフォーム） 昼食・昼休み エヴァリュエーション・ミーティング III 夕食 エヴァリュエーション作業 帰宅、就寝	アンビアサリの教会へ：学生歌披露  英文作成  英文完成 プリンピンサリ泊
8/31	月	7時 7時15分 8時 12時30分 15時00分 18時  20時	朝の集い 朝食 フリータイム 昼食、昼休み フリータイム 離村式（民族衣装またはバティック） 会食はバビグリンです。 就寝	ヤシ砂糖工場見学  ホームステイ先に滞在可 可能であればインドネシア語で謝辞 ミーティングはありません プリンピンサリ泊

9/1	火	7時 7時15分 9時 13時  15時30分 19時 19時30分 20時 22時	朝の集い 朝食 プリンピンサリ出発（服装Tシャツ） 第4 アスラマ・ウンタルウンタル到着、 昼食 タナロットへ出発 ホテル着 夕食 エヴァリユエーション発表練習 就寝	スーツケースを持ってくること 半ズボン・サンダルOK ウンタルウンタルにて交流会      全員で練習 プリ・サロン・デンパサール・ホテル泊
9/2	水	7時 7時15分 8時30分 9時30分 12時 16時  20時 22時	朝の集い 朝食 文化探訪（服装自由）ロビー集合 パロンダンス見学 ウブドにて自由行動 マタハリモールにて自由行動 19時まで自由行動 ホテル着 就寝	ヒンドゥ文化 見学後、近隣のお店でお買い物 昼食各自自由：15時集合しマタハリへ 夕食各自自由 夕食は各自で食べる ホテルでは自由行動です
9/3	木	7時 7時15分 8時  10時 10時30分  11時 12時 14時  16時 21時 22時30分	朝の集い 朝食 ディアナプラ大学訪問出発（服装ユニフ ォーム） バリ・プロテスタント教会本部へ移動 エヴァリユエーション（服装ユニフ ォーム） アガベール・フェスティバル 感謝の昼食会 スサドゥアの五大宗教施設へ移動  クタのディスカバリーモールへ出発 出発（服装自由） 空港へ出発：搭乗手続き	パスポートの点検 ホテルをチェックアウト   バリプロテスタント教会本部  (アガベール：バリ風のキリスト教儀式)  インドネシア学生とのお別れ会をお勧め します 夕暮れからビーチに出るはいけません
9/4	金	24時35分  8時50分 9時25分 10時00分	GA882便にて出国 (所要時間 7:00、時差 + 1 時間) 関西国際空港 入国手続き 解散	機内泊

(17泊18日)

注：ワークの内容は第五アスラマの塀造りを予定

## テーマ「Kebahagiaan」

今年で29回目を迎えたIWC（International Work Camp）。

IWCは、のテーマは、「Kebahagiaan」で日本語では「幸せ」という意味である。このテーマには、国境を越えて幸せを分かち合えるようにという思いが込められている。私達IWC29の全メンバーは引率教員はテーマを胸に刻み一致団結してボランティア活動に励んだ。

## 募金活動

目標金額 5万円

- 活動目的 アスラマの設備改善
- 活動期間 7/6～7/9. 7/20
- 活動場所 チャペル前
- 活動時間 昼休み（12：30～13：20）
- 活動人数 20人

私達IWC29は計5日間にわたり募金活動を行いました。晴天!! なんて日は一日もなく大雨や強風にあおられまともな募金活動ではありませんでした。それでも休むことなく集まってくれたメンバーを誇りに思います。

募金活動をすることによって小さいことかもしれませんがボランティアをするきっかけになれたこと、その募金で子どもたちが笑顔になれるとわかれたことが一番の経験になりました。募金してくれた皆様本当にありがとうございました。

日付	金額
7/6	¥5,188
7/7	¥7,266
7/8	¥22,464
7/9	¥15,473
7/20	¥5,767

合計金額 ¥56,158

## 事前研修（合宿含む）

毎週金曜日の5限目にインドネシア語やインドネシアの環境について学びました。また、ダンスや歌、あいうえお表の作成など、することが具体的に決まっていく中で、時間の少なさに焦りを感じました。お昼休みにも集まってみんなで協力してそれぞれが頑張りました。

合宿では、日本語授業を実際のグループに分かれて一通り練習をすることで、イメージをつかむことができました。他のグループの練習を見て、「ここはもっとこうしたほうが良い」とか「それいいな」とかお互いがアドバイスをし合って、良いところは真似して、みんなでより良い授業へ向かって高めあいました。合宿は、出発前にみんなが揃って集まれる最後だったので歌やダンスも繰り返し練習をして、完成度を高めていきました。

初めて全員で顔合わせをしたときは、仲良くなれるか、うまくやっっていけるか、みんなが不安を抱いていたと思います。しかし、事前研修や合宿で同じ時間を過ごすことで、共有することが増え、一体感が生まれました。出発前にみんなと仲良くなれてよかったです。



## インドネシアナイト

場所 ヨハネ館

日時 7月3日

事前研修の一環として今年初めて開催されたインドネシアナイトに参加することとなりました。私達はAKB48の「会いたかった」のダンスとインドネシアで有名な曲である「ラスカルプランギ」を桃山学院のインドネシア学生と披露しました。また数人のIWCの日本の学生はインドネシアの伝統的な衣装を着させてもらいファッションショーに出演しました。インドネシアナイトに参加することによりインドネシアについて深く知ることができました。

ダンスと歌の練習ではとくにダンスはたくさんの時間をかけて練習しました。私たちのほとんどがダンスの経験がなく、ステップや動きなどを覚えることや皆と合わせて踊るのに苦労しました。当日はみんなで息を合わせ笑顔でダンスをすることができました。

インドネシアナイトが初めてチームとして行動する行事だったので皆と協力し、助け合ったことで全員の距離感が縮まり、仲を深めることができました。



## グリーンビンサリ村

私達が滞在していたのがグリーンビンサリン村です。この村の最初訪れた時はとても素敵でどかな村だと感じられました。実際、村の人達は気軽に挨拶をしてくれたり、日本語で何か話しかけてくれたりと村の人達も素敵な人達ばかりでした。また自然も豊かでヤシの木や芝生などもたくさんありきれいな場所でした。しかし、よく見ると道の側にゴミなどがたくさん捨てられていていましたがそれをあまり村の人達は気にしていませんでした。そのためかハエがとても多くいて不衛生な部分もありました。またハエ以外の虫などはほとんどいなくおそらく感染症対策ためだと聞き人の命を守るためには仕方ないと思いました。

アスラマからホームステイ先の家までの道のりに番犬の役目をきちんとしている離された犬達がたくさんいました。アスラマからすぐの人たちはあまり吠えられたりはませんが、家まで遠い人は囲まれたり追いかけられたり吠えられたりと怖い思いをたくさんした人もいました。とても危険でしたが、番犬たちも私達を認識するとそのようなことも少なくなりました。

ワルンというインドネシアでの売店みたいなところがたくさんありました。主にアスラマに近いワルンを利用しましたが少し遠いワルンは品ぞろえもよく近いワルンよりも安く時間などに余裕があると少し足を延ばしたりもしました。

グリーンビンサリンでは何かの行事があると村の人は参加しなければならないというルールがあり、参加できない場合は罰金がでる制度があります。そのためか村の人の交流も多くイブの家に違うイブなどが遊びに行くことや夜に集会などをするなど地域の交流はとても充実しているものと感じる場面もありました。村の十字路のところの施設には週末子ども達が空手をしているところがあった。またその隣には簡易ではあるが公園があり、バレーボールのネットなどがあった。

短い間でしたが、グリーンビンサリン村はIWC29の第2の故郷だと思えました。それもすべて私達を自分の子どものように温かく迎えてくれたイブ、パパ。いつもお世話になったアスラマのイブ、スタッフ。そして私達を支えてくれた全ての人のおかげです。本当にありがとうございました。



## アスラマ

アスラマは日本語で「学寮」という意味であり、つまり児童養護施設のことです。バリ島にある児童養護施設のうち、ウィディヤ・アシ財団が7ヶ所のアスラマを運営しています。アスラマで生活をする子供たちは両親との死別や育児放棄、虐待など様々な理由がみられるが、子供たちの大多数は貧困という理由で入所しています。

### 第2アスラマ

グリーンピンサリ村にある第2アスラマは1975年に設立しました。1987年IWCの活動が始まって以来、本校の拠点とさせてもらっているとても関係の深い場所です。ここで暮らす子ども達の8割は小学生であり約70%の子ども達が貧困理由で入所しています。

第2アスラマ内では豚や鶏などを飼っています。豚は外部に売るために飼育しているが、豚の糞尿も無駄がないように畑の肥料として利用するなど様々な工夫がされている。畑では野菜や果物を育てており子供達の食糧としている。私達は最後のワークを第2アスラマで行い畑を大きくする作業を手伝いました。

私達は第2アスラマに思い入れがあり食事やミーティング、日本食パーティーに交流会をこの場所で行いました。私達が日本語の授業やワークで疲れて帰ってきたとしても子ども達の笑顔を見ることによりとても癒され支えになりました。

### 第4アスラマ

ウンタルウンタルにある第4アスラマは1981年に財団により設立されました。ここで暮らす子ども達は去年までは全員女の子であったが今年から男の子も一緒に暮らしています。大半が女の子で男の子は3、4人程度でありました。小学生から大学生まで住んでいて一部屋に4人ほどで暮らしています。建物はとても綺麗にされていてとても心地良い場所でありました。

この場所はカバンやアクセサリなどを製作しておりミシンを使い将来の仕事における訓練となっています。

私達はこの場所でも交流会を行いました。私達はAKBの「会いたかった」を踊り子ども達と共に、だるまさんが転んだをしてとても盛り上がりました。子ども達はダンスやKiroroの「未来へ」を歌ってくれました。文化交流をすることで私達は非常に楽しい時間を過ごすことができました。

### 第5アスラマ

グリーンピンサリ村の隣町であるムラヤに第5アスラマがあります。この場所は図書室やパソコン部屋もあり勉強することにおいて非常に設備が整っていました。ここで暮らす子ども達は中高生が中心とされていてとてもしっかりしている子どもが多くいました。

私達はこの場所でワークをしました。雨季の時に土地を削られることや近隣の村人に物を盗まれること、子どもが誘拐されることを防ぐため私達は現地にいる職人と共に石で壁を作る作業を行いました。学校から帰ってきた子ども達が手伝ってくれチームワークの大切さを感じることができました。

### アスラマの子ども

私達が拠点とした第2アスラマでは子ども達の朝は非常に速かったです。まず、イブが4時頃に起きて朝食の準備を始めます。子ども達は5時前に起きてイブの手伝いやそれぞれの準備を始めます。5時

半には全員が食卓につき朝の祈りをして朝食を食べます。6時半頃には中学生は車で小学生は学校が第2アスラマの近くにあるので歩いて学校へ向かいます。昼になると子ども達が帰ってきてご飯を食べ昼寝の時間に入ります。2時間ほど睡眠をとった後は自由時間であり外で遊んだり勉強をしたりします。夕食後は子ども達の勉強時間であり9時頃には子ども達は寝始めます。

私達が訪れた全てのアスラマに共通して言えることは子ども達が常に笑顔でいることでもあります。もちろん喧嘩もするし涙を流す子供もいるが時間がたてば笑顔になります。子ども達は親と一緒に暮らすことができない理由も理解しているでしょう。それでも毎日笑顔で過ごしているのだ。貧困村からアスラマに来た子供は学校に通うのは初めてだ、そして食事の時は初日から1週間くらいまで吐くほど食べるといいます。毎日食べることができるを知り安心して自分が食べることのできる量を知ります。子ども達は勉強できることのありがたさ、ご飯を食べることのできるありがたさを知っているのです。子ども達は日々強くたくましく成長して1日を精一杯に生きているからこそ笑顔が生まれるのです。様々な理由があり親と毎日を暮らせない子どもが住むアスラマは子供にとって特別な場所であることに間違いないです。しかし、アスラマに行くこともできず貧困で毎日の生活を苦しんでいる子どもはまだ多々います。私たちに何ができるだろうか。答えなど決して見つかることはないです。しかし少しでも多くの子ども達の笑顔を守るために私達は常に考えて現在の状況を多くの人々に知ってもらわなければなりません。



## ホストファミリー

私達は、13日間、プリンビンサリ村のホストファミリーの家で過ごしました。

初めて会ったのは、アスラマの子ども達それぞれのホストファミリーの家まで案内してくれました。また、日本食パーティーでは、私達がお世話になっていたホストファミリーを招待して、一緒にカレーを食べました。いつも朝アスラマに行くときには、笑顔で見送ってくれました。夜は、私達が遅く帰ってきても、寝ずに起きて待っていてくれました。イブやパパは、とてもやさしくて、インドネシア語を教えてください、最後の日曜日には近くの観光に連れて行ってってくれたりしました。あまり、ホストファミリーと深く話をする時間がなくて、あまり話せなかったのもっと話せたらよかったと思います。

今でも、ホストファミリーとは、SNSを通じて連絡を取り合っています。



## 小学校訪問

8月25日、小学校を訪問しました。インドネシアに来て2回目の日本語プロジェクトで、前回の反省を活かそうという気持ちで向かいました。アスラマの子ども達もたくさんいて、みんなとても気さくで、授業も思っていたよりスムーズに進めることができました。衛生班の歯磨きについての紙芝居をし、あいとお表も大きな声でみんな読んでくれました。名札作りもスタッフが1人1人に付き添って書いてもらい、自己紹介で好きなものを発表してくれました。折り紙ではスタッフの中で準備に時間がかかってしまいましたが、子ども達は喜んで作ってくれ、名札などにつけてくれていました。かるたは全員で輪になって行い、カラーバスケットは椅子が使えなく、床にテープを貼って区切り対応しました。2つともとても盛り上がり、子ども達と一緒に私達もすごく楽しむことができました。時間があつたので簡単なゲームを追加して行ったり、写真撮影をしたりして、無事に授業を終えることができました。事前に子ども達の時間割や授業で使うインドネシア語をもっと覚えておくべきだったなと反省点もありましたが、インドネシアの学生とも協力でき、子ども達もとても楽しんでくれて本当に良かったです。



## 日本語プログラム（中学校）

中学校での日本語プログラムではあいうえお表、日本語で名札づくり、カラーバスケット、折り紙等を行いました。

このプログラムでは2班が1クラスずつ分かれ行いました。

中学校では日本語の授業をしていることもあり名札づくり、自己紹介等のプログラムはスムーズに終えることができました。このプログラムではあらかじめ決めていたゲーム、プログラム内容をただ行うだけでなく、クラスの雰囲気や子どものゲームの参加度、盛り上がり等によって各プログラムの時間調整、また、日本の学生の説明だけではうまく伝わらないことはインドネシアの学生がフォローしてくれたり各班臨機応変に取り組むことが出来ました。また、この中学校にはワークを行っている第五アスラマの子どももおり、このプログラムがきっかけで関わりを持つことができた子どももいました。

中学校での授業は生徒みんなが授業に協力的で私たち学生も楽しく授業を行うことができました。また、日本語の授業はインドネシアの学生の協力があつたからこそ生徒に楽しんでもらうことができたと思います。



## 高校訪問

### <授業内容>

私達が訪問した高校は、1クラス30人ぐらいで4つの班に分かれて授業を行いました。高校生は元氣いっぱい日本語も上手で、50音の読み合わせ・名札作り・自己紹介と予定通り進めることができました。日本語を英語に訳した説明を日本の学生が読む、そしてインドネシアの学生に翻訳してもらうというやり方で授業を行った班とインドネシアの学生に事前にインドネシア語を教わりインドネシア語で挑戦したやり方で行った班もありました。かるた、カラーバスケット、折り紙をメインとしたゲームを行いました。

### <Keep 良かった点>

- 子ども達の反応が良かった。子ども達と交流ができました。  
高校生はとてもノリがよくゲームも全員が全力で取り組んでくれました。そして私達が説明をしている間は静かに聞いてくれたおかげで授業をよりスムーズに行う事ができた。
- 臨機応変に行動することができました。  
臨機応変に行動する事がいかに難しいか、大切かという事に気づくことができました。
- 事前準備が良かった。  
4月から事前準備を行い、少しだが模擬授業も日本で行いました。昨年の先輩方にアドバイスを貰いできるだけ準備を日本で行いました。そして何よりも高校を訪れる前にインドネシアの学生が授業内容を理解してくれていたおかげでスムーズに授業を進めることができました。

### <Problem 反省点>

- 始まりの時間、休憩の時間を把握していませんでした。  
日本語プロジェクト初日だったということもあったのだが、私たちが予定していた時間とは違うタイミングでの休憩の合図などに困惑がありました。
- カルタの行い方が悪かった。  
人数とカルタの比率が合っていないかった。カルタの面では臨機対応にチーム戦にするなどの対応をとっさに出来なかったために、カルタに触れないという問題を起こしてしまいました。
- 子ども達の管理ができませんでした。  
休み時間後などに自分のクラスの子どもを呼び戻すのに時間がかかりました。

### <Try 30期のメンバーに向けて>

- 現地の流行を調査する
- かるたの量を増やす。(1クラスに1セット。)
- それぞれのクラスの特徴を大切に。無理に全クラス同じ方法にしようとしなくても良い。
- 事前準備をしっかりすれば大丈夫。することが大事。
- 授業終わりに高校生たちは携帯電話を持っている子が多いので写真をととても好む。写真を撮るという時間も全体のスケジュールに考慮したほうが良い。

### <感想>

日本語プロジェクトの初めての場だったのでメンバー全員が緊張していたけれど、子ども達や先生方

の元気と優しさで私達自身も本当に楽しみながら授業を行うことができました。何よりインドネシアの学生のサポートがあったからこそ行えた授業だったと思いました。高校生も授業が終わったにも関わらず、たくさん話しかけてきてくれてメンバーの全員が大スターのような存在になったかのように見えました。このプログラムが少しでも日本興味を持つきっかけになってくれればと思います。



## 看護学校訪問

看護学校はIWC29学校訪問3回目の日本語プロジェクトということもあり万全の状態で行うことができました。日本語文化プロジェクトとしてあいいうえお表の読み上げ、名札作り、折り紙、かるた、じゃんけん列車、フルーツバスケットなどを行いました。日本語に対してこちら側の考えていたよりも教育が進んでおりスムーズなプロジェクトの進行を行うことができました。日本語プロジェクトについては看護学生が真面目に取り組んでくれたこともあり、どのプログラムも楽しく盛り上がりのある授業を行うことができました。またこちらが事前に想定していたよりも男子の人数は多く教室の4分の1程度を占めていた。そのため、これまでの学校訪問と授業内容には大きな相違点がなかったため授業の進行や時間の割り振りが想定の範囲内に収まったものだと考えられました。

このような現地の高校生とかかわる機会はこれからの人生やこのIWCを通してもほとんどないものと思われるので私達により多くの経験を与えてくれた看護学校訪問を本当にありがたく感じます。



## ワーク内容

私達の今年のワークの目的は雨期の時に土地を削られるのを防ぐためと近隣の村の住人に物を盗まれたり子どもを誘拐されるのを防ぐための防犯用に第5アスラマ・ムラヤに壁を作る事と第2アスラマ・プリンビンサリの果物や野菜の収穫物を増やすために今ある畑を大きくすることの2つを目的に行いました。第5アスラマでの私達の作業内容は壁作りに使う石や砂を運ぶことでした。私達は少しでも作業を効率良くするために砂を運ぶ時はバケツリレーを行ったり重い石を運ぶ場合は二手に分かれて運ぶ範囲を決めてリレー形式にしたり多くの石や砂を一気に運ぶために一輪車を使って運んだりして1人1人の負担をできるだけ減らすためにいろいろと工夫しました。日中は暑かったが作業を止めないために休憩は4つの班に分かれてこまめにとった。第2アスラマでの作業は畑を大きくするために地面をクワとスコップで耕しました。



ワークの作業はともしんどかったがメンバー同士がお互いに声を掛け合い励ましあったり休憩のときの飲み物やお菓子がおいしかったためあまり苦にならずワークを進めることができました。またアスラマの子ども達も手伝ってくれたので子どもと触れ合いながら楽しくできました。しかし休憩時間が終わったのにもかかわらず切り替えができずワーク開始が遅れたり、ワークの時、インドネシア人の学生の意見を聞かずに自分達だけで作業方法を決めてしまった所は反省しなければいけないと思いました。

最後に私達はこのワークを通してみんなで1つのことをやり遂げる達成感やチームワークの大切さを身をもって学ぶことができました。また作業を機械でやらず人力でやることも日本にはできない体験ができたと思いました。このような体験ができ、関わったことに感謝しています。今後アスラマの子どもにとってより良い環境が与えられることを私達一同願っています。



## 日本食パーティ

8月23日（6日目）

アスラマで生活して慣れ始めた頃に子ども達や施設のスタッフ、イブ、ホームステイ先の家族に日本食を知ってもらいたいと思い振る舞いました。

具材は日本から持って行ったものと現地で日本食班が市場に買い出しに行ったものを使い、メンバー全員で協力して行いました。

### <反省点>

大きな反省点は無かったが、切る作業のときに包丁の数が少なく決まった人がほとんど切り出しをしていて負担がかかりました。他にも班ごとに時間で分けて交代しながら作業をしていたが炒めたり、煮込んだりする工程で分けた方が円滑に進んだと思う。

### <良かった点>

事前実習を日本でしていたので、慌てることなく進めれたことで楽しく協力できました。食べる時も子ども達やホームステイ先の家族と会話がいつもよりできて交流が深めれることができました。

## 交流会について

インドネシアで子ども達を楽しませる為の交流会は失敗の連続でした。失敗点及び反省点は大きく分けて3つあります。1つ目は、現地の調査不足（流行）について。現地に行く前に、事前準備をもっとしておけば成功に導けたと思います。事前準備はしていたけれど爪が甘かった。インドネシアでは、JKT48が人気と聞いていたのでその曲をしたら、現地の子も達が知らなかったし、知っている曲も同じアーティストで違うことが分かったので自分達の調査不足だったことを学ぶことができました。また、流行している曲や話題となる物をもっと調べて置くことにより+αとなり交流会をもっと盛り上げ成功できたのではないかと思います。

2つ目は、インドネシアでの報連相の徹底について。現地での交流会の日程、順番、練習期間、設営などインドネシアの学生・シクラマさん・全体の司会者に全部伝えられていなくて、スケジュール管理や打ち合わせができていませんでした。インドネシアの学生が、日本の学生がする交流会とは別の日程でインドネシアの学生の交流会があると聞いた現状であり、チームでの話し合いも曖昧でしたので交流会での動きをIWCのチームとして把握できていませんでした。現地での交流会で出す出し物を事前に変更を何度もしてしまい全員に連絡が行き渡っていかなくて対応力不足になってしまいました。また、交流会での出し物の順番が間違っていて現地の子も達を戸惑わせてしまいました。「SAYONARA」(※)という曲を途中で歌ってしまい「終わり？」となってしまいました。「SAYONARA」は、お別れの曲なので、最後に歌う曲だったので調査不足、報連相の徹底を怠ってしまった事により招いてしまった失敗の状態でした。報連相の徹底をする事により、スケジュール管理にもなる事、打ち合わせもスムーズになる事、チームワークが円滑に進む事などを学ぶ事ができたので日本で今度その様な事がないように徹底してこれからも行っていくべき事だと思いました。

3つ目は、相手の事を考えて行動することについて。現地の交流会の準備の時に、全ではないが各班に任せていたので相手を考えないで行動していた。また、みんなが子ども達を楽しませようと頑張っていて交流会をしましたが、空回りをしてしまい自分達だけが盛り上がりすぎてしまい、自分達だけで全部しようと思ってしまい一人の負担が増えこの様な状態になってしまったのだと思います。日本での事前準備から現地についてからも相手（仲間）の事は考えていたが、知らない土地で右往左往している中で考えることが疎かになってしまったので、臨機応変に対応する力と冷静に物を見る力も養っていけばもっと良い物になったと思います。

最後に、30期で行くときに必要だと思うことについて。引率者とIWCがチームとして理解し合うことが大切になってくると思います。毎年インドネシアに行っておられる方もいますし、スケジュール管理や当日の衣装、また、私達の失敗・反省を聞くことで次のIWCに活かすことができると思います。

## 教会

私達が滞在したプリンピンサリ村はバリ島のキリスト教徒の村です。しかし周囲にはキリスト教の村というのは近辺にはなく、ひとつ隣村まで赴くとそこはヒンドゥー教文化が見て取れました。このように隣村と宗教が全く違っていても激しい紛争が起こる訳でもなく同時に混在することは珍しく、大変興味深い島であるとバリ島は言えるのではないだろうか。前述したようにキリスト教の村であるプリンピンサリ村は建築物などがバリの伝統的な様式を取り入れたある種、特殊な光景でありこのプニエル(Pniel)教会も例外でない。敷地内には庭や池があり教会内部は天井が高く吹き抜けのようになっており、壁がなく何本かの柱で支える形になっているので外の景色も見えとても広い空間に感じられた。この場所で毎週日曜日に村の人々が集まり礼拝をおこなっています。私達も「I will follow him」という讃美歌をピアノ伴奏とともに歌うため、この日曜礼拝に参加しました。ちなみにこの「I will follow him」は「天使にラブソング」という映画でも歌われている讃美歌である。私達はこの曲を事前研修、合宿で練習したのだがその練習の段階ではメンバー全員の声小さく、そのような広い会場では到底聞こえないような声量でした。しかし着実に練習を重ねていき声が出るようになったものの、果たして教会の村の方々にきちんと聞こえるのだろうかという不安があったが、今までで一番大きな声で自信を持って歌うことができました。村の人々からも盛大な拍手をいただき目頭が熱くなるものがあった。2度目の教会訪問の際には、さらに大きな声でそしてピアノ伴奏も成功し無事に終了しました。

しかし私達には大いに反省すべき点もあります。日頃のワークの疲れからか、約3時間の礼拝の途中で寝てしまうメンバーが続出してしまったことや、事前に賛美歌を歌う隊形に素早く隊列できる座席位置を決めていたものの、実際の会場ではそのようにうまくいかず座るだけで時間をかけてしまったことがあげられます。この2点に関しては大変悔しい思いをした。

そんな私達に対しても、礼拝が終わり退出する際にひとりひとりに熱い握手を交わしていただいた村の人々に大きな感謝をささげます。



## バニユポ村

バニユポ村とは、バリ島の北西部に位置している貧困の村です。そこへ急ぎよ私たちは行くことになりました。バニユポ村へ向かうまでのバスの窓から見える景気は、段々と変わっていったのが分かりました。明らかに生活が貧しい場所へと向かっているのを感じました。

そしてバニユポ村に到着しました。辺り一面にブドウ畑が広がり、その下を歩いて人々の住む家を訪問しました。足元はすごく悪く、あちらこちらに大量のゴミが地面に散乱していました。ここで人が生活しているのかと、ただただ驚きました。しかも一つの家に何十人という数家族が暮らしていて、床も壁も屋根もなく外にあるマンディ場すらボロボロでした。十分な水もなく、その光景は想像を遥かに超えるものでした。

その他にも、家のすぐ側には、牛、豚、ニワトリ、たくさんの家畜がいました。まるで共同生活しているようでした。本当に日本では考えられないことばかりで、ただ呆然としました。

この貧困問題が原因で、子ども達が学校へ行くことができません。実際にバニユポ村からアスラマへ行き生活している子ども達も何人もいます。だが、その中でもみんなが行ける訳ではありません。

これらの貧困問題をどう解決すればよいのか、考えても解決策がでてこないです。自分達は考えることしかできません。貧困は無限のループです。どうすることもできないのが悔しいです。私達はこのことを忘れてはいけません。これからもずっと忘れることはないでしょう。

## 離村式

8月31日

この日がプリンビンサリ村で夕食を食べる最後の日であり、子ども達と一緒に過ごす最後の夜になりました。最後ということもあって会場も飾り付けされ、ホームステイ先の方々も呼んでにぎやかな離村式でした。IWC29のメンバーは各ホームステイ先で用意してもらったパティックという伝統衣装をきて離村式に参加しました。(中にはI♡BALI Tシャツを着ているメンバーやパティックがなくIWCTシャツを着ているメンバーもいました)

隊長の感謝の言葉、スィクラマさんのあいさつからはじまり、子ども達にはガムランの演奏や伝統的な踊りを披露してもらいました。食事はバリの伝統料理であるバビグリンという豚の丸焼きを用意して頂いたのですが、グロテスクな見目で驚きました。しかし本当においしくて、各自ホームステイ先の方とおしゃべりしながら楽しく頂きました。

最後はアスラマの子供たちやホームステイ先の方々とは写真をとったり、音楽にあわせてみんなで踊ったりしてパーティー状態でした。いざお別れとなると仲良くなった子ども達との別れは想像以上にさみしくて、泣き出してしまい号泣しているメンバーもいました。子ども達にたくさんありがとうと伝えて、別れを惜しんだ後、子ども達に「また来るね」と約束してその場をあとにしました。

改めて、アスラマのみんな、ホームステイ先の方々に出会えてよかったと思える一日だったと思います。



## 大学訪問

私たちはIWCで18日間を共に過ごしたインドネシアの学生が通っているディアナプラ大学を訪問しました。そこで図書館や寮など大学内を見学させていただき学長の話をお聞かせいただきました。

1987年に観光の教育訓練核として設立されました。急速に成長している観光産業のニーズに基づいて練習施設、環境施設の拡張がなされています。オーストラリア、米国、オランダへの交換留学。桃山学院大学にもIWCに参加していたインドネシア人学生の一人がこの秋留学してきました。

## エヴァリュエーション

### <概要>

- 日時 2015年9月3日
- 場所 ウィデイ・ヤアシ財団本部（デンパサール）
- 参加者 バリ・プロテスタント教会の代表者  
ウィデイ・ヤアシ財団職員・アスラマの関係者  
教職員・日本の学生・インドネシアの学生
- 形式 挨拶  
日本の学生5人インドネシア学生1人、計6人による活動報告

エヴァリュエーションとは最終日に18日間の活動を英語で報告するという活動の締めくくりです。様々な活動をしてきましたが、すべてはこのエヴァリュエーションでしっかりと報告するということが私達の役目です。最終日の締めを成功させるために多くのミーティングを行いました。これまでのエヴァリュエーションは学生が財団職員の方にいくつか提案をするといった形式でしたが、今年は①学んだこと②できなかったこと・後悔・反省③将来への展望・どう未来につなげるか④感謝、の4つにテーマを決め「IWCのプログラムが参加学生にどんな成果をもたらしたか」を報告するといった形式でした。発表者は数人でしたが話す内容を考えるのは学生全員なので全員の意見を取り入れた報告になったと思います。

4つのテーマを4つの班それぞれ1つずつ持って発表内容を考えましたが、最も大変だったのはインドネシアの学生との意思共有だったと思います。どうしても言語の壁があるので日本の学生の意見をインドネシアの学生に伝えたり、逆にインドネシアの学生の意見を理解したりすることが難しかったです。上手く伝えることができず何度か言い合いになったこともありました。また、日本語の内容の細かい部分に時間をかけすぎて日程通りにいかなかったときや、人任せにってしまったときもありました。ただでさえタイトなスケジュールなのに効率の悪い進め方やもめ事などで貴重な時間を無駄にってしまったことは反省点だったと思います。

しかし時間がない中でもきちんと最後まで伝えようと努力したことで、一人ひとりの意見がIWC29の「報告」になったと感じました。英語で伝えなければならないということでダイレクトに英語に触れる語学力を伸ばす良い機会であったと思うし、発表者は良い体験ができたのではないかと思います。

わたしたちのTRYは2点あります。出発前に前もって各々が英語に慣れていればスムーズに進められるということと、当日発表する人とそうでない人との温度差が生まれないように、最後の活動の締めとしてもチームで最後までやりきってほしいということです。次のIWC 30の方がこれらを実行してくれたらIWC 29の成果として次につながるのではないかと感じました。

## 文化探訪

### <タナ・ロット寺院>

バリ島中西部の海岸にある寺院でバリ六大寺院の一つです。16世紀にジャワから渡ってきた高僧ニラルタがこの地を訪れ、景観の美しさに目を奪われ、そして、「これぞ神々が降臨するにふさわしい場所」と村人に寺院の建立を強くすすめたとされています。予定では、行くことになっていませんでした。しかし、エヴァリュエーションの準備が早く終えることができたため、行かせてもらえました。

### <バロンダンス>

バロンとは、バリ島に伝わる獅子の姿の聖獣のことです。森の「バナス・パティ」（良気）の顕現であり、バリ・ヒンドゥーの善の象徴として、悪の象徴であるランダと終わりがなき戦いを繰り広げるストーリーでした。

### <ウブド>

ウブドは、バリ芸能・芸術の中心地です。一般に、「ウブド」とは、いろいろな村の集まった広域な地域を指します。ウブド王宮を中心に東西に延びるメインストリートのジャラン・ラヤ・ウブドと、ウブド王宮からモンキーフォレストへ南に延びるジャラン・モンキー・フォレストという通りは、ショップやレストランが立ち並び1日中地元の人や旅行者で賑わっています。ウブド王宮の向かいにあるウブド市場では、値段交渉をしながら楽しい買い物ことができました。

### <ヌサドゥア五大宗教施設>

プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー、イスラム、仏教の宗教施設が敷地内に隣同士で建てられているところです。イスラム教の施設では、施設内の写真を撮ることができませんでした。隣には、イスラム教徒のための学校が併設されていました。

### <マタハリ・ショッピングモール>

2階建のショッピングモールで、ブランドショップ、スーパーマーケット、飲食店が入っています。スーパーマーケットは、品揃えが豊富で安いです。丸亀製麺がありました。

### <ディスカバリー・ショッピングセンター>

クタの海岸沿いにあり、サンセットを見ることができます。お土産店が多く入っています。ショッピングセンターの周辺は、ホテルや店が並び賑やかです。

## 参加学生のレポート

### IWCでの軌跡

学生隊長 経済学部 2回生 高岡 大毅  
(ピィ隊長)



まず、IWCがどういったプログラムなのか説明したいと思います。IWCとは、インドネシアと日本の学生が力を合わせ、互いが同じ目標を持ち、その目標を達成するために何が自分にできるかを自分で気づくためのプログラムです。各メンバーがそれぞれの班（しおり班、記録班、衛生班、日本食班、日本語班）に分かれ現地から帰ってくるまでに任された仕事をこなします。現地では主にワーク（アスラマでの壁作り）をやりました。1泊2日の合宿などお互いの信頼を深め合うプログラムなども現地に行くまでに行います。現地では、ワークや国際交流会、学校訪問など様々なプログラムがあり自分がいかに行動できない人間かわかる素晴らしいプログラムでした。

ここからは現地で体験し学んだことを説明したいと思います。

現地に行き数々のプログラムをこなす中で私たちは多くのことを学びました。

1つめは行動することの大切さを学びました。IWCに参加した当初は何でも人任せで誰かがやってくれるだろうと思って自分から行動するタイプの間人ではありませんでした。IWCに参加し、隊長になった時も正直、副隊長が手伝ってくれるし自分は仕事をしなくてもいいだろうと思っていました。しかし、隊長の仕事をするようになり本当にこのままでいいのだろうかと思うようになりました。本当にこのまま人任せにしていみんな

を引っ張っていけるか、現地で行動できるか疑問に思いました。こんな考えだったからメンバーともめることもあったし喧嘩もしました。ですがメンバーと話し合い隊長としての自覚が芽生えました。隊長とはみんなを上から指示するのではなく自分が先頭に立って行動し、みんながよりうまくいくようにサポートするのが隊長の役目だと教えてもらいました。ですが、その時は行動することのむずかしさをわかっていませんでした。

現地に行き、隊長が行動しないといけない中で、正直、環境になれず海外でのボランティア活動でどのように行動していいかわからず気持ち的にしんどい時がありました。最初のワークの時も何をしていいかわからずみんなを困らせたかもしれません。でも副隊長の支えもあり、自分から行動しないと。と思い、ワーク中に積極的に行動したりみんなに声をかけたりと自分が最前線で行動できるようになりました。行動することにより今までわからなかった気持ちもわかるようになりました。自分から行動することの大切さ、素晴らしさを学びました。これは日本で人任せにしていたころの自分には到底、理解できないことだと思えます。IWCに参加し、現地でいろんなことを経験したからこそ、行動力の大事さを学びました。行動力の大事さを学べたことは、これからの私の人生に大きくかかわってくると思います。IWCで学んだ行動力をこれからも大切にしていきたいです。

2つめは意思疎通のむずかしさについて学びました。

ワークや国際交流をするときにインドネシア語をしゃべれない私達は英語でしか話せませんがその英語もろくに話せないのが本当に苦労しました。子ども達が笑顔で話してくれているのにもかかわらず日本人は笑うことしかできず何とも言えない気持ちになりました。イブや現地の人たちとおしゃべりをしたい気持ちはありましたが挨拶程度の会話しかできず英語も片言なので言葉の壁と

いうものを痛感しました。意思疎通がうまくできなかったせいで交流会の時に思うように進めることができず、子ども達が勝手な行動をしてしまいうまくいかなかったり、ワーク中に休憩の時間なのに手伝ってくれていた子ども達が休憩だとわからずずっとやっているときがありました。インドネシアの学生のおかげで何とか行きましたが僕たちだけでは何もできなかったです。それでも私達の片言の英語でもわかりやすいと言ってくれたインドネシアの学生のおかげでスムーズに最後まで迎えることができました。言葉の違い、意思疎通のむずかしさを心から実感できたことはこの留学のおかげです。英語を勉強しようという意欲につながりました。最後までインドネシア語はしゃべれませんでした。本当はいい機会でした。

最後に、貧困問題について深く考えさせられました。

正直、私は大阪に住んでいますが大阪が素晴らしい環境だと思ったことはありませんでした。この環境が当たり前だと思っていたからです。自分が裕福な環境で生活できていると考えたこともなく貧困村を訪れた時は本当に衝撃を受けました。

私達が訪れたバニユポ村はブドウ栽培が盛んでどこを見てもブドウだらけでブドウ畑みたいな村でした。ですが、内面は水が週に2日しか流れず、子どもが豚小屋で生活しているという悲惨な状況でした。最初訪れ、その状況を目の当たりにし言葉を失いました。子どもは学校に行くこともできず、ろくに食べるものもなく毎日を懸命に生きている人達ばかりでした。着る服もなく暑さをしのぐものもない人たちを見て、自分たちがどれだけ整った環境で生活できていたか改めて考えると悔しくてたまりませんでした。そのような状況でも無邪気な笑顔で僕たちに笑いかけてくれる子ども達の顔を見て、こんな僕達でも何かできることはないのだろうかとの底から思いました。

このバニユポ村の人たちに僕たちができることはないかもしれませんが。たとえできることがあったとしても長い時間がかかるでしょう。なら僕達にできることは、貧困村の現状を心に留め、次の

世代につなげることが僕たちにできることだと思います。温かいお風呂に入ることができ、おいしいご飯を食べ、なんでもすぐに手に入ることを当たり前だと思わずに感謝の気持ちを忘れないことが日本で生活している私達が気づく大きな経験になりました。また、この問題はこの村だけの問題ではありませんが、貧困村の子ども達が勉強できるよう教育方針を国が変えなければならないと思います。確かに、変えろと言われて変えられないということはわかっています。ならせめて、少しでも多くの子どもが勉強できるよう児童養護施設を増やすなどして多くの子どもが勉強できるよう願っています。何もできない自分達が情けないと思うとともに、今、何不自由なく生活できていることに心から感謝します。この村を訪れ感じたこと、目で見、耳で聞いたことを忘れることなくこれからの人生を歩んでいきたいです。

今回の留学で私が出た最大のものは「自信」です。今まで私は、どこにでもいる普通の大学生で、何かをやり通した事がない中途半端で自分に自信がもてないでいました。しかし自ら何かしなければならぬこの環境が、私にはいい刺激になり、やる気を奮い立たせ、インドネシア語習得でも、ワークや国際交流にしても何でもやればできるという事をわからせてくれました。その一つ一つの経験が今では自信になったと思います。この自信は、これから生きていく上でとても重要なものになっていく事は言うまでもなく、新たな障害に立ち向かった時、恐れることなく立ち向かっていく勇気が変わっていくと思います。また、私達は Terima Kasih、日本語でありがとうという意味のあるインドネシア語に救われました。初めての海外、しかもボランティアということで右も左もわからず不安だった私達にとってインドネシアの人達、子ども達の何気ない言葉にとっても助けられ勇気つけられました。インドネシアで過ごした18日間で多くの人に感謝しました。こんな隊長を最後まで支えてくれた副隊長、最後までついてくれたメンバー、引率教職員の方々、現地でお世話になった人達、ホームステイ先のイブ、かかわったすべての人に感謝します。IWCにかかわ

てくださったすべての人達のおかげでIWCは成功したと思います。インドネシアで感謝の気持ちを学べたことは一番の財産になると思います。

このIWCが始まってインドネシアから帰ってくるまでの4か月間、つらい思いの悲しい思いもたくさんしてきました。何度も何度も隊長をやめようと思いました。こんなにもつらい思いをするのなら参加しなければよかったと思ったこともたくさんありました。でも、このみんなと過ごした4か月はこれからの人生で忘れることのないかけがえのない大きな財産になりました。IWCに参加して18日間誰一人かけることなくこのメンバーで過ごせたことが幸せでした。もうこのメンバーでボランティアをすることはありませんがIWCで出会えてよかったです。こんな頼りない隊長についてきてくれて本当にありがとう。このIWCの経験を生かしこれからの社会生活、日本の生活を過ごしていきたいです。最後に、僕達IWCの学生を温かく出迎え、支えてくれたインドネシアの人たちに心から感謝します。Terima Kasih.

## Terima kasih dan terima kasih

Tomoki Takaoka

Saya pikir pertama aku aman bisa menyelesaikan ini IWC29 oleh pejabat yang, terima kasih kepada orang-orang lokal tanpa apa-apa. Hal terbesar yang saya punya dalam studi ini adalah "kepercayaan". Di mahasiswa biasa di mana-mana aku pernah pergi melalui dengan sesuatu, tetapi ini telah populer oleh keyakinan dalam nya. Bagaimanapun, itu menurut saya tahu bahwa ia bisa melakukan apa pun itu sendiri untuk melakukan sesuatu, lingkungan ini merangsang saya terinspirasi, termotivasi, di Indonesia untuk belajar, bekerja dan pertukaran internasional. Saya pikir satu satu satu pengalaman menjadi percaya diri dalam sekarang. Saya pikir, dan keberanian

untuk menghadapi tanpa takut tidak mengatakan hal-hal akan menjadi sangat penting dalam kepercayaan ini hidup sekarang ketika menghadapi hambatan baru. Selain itu, Indonesia, yang berarti kita di Jepang, Terima Kasih terima kasih diselamatkan. Luar negeri untuk pertama kalinya, dan dalam para sukarelawan tidak tahu keduanya kanan dan kiri, bagi kita adalah orang-orang baik di Indonesia, anak-anak kasual komentar dan keberanian yang diaktifkan. Berterima kasih kepada banyak orang dalam 18 hari dihabiskan di Indonesia. Terima kasih kepada semua yang rave, ada berhutang budi kepada anggota yang datang ke wakil komandan seperti Kapten bagi saya sampai akhir, yang terakhir, dipimpin oleh Fakultas dan staf, dan masyarakat setempat, yang terlibat. Terima kasih kepada semua orang yang terlibat dalam IWC, IWC berhasil dan. Akan menjadi milik anidea syukur di Indonesia. Kami telah mulai rumah IWC ini dari Indonesia dan 4 bulan antara sakit hati sedih juga. Saya pikir Kapten berkali-kali berkali-kali untuk berhenti. Banyak berpikir adalah untuk bergabung jika Anda seperti apa-apa tetapi memiliki waktu yang sulit. Namun, jangan lupa orang-orang ini menghabiskan 4 bulan dalam hidup saya dari properti besar tak tergantikan. Itu bergabung IWC, 18 hari, tidak ada yang menempatkan anggota staf yang bahagia. Tidak lagi dengan ini anggota relawan harus senang di IWC. Terima kasih untuk datang pada Kapten tersebut tidak dapat diandalkan, terima kasih. Pengalaman IWC ini adalah Anda ingin menghabiskan kehidupan sosial Anda, kehidupan Jepang. Akhirnya, kita bersyukur kepada orang-orang hangat selamat datang dan mendukung siswa Indonesia IWC.

Terima Kasih.

## インドネシアで学べたもの

学生副隊長 社会学部 4回生 大口 麗王  
(れおピィ)



### きっかけ

私がこの国際ワークキャンプ (IWC) について知ったのは、3回生の時に参加した教育後援会主催ボランティア活動報告会で去年のIWCに参加した方の話を聞いたからだった。このワークキャンプではインドネシアの養護施設に行きボランティアをするということだったので、国際ボランティアをする中で海外の文化について知ることが出来る。また、将来日本の児童養護施設で児童指導員として働きたいと思っていたため、日本の児童養護施設と海外での児童養護施設でのケア、取り組みの相異、そして、海外の児童福祉の制度についても知ることが出来ると思い参加を決意しました。

### 事前研修

インドネシアへ行く前に事前準備として研修があった。この研修では毎週金曜日5限にインドネシアの文化、言語、IWCについての研修を行っていました。6月からはインドネシアで行う日本語のプログラム策定、交流会で発表するダンス、歌の練習指導など日本語班、日本食班、交流班、衛生班、しおり班、記録班、の6つの班に分かれ、各々必要物品の準備を行いました。

私は日本語班で物品の準備などは昼休み、授業の空き時間に班のメンバーが集会室に集まって、話したりしながら日本語授業のレジュメ、物品の作成をしていました。

また、7月ごろにはインドネシアの教会で歌う歌、交流会のダンスの練習を授業の空き時間、昼

休み、土曜日などに行い、とても大変だったのを今でも鮮明に覚えています。しかし、この苦労があったからこそ教会での歌等が成功したと思います。

### インドネシアで出会った人たち

このIWCのプログラムでインドネシアの様々な人との出会いがあった。

#### インドネシア学生との出会い

学生たちとはインドネシアについて日から最終日まで活動を共にし、最も多くの時間を過ごしました。出会って初日は日本人学生、インドネシア学生双方緊張していたのかぎこちなかったがすぐに打ち解けることができた。学生と関わる中で、言葉多少わからなくても伝えようとする姿勢、相手の言っていることを理解しようとするれば意外とわかるものだと感じました。

インドネシアの学生には本当に様々なプログラムの中で苦労を掛け、そして、助けられた。日本語の授業、教会での歌、交流会で行うプログラム等を時間が少ない中嫌な顔をせず、一生懸命理解しようとしてくれ、また、積極的に練習を行ってくれた。また、そういった姿を見ている日本人学生もその頑張りが無駄にならないよう一層気を引き締めることが出来たと思います。このIWCを何事もなく終えたのはインドネシアのお学生4人のおかげである。この4人とインドネシアで18日間という短い期間一緒に過ごすことができ本当に良かった。ほんとにありがとう。

#### アスラムの子どもたちとの出会い・バニユボ村訪問

次の出会いはプリンビンサリ村の第二アスラム(児童養護施設)の子どもとの出会いでした。アスラム(児童養護施設)では経済的理由から親と暮らすことの出来ない子どもが多く暮らしている場所です。私たちがアスラムに着くと子どもたちがガムラン楽器、バリ舞踊で温かく迎え入れてくれた。その後は施設の職員がアスラムの案内、説明をしてくださった。私たちが施設の説明を聞いてみると、笑顔で子どもたちの方から私たちの方に来てくれ、関わる事が出来ました。アスラム

に来る前は言葉や文化が違う国の子どもとうまくかかわることが出来るのか不安があったが笑顔で子どもの方から来てくれたのですぐにこの不安はなくなりました。アスラマの子どもたちはとても元気でよく私も子どもたちとよくサッカーや鬼ごっこをして遊んでいました。また、子どもたちは私の名前をすぐ覚えてくれ会ったら名前を呼んでくれました。ワークが終わり疲れていても子どもたちの笑顔、元気な姿を見ることで「また明日も頑張ろう。」と元気をもらうことが出来ました。

私たちはアスラマにいる子どもの何人かの出身であるバニユボ村の訪問をした。この村の訪問はIWCのプログラムの中で一番大きな印象、考えさせられるものだった。この村ではワインのブドウ畑で栽培をして生計を立てているが、収穫したうちの7割は地主にとられているため、自分たちの取り分が少ないという現状だった。村の訪問ではそこに住んでいる住民の家の見学を行った。その訪問の中で訪れたある一軒家では3家族が暮らし、マンディ（入浴）、トイレは屋根もない場所で生活をしていて。ここで暮らしている子どもは経済的な理由から学校に通うことも困難で、食事も1日2度おかゆのようなものを食べるだけと聞き衝撃を受けた。また、子どもたちは教育をしっかりと受けることが出来ないことから将来きちんとした仕事に就くことが出来ず、この貧困のサイクルから抜け出すことできないこと知り、教育の大切さを学ぶことが出来ました。

#### ホームステイ

ブリピンサリに滞在している14日間ホームステイを行った。ホームステイ先のイブ、パパは本当にいい人で温かく迎えてくれた。パパは英語を話すことが出来たので、ごちない英語やジェスチャーでもコミュニケーションを思っていたよりとることができた。英語で通じないときは指さし本等を使いコミュニケーションをとっていました。イブ、パパは農家の方で様々なフルーツを育てていたので、日本では食べることの出来ないフルーツ等をよく食べさせてもらったり、二人には息子と娘がいるみたいでよくこどもたちの話をしていた。

イブ、パパはいつも私たちが本当の息子のように接してくださっていました。朝には紅茶やコーヒーなどを用意して下さったり私たちの体調を気にかけて下さったりととてもお世話になった。インドネシアの生活で何事もなく成し遂げられたのもホームステイ先の方のおかげである。

#### 日本語授業

日本語の授業では小学校、中学校、高等学校、専門学校に訪問し、インドネシアの子どもたちの交流を行った。日本の文化や言語などを知ってもらうために様々なことを行った。インドネシアに行く前に作成したあいうえお表を使い発音の練習、名札づくりをお子にまいた。次に日本の伝統的な遊びかるた、折り紙やフルーツバスケットなどを行った。日本語の授業ではインドネシア学生の協力があり無事終えることが出来ました。インドネシア学生には日本人学生の説明だけでは伝わらないところより丁寧に子どもに説明してもらった。みんなの協力もあって子どもたちには楽しんでもらうことが出来たと思います。

#### インドネシアと日本の相異

インドネシアに行き日本との違いに驚かされることが多くあった。一つは、地域のつながりが強くどこか温かいと感じたことです。私たちが滞在していたブリピンサリでは地域の人は他国から来た私たちを温かく迎え入れてくれた。また、私のホームステイ先からアスラマまで行く間に住民と会うといつも挨拶をしてくれました。2つ目が日本とインドネシアの施設のの違いである。日本の児童養護施設では親の虐待（最も多いのは身体的虐待）で入所する子どもが多く施設の目的は子ども教育し、自立のための援助、家族関係の再構築の援助をおこなうことである。インドネシアでは貧困による理由で入所する子どもが最も多く、施設での目的には、子どもを教育し、自利させることによってその家族の収入を増やすことで貧困から抜け出すといったこと援助である。また、施設入所までの流れも大きく違う。日本では子どもを児

童相談所所長の判断のもとで保護し、家庭裁判所の採決のもとで施設入所するといったものだが、アスラマでは施設の先生方が子どもたちの下に行き、そして、勉強をしたいと思う意思が強い子どもを保護している。こういった話を聞き、大学で福祉の勉強をしている私には日本との違いに衝撃を受け、また、国の経済事情等によって制度、援助の目的は大きく変わっていくものだと知ることが出来た。そして、国が変わっても子どもたちの将来のことをしっかりと考え援助していくこと変わらないと感じました。

3つ目が交通機関、ごみの処理の違いである。デンパサールからプリピンサリまでの移動の際に大きな違いがあった。デンパサールなどの市街地では信号、交通量、標識が多くあったが郊外に行くにつれ信号、交通量、標識が少なくなっていた。また、ガソリンを給油する方法にも変化があった。市街地や大きな道路があるところではガソリンスタンドがあったが郊外では代わりにガソリンを瓶に詰めて売っている店などがあった。日本では道端にごみが大量に捨ててあることは少ないがインドネシアは違いがあり、市街ではそれほどゴミがなかったが郊外に行くまでにつれごみが大量に散乱しているところがあった。現地の方に話を聞くと「デンパサールなどではごみを収集する業者などがあるが郊外ではそういったものがないためごみは自分たちで焼いて処分する」とおっしゃっていた。

#### まとめ

私はIWCのプログラムに参加し多くの学び、気づきがあった。日本で生活しているだけでは学べないことをインドネシアでの生活を通して学ぶことができたと思う。また、パニユポ村の訪問では今の自分にできることはないか、何もできない自分が嫌になったりと多くのことを考えさせられた。今の自分には何ができるか考え、微力ながらもインドネシアの子どものためにできることを少しずつ行っていきたいと思います。

末筆になりますが、このワークキャンプに協力してくださった教職員、教育後援会の方々、アス

ラマの職員、子どもたちに感謝したいと思います。この経験は私にとって貴重な経験となりました。本当にありがとうございます。

## Terima kasih

Reo Oguchi

IWC adalah program sebagai harta karun bagi saya

Saya belajar bahwa varietas. Salah satunya adalah perbedaan budaya. Makanan dan mandi di menghabiskan homestay dan anak-anak, saya bisa mempelajari perbedaan dalam sistem. Saya pernah mandi hari di Jepang, bahwa itu budaya yang mandi dua kali di Indonesia. Dan, itu adalah perbedaan dalam sistem.

Yang kedua adalah kerja sama tim. Program ini telah negara kerjasama sesama siswa dan bahasa yang berbeda. Orang berpikir dan bahasa berbeda sekarang di beri-beri Ki berpikir sehingga mereka berhasil bisa kerjasama. Selain itu, ada juga yang tidak ada kemajuan diprogram dengan baik oleh perbedaan bahasa. Anda juga bisa belajar pentingnya bahasa dari pengalaman ini. Sekarang beri-beri dan Taki Aku bahkan mencoba untuk belajar seperti bahasa Inggris dan dari belakang ke Jepang.

Untuk banyak orang berkat mampu menghabiskan ini berharga 18 hari. Guru Universitas St Andrew, staf dan Indonesia orang Terima kasih banyak. Selain itu, anak-anak Indonesia, homestay Eve, Bapa benar-benar terima kasih. Sekali lagi Asurama anak Hawa, saya ingin mencintai dan Bapa, mahasiswa Indonesia.

Terima kasih pengalaman berharga.

## 私の18日間

学生副隊長 経営学部 2回生 岩田 莉菜  
(りなピィ)



私が、このインドネシアIWCに参加した理由はいくつかあります。大きく分けると、子どもが大好きなので子ども達と遊びたい、触れ合いたい、インドネシアの文化を知りたい、ボランティアをしたいなどという単純な気持ちからでした。私はインドネシアで過ごした18日間の中で、これらの事を実現できたと思います。私自身、海外へ行くのが初めてで全ての事が不安で、前日の夜はあまり眠れなかったくらいです。ですが、現地に着くと想像以上に毎日が充実していました。

私達、が主に生活させていただくアスラマに到着すると、たくさん子ども達が出迎えてくれました。子ども達は私達と初対面にも関わらず、にっこり可愛い笑顔で私に握手をしてくれました。小さな手でぎゅっと握ってくれて心が温まったようにすごく嬉しかったのを覚えています。今日からこの子達と毎日遊んだりして過ごしていくんだなと考えるとすごく胸が膨らみました。

そして、私達女子4人がお世話になるホームステイ先へは4人の女の子が案内してくれました。私達のホームステイ先はアスラマから徒歩3分ほどで着くような、本当に近くのお家でした。そこは、ワルンというお店もしていました。イブとババと初めましての挨拶、自己紹介をし部屋まで案内して下さいました。私達は2人ずつ1つの部屋で寝泊りをします。ベッドはダブルベッドでした。

私はホームステイ先でお世話になる中で、初めての体験や驚いた事が多々ありました。それはどんな事かという、まずトイレでした。インドネシアでは、トイレットペーパーやティッシュは別

のごみ箱に捨てないといけないのです。一緒に流してしまえば、下水管にそれらが詰まってしまうからです。日本から出た事が無い私は、海外のトイレ事情を全く知らなくてそこに驚いてしまいました。

次はお風呂です。インドネシアでは、お風呂の事をマンディ (mandi) と呼びます。朝起きて、学校や仕事へ行く前にマンディ、学校から帰り、昼寝をしてからマンディ、という一日2回が基本だそうです。日本では当たり前のようにお湯でシャワーをしますが、現地では水で体を洗います。いわゆる、水浴びです。私は、初めはぶるぶる震えながら入っていましたが、段々マンディを重ねていくうちに慣れてきました。やはり初めは驚く事が多いですが、その文化を知り毎日を過ごしていくと慣れというものは自然に起きるのだなとその時実感しました。

例えば他には、食事です。初めは自分の口に合わないんじゃないか。と少し不安な気持ちもありましたが、その不安は実際現地で食事をした時に一瞬で消え去りました。そこまで無理と思うものも無かったし、もはや私の口にとっても合いました。美味しかったです。ナシゴレンは餃子の王将の炒飯の味に似ていました。とにかく日本人は好きだろうなという味付けです。

毎日の朝昼晩の食事は、いつもアスラマで食べていました。今思うと毎日誰かと横、向かい合わせになり色々な話をしながら、そして子ども達に囲まれて食事ができていた事は当たり前のようですごく幸せな事でした。

私の中で、インドネシアでもう二度と経験出来ないだろうなという体験がたくさんできたことが一番大きい事だと思っています。ホームステイ先の事では、洗濯物を手洗いで洗い一つ一つきちんと絞って干すという作業や毎朝6時に起きていた事など。洗濯物を全部自分の手でする事ってこんなに大変な事なのだ真剣に感じました。

そして、ワークでの思い出深い事というのは、ワークを行っていたムラヤへの交通手段は毎回大きなトラックで、その後ろに20人以上が乗り込み走り出します。初めて乗った時は、皆興奮してテ

ンションも上がっていました。ですがワーク終わりにアスラマへ帰る、帰りのトラックでの皆の疲れ具合は凄いです。個人的に行きと帰りのテンションの差が面白かったです。後、ワークの中で皆でしたバケツリレーがすごく記憶に残っています。第5アスラマの子ども達も一緒に参加して手伝ってくれて、すごく土を運ぶ効率も良かったですし、初対面なのにバケツリレーがきっかけで話すことが出来て仲良くなれた子もいます。それが何より嬉しかったです。すれ違う子ども達、皆笑顔で目を合わせてくれて、太陽の光が燦々とする中で体も疲れていましたが、その笑顔だけで頑張れました。私たちは皆、自分を含め疲れた表情が無意識に出ていたと思います。だけど、手伝ってくれていた子ども達は、黙々と土や砂を運び、しんどい、疲れたなどの嫌そうな表情をしている子は、一切誰一人いませんでした。そこが素晴らしい事だなと思いました。年齢なんか私たちの方が遥かに上なのに、子ども達の方が体力もある様に見えました。ワーク内で、期間中に塀を完成出来たのも、子ども達の手伝ってくれたからだだと思います。本当に感謝しています。

次の貴重な体験は、学校訪問です。日本学生+インドネシア学生の24名が、各A、B、C、D班4チームに分かれて学校で日本語プログラムの授業を行うというものです。私たちC班は、高校、小学校、看護学校を訪れました。それぞれの学校、学年によってそのクラスの特徴のようなものがありました。

例えば、高校では、あいうえお表を見ながら一緒に自分の名前をひらがなで書いてもらうというものでしたが、高校生の生徒達は、スラスラと迷う事なく自分の名前をひらがなで書いてくれました。あいうえおもスラスラ言っていたし、日本語で話してくれる子もいたし、日本語の勉強をきちんとしてくれているんだというのが伝わり、私はただただ関心してしまいました。それに対して、私たちは基本的である簡単なインドネシア語も出てこず、それがその日の高校訪問での反省となりました。その日の反省は皆で真剣に改善点を考えて話し合う事も出来て、次に繋げようと、次回の

授業への意気込みも上がりました。これは、すごく良い事だと思います。

2回目の学校訪問は、小学校へ行きました。C班は、5年生のクラスを担当しました。アスラマの子ども達もいて、親近感が湧き授業もとても楽しかったです。こちらが用意したかるたやカラーバスケットはとても盛り上がり、真剣に皆はしゃいで笑って遊んでくれていたので、こちら側としてもすごく嬉しいことだし、自然と笑顔がこぼれました。素直に喜んでくれて楽しんでくれて、ありがとうございますでいっぱい気持ちでした。

そして、そこで嬉しかった事がもう一つありました。授業が終わってクラスの男の子が私に自分の名前入りのプレスレットをくれました。それは、さっきまでずっと腕に付けていた物で、大事な物じゃないかと思ったので「いいよ。ありがとう」と言っても「りなりな」と言いながら私の腕に付けてくれました。なんだか私は、感動というか嬉しくてキョトンとしてしまいました。お礼の言葉は、“テリマカシー”しか言えず、ですが心の底から嬉しかったです。今は部屋に大切に飾っています。そのプレスレットを見るたびに、その光景を思い出して嬉しさがこみ上げてきます。そして、又元気いっばいの可愛い子ども達に会いたくもなります。

最後の学校訪問は、看護学校へ行きました。年齢は、高校生くらいで女の子が多かったですが男の子もいました。私たちがお世話になったクラスでは、男の子が2人いました。女の子の元気いっばいさに負けないくらい2人の男の子もカラーバスケットや折り紙などを楽しんでくれていました。女の子は本当に明るくて可愛くて、名前をいっばい呼んでくれたり、写真もいっばい撮りました。授業に関しても話を聞く時はすごく真剣な眼差しで、話している人をじっと見ていました。この子たちは、皆看護師を目指していて一つの夢の為に毎日勉強を頑張っているのだなと思うと、私も頑張らないといけないなと思われました。

私自信も一つの大きな夢があります。それは教師になるという事です。それを踏まえてこの国際ワークキャンプに参加しようと思った一つの理由

でもあります。なので、学校訪問へ行けた体験は、私にとって貴重な体験になりました。そして、より子ども達が大好きになり、将来子ども達と関わりたいとより強く思いました。

本当に今深く考えると、このようなすばらしい貴重な体験等はこの先絶対無いだろうし、本当に良い体験をさせていただいたなと思います。自分の未来に何か少しでも、影響が与えられれば良いなと思いました。

私は、このIWCに参加できて本当に良かったです。集団行動が苦手で、そして極度の人見知りで緊張しいで、初めの事前研修がすごい嫌でした。ほとんどの人が初めて出会い当たり前ですが喋った事のない人ばかりで、どうコミュニケーションをとっていいか分からずでした。しかもIWCの男子は、私以上に消極的な人ばかりで驚きました。自分から動かないと相手の事など分からないと改めて感じました。事前研修でも、色々な事を学べたと思います。初めは面倒だと思っていましたが、後々、それがいかに大切な事だったのか分かりました。

素晴らしい時間をありがとうございました。

## 「Ucapan terima kasih」

Rina Iwata

Aku, kamp kerja internasional ini adalah pengalaman luar negeri pertama. Jauh saya pikir untuk pertama kalinya di luar negeri baik Indonesia sehari-hari yang tiga minggu itu waktu yang tepat. Jika Anda benar-benar diberkati dengan homestay Anda Yves Bapa dan anggota keluarga lainnya, silakan selalu dikirim keluar dengan senyum. Hal kasual adalah saya merasa senang. Orang-orang dari homestay, hanya ada rasa syukur. Dan, saya ingin mengatakan desa Burinpinsari dan yang telah menandatangani ramah dalam menyapa setiap hari-Asurama dari Anda, anak-anak,

terima kasih kepada semua orang. Terima kasih semua! Berikutnya, saya berpikir bahwa ia Na baik Setelah Anda memberikan kembali dalam bentuk sesuatu.

## ありがとう

社会学部 2回生 廣澤 真子 (まこピィ)



私は、大学で社会福祉についての勉強をさせていただいて、主に障がい者とのキャンプのボランティアに参加させていただいていました。そこで、日本のみならず、海外の福祉の現状を知りたい、日本という国はほかの国とどういった点で福祉が行き届いているのか、また、劣っているのかを知りたくて海外ボランティアに興味を持ちました。そこで、インドネシアの児童養護施設でのボランティアの海外プログラムがあることを知り、参加させて頂けることとなりました。

### <プリンピンサリ村>

初め、車でデンパサールからプリンピンサリ村に向っている時「どこに連れて行かれるのだろうか。」と感じるほど、デンパサールと景色が違いました。数少ない建物はどれも背が低く、村に入ったのだとすぐに分かりました。プリンピンサリ村は木や花が多く、自然豊かな村でした。しかし、1つとても衝撃を受けたことがありました。ゴミです。道端のあらゆる場所にごみが散乱していました。こんなにも自然豊かな国でここまでゴミが散乱しているとは思いませんでした。アスラマに着くと車のドアの所まで子どもたちが迎えに来てくれて、握手をしてくれました。目が会う度に笑顔を向けてくれる子どもばかりで、初めて会

ったはずなのに前から知っていたかのような気持ちになりました。村の人たちもアスラマのイヴたちも会う度に声をかけてくれて、日本とは違って地域のコミュニティがしっかりしているからこそなんだと感じました。一緒に過ごす時間が残りわずかになると、子どもたちと離れることが寂しくて休憩時間や少しの空いている時間でも子どもたちと共に過ごそうと、なんとかして時間を作るようになりました。離村式の時、子どもたちに笑顔で「I don't cry. So, you don't cry.」と言われ、その笑顔と言葉に涙があふれ出してしまいました。私たちがデンバサルへ向かう日、子どもたちは4:30に起床、6:00に登校していきました。最後の日ということで、子どもたちを小学校まで送り届けました。最後の子どもを送り届ける時、寂しくなりました。ぬいぐるみをプレゼントしてくれた子供もいて、子どもたちからは本当にたくさんのもをもらいました。目に見えないものがほとんどで、笑顔の大切さ、前向きな心、感謝の気持ち、その他にもたくさんを学ばせていただけました。子どもたちからももらったたくさんのもが私の財産です。これから先も大切にしていきたいです。

#### <ホストファミリー>

初めてホームステイ先に着いた時からホストファミリーはとても優しい笑顔で迎え入れてくれ、これから過ごす14日間が楽しみになった事を覚えています。私たちは2人1部屋の2部屋準備してくれており、4人で一つのホームステイ先でお世話になりました。私たちのホームステイ先はワルンといい、小さなお店だったため、近所の人も良く立ち寄りいつもたくさんの人たちが話し掛けてくれる場所でした。ホストファミリーとの会話は、インドネシア語の指さし本か英語での会話で、聞き取りづらいのにもかかわらず、一生懸命聞こうとしてくれるホストファミリーの優しさがとても嬉しかったです。トイレは洋式の水洗トイレでしたが、トイレトペーパーは流してはいけないということを知らず、当たり前のように流してしまっていました。気付かずに続けていると、水つま

りの原因になっていたと考えると恐ろしいです。洗濯物は全て手洗いで、すすぎや手洗いの大変さをはじめて体感する事ができました。マンディは、やはり夏とはいえども夜になるとかなり冷えるため寒かったですし、水が硬水のため、シャンプーなども泡立ちにくく最初3日間くらいは大変でした。4日目くらいからは、寒さと戦いながらも15分くらいで出られる程となりました。しかし、井戸水の影響か、水が少し白っぽく濁っており、少し臭いもしたのであまり、洗えているという感覚が無いと感じました。歯磨きや洗顔するときの水すらも白く濁っており、その水での歯磨きや洗顔は、購入した水でするようにしていました。こういった点で、日本人には少し合っていない環境だと感じました。そして、毎朝6時30分頃には朝ご飯としてパンやおやつのようなものと紅茶を準備してくれており、毎朝送り出してくれました。インドネシアの紅茶は砂糖を大量に入れる習慣があるらしくとても甘くて、初めて飲んだ時には衝撃が大きかったですが、数日後にはそれが普通で砂糖なしで飲むと違和感がありました。1週間が経ち、いつもと同じく私たちはアスラマへ向かい、活動をしてホームステイ先へ帰ると、ベットカバーをキレイに変えて下さっていました。そこまで気遣いをしていただいている事にその日、同室の友達と共に改めて感謝しました。離村式の日の朝に私たちは、イブとパパに手紙を書き、渡しました。すると、イブとパパから一人一人に香水のプレゼントがありました。包装までしてくれており、ずっと一緒に過ごしてきたイブとパパとの別れがもうすぐ来るのだということを改めて実感し、とても寂しくなりました。14日が経ち、別れの日の朝、いつもと同じで朝ご飯を準備してくれていました。もうこれを食べられなくなるのだと思い、4人でゆっくり食べてイブとパパと写真を撮って、別れの挨拶をしてからアスラマに向いました。インドネシアの文化を知らず、沢山迷惑を掛けてしまった私たちに最後まで親切にして下さったイブとパパには本当に感謝しています。

### <インドネシアの学生>

私達は日本の学生のみならず、インドネシアの学生4人も共に18日間を過ごしました。初めはお互いに気を遣いながらも一生懸命、インドネシア語の指さし本で日本の学生とインドネシアの学生はコミュニケーションを取ろうとしていましたし、2日目になるとだんだん打ち解けてきて3日目になると、ワークもあり、「頑張ってる。」と日本の学生同士の声掛けを聞きインドネシアの学生も「頑張ってる。」と言ってくれるようになり、そこから少しずつコミュニケーションも増え、休憩の時間に一緒にワルンへ行ったり子どもと一緒にスポーツをしたり、互いの母国語を教え合ったりと沢山関わりを持てるようになりました。プリンペンサリでの生活が半分を越えた頃にはすっかり仲良くなっており、昔からずっと一緒に居た友達かのように冗談を言い合ったり、バカみたいなことをして一緒にお腹を抱えて笑ったり、時には相談に乗ってくれたり相談に乗ったりと、本当に親しい関係になりました。インドネシア人のフレンドリーな性格と同じくらいの年齢と言う事もあり、仲良くなるのにもさほど時間はかかりませんでした。交流会や教会訪問の際、また日本文化プロジェクトの際に報告、連絡、相談が日本の学生とインドネシアの学生とが出来ておらずインドネシア人学生の混乱を巻き起こすようなことになり、沢山迷惑を掛けてしまったこともありました。インドネシアの学生達は、日本の学生20人に対して4人という少ない人数だったため、意見を出しにくいという時もあったと思います。それでも、コミュニケーションを取っていく中で互いの意見や考えを理解し合い、活用してみようというチャレンジ精神でなんとか18日間を協力し合いながら過ごす事が出来たのだと感じています。私たち日本の学生の意見をしっかり聞いてくれ、分からない事を一生懸命教えてくれ、親切にしてくれたインドネシアの学生4人には感謝の気持ちでいっぱいです。また、いつか会ってIWC29の活動の事について改めて話す機会が作ることができればと思っています。

### <まとめ>

私達はスイクラマさんやフォルマンさん、美和さん、ホームステイ先のイブとババ、アスラムのイブ、アスラムの子ども達、インドネシアの学生、その他にもたくさんの人達と共にこのインドネシアワークキャンプに参加させていただきました。そして、これだけたくさんの人に支えられ、私達はこのワークを終えることができました。この18日間という短い期間の中で私達はインドネシアの文化、インドネシアの食事、言葉、マナーなどの沢山の事を学ぶ事もできました。驚く事も沢山ありましたが、どれもとても良い経験となりました。ボランティアで行かせていただいたのにも関わらず、インドネシアの人々は私達をお客様としての扱いをして下さいました。申し訳ない気持ちと感謝の気持ちでいっぱいでした。私自身福祉の現場を見たいという気持ちで参加させていただきましたが、インドネシアの児童養護施設と日本の児童養護施設の存在意義の違いに衝撃を受けました。日本に帰って何が出来るかと考えてもできることは本当に些細なことで、直接的に誰かの役に立つような事なんて何も思いつきませんでした。私が一番に感じたことは、人と関わる時に愛情を持って関わるということの大切さでした。子ども達は特にですが、大人の愛情に飢えています。子ども達は、大人の背中を見て育てて行きます。そんな子ども達にとって、こんな大人になりたい、この人と関わっていると楽しい、面白い、安心する、そういった感情を抱いてもらえるような大人になっていきたいと感じました。インドネシアでの経験は今後私達が生きていく人生の財産となるものとなりました。こういった経験をやる機会を与えて下さったことにも感謝しています。

Terima kasih

Mako Hirose

Melalui kamp kerja di Indonesia, saya berpikir kegiatan ini sendiri dirasakan menjadi

salah satu dukungan hidup untukku. Pergi ke negara yang berbeda kebudayaan, dan berhubungan dengan banyak orang, seperti di negara kemakmuran Jepang bahwa kita diberkati juga, terima kasih kepada hari - hari yang sekarang kami memiliki semangat yang meluap. Lalu, pergi ke daerah lokal Indonesia, tidak bisa melakukan apa - apa, perasaan menjadi ingin istirahat dan kekurangan tenaga. Namun, saya sekali lagi menyadari bahwa teman yang ada saat ini juga bekerja keras baik mahasiswa Indonesia dan mahasiswa Jepang berubah semangat. Berterima kasih kepada orang-orang yang mendukung saya, memberi kesempatan ini kepada saya. Terima kasih banyak.

## Kebahagiaanは達成できたのか

学生副隊長 経済学部 2回生 宮下 捷  
(すぐピィ)



初めに、IWC29に関わって下さった先生方や教職員、また18日間の同行・ケアをして下さったスタッフやイブに感謝したいです。私はこの短期間で多くを学びました。これからもIWC29としての活動は続きますが5月から始めて4か月が経ち、私がIWC29期という組織の一員として最も感じたことが1つあります。それは私達ができることはとても小さなことであるということです。両国の文化を知ること、子ども達と交流をすること、現地で起きている問題を解決しようとする、様々ありますが私達の行動が何かを大きく変化させるということは難しいと思いました。

しかし、その小さなことでも誰か一人でも考えや行動が変われば私達のやってきたことは成果となると思います。そこで成果にするために私達がやってきたことを国際交流というテーマのもとで書いていきたいと思います。

私はこのワークキャンプに参加するにあたって自分で目標を2つ決めていました。1つは親と一緒に暮らしていない子ども達にとって私達が親のような存在となり、私達が現地に行かなければ存在しなかった笑顔を少しでも多く生み出すこと。もう1つは自分以外の人のために働くとは？を考え、社会に出るまでの大きな踏み台の1つとして知識や経験を積むことです。この2つの目標を意識して行動していく中でできたこと・できなかったことを感じました。

まず1つ目の目標に関してアスラマの子ども達との交流、インドネシア学生とのホームステイ、学校訪問で教える側の立場としての自分、の大きく分けて3つのシチュエーションがあり、そこで幸せを提供する立場として努めました。

子ども達との交流は、楽しませる目的を第一に考え、私自信も一緒に楽しむことができた時間が多くあったと感じています。私は最初、現地に行くまではアスラマの子ども達は親と暮らすことができず、幸せな毎日を送ることができていないのではないかと思っていました。しかし、現地に行ってみると子ども達は笑顔に溢れていて、元気いっぱい生活を送っているようでした。それを見て私はそれまで可哀想という勝手なイメージを膨らませていた自分を恨めしく思ったのと同時に、もっと笑顔が見たいということ、子ども達と少しでも同じ時間を過ごして楽しい時間を共有したいと感じました。そこで私達に何ができるかを考え、フリータイムの時は一緒に会話をして一人ひとりの思いを聞いたり、サッカーをして共に汗を流したり、極力子ども達の傍に在ることを心掛けました。この心掛けは1つ目の目標に沿った良い努力だったと思います。

また、私たちと同行していたインドネシア学生4人のうちの1人のブルーノとホームステイできたことも、「どうすれば子ども達は楽しいと感じ

るか」を毎日考えることができる良い環境だったと思います。なぜなら私達が分からない細かな部分も、インドネシア語を介して子ども達と意見交換してくれたり、現地の文化を考慮して意見を言ってくれたりして「今日は良かったよ」「悪かったよ」というのを毎晩伝えてくれたからです。それがあったからこのワークキャンプをより良いものにできたのではないかと思うことがいくつかあります。例えば2回目の学校訪問の小学校に行く前に、挨拶は学生全員で言った方が子ども達は反応しやすいということと、学校を出るときにインドネシアのお別れの歌SAYONARAを歌った方が良いという2点アドバイスを受けました。すると最初の高校訪問よりも上手くいったように感じました。同班だったC班にだけ言うのではなく、全体に対しても「ミーティングの時にインドネシアの学生も意見共有したい」と言ってくれました。そのおかげでインドネシアの学生の理解度を確認しながら話し合いを進めることが来て、学生全員の意見を尊重することができました。アドバイスがなかったら学校訪問や教会での歌は上手くいかなかったかもしれないし、なによりチームで動くことができていなかったと思います。

上記に何回か出てきている学校訪問は楽しませるという目的の前に、私達が教える立場であるということ深く考えさせられました。アスラマにいる子ども達は日本という国に憧れを持っていて、日本に行ってみたいという思いがあるということを知っていました。それを聞いたときに授業をする側の人間として日本の文化や言葉を知ってもらい、さらに興味を持ってもらうことが子ども達にとって楽しい時間になるのではないかと考えました。そのために先程も書いたような前回の訪問の反省を活かしたり、年齢に合わせた対応策も考えたりと工夫を凝らしました。ただできなかったことが1つあります。それはインドネシア語がほぼ話せないためにインドネシアの学生に頼りすぎてしまったことです。そのせいでインドネシアの学生に負担がかかり、とても疲れていたのを知っていました。教える側になるということはそれなりの知識がいるという自覚があれば、日本での

語学学習のときに危機感を持って勉強できたと反省しています。インドネシア語をマスターするのは難しくても英語だったらもう少し勉強できたのではないかと感じました。

1つ目の目標を以上の3つに絞った上で感じることは、私達が、子ども達と交流することによって生まれた笑顔や幸せはあったのではないかといいと思います。故にこの目標は達成出来たといってもいいと思います。子ども達の親としての立場、授業をする側の立場として有意義な時間を提供することができたと感じます。

次に2つ目の目標について書きたいと思います。1つ目の目標が「子ども達のための国際交流」という名分であるなら、2つ目は「私自身のための国際交流」です。自分以外のために働くとは何か？と書きましたが正直なところまだ明確な答えは出ていません。しかし自身の成長として一番何を学んだかということについてははっきりと答えが出ています。それは、いかに自分をコントロールすることが重要かということです。

18日間の中でよくメリハリをつけるようにと言われてきました。何事に関しても必ずどこかで気が抜けてしまう時があったり、反対にとっても集中する時もあったり、あるいは休憩する時間もあります。そこで自分自身を戒め計画を立てて行動することができれば、自然とケジメつけることが出来て引き締まった1日を過ごせると思います。2つ目の目標と自分をコントロールするということに関連付けながら、ここでは前もって準備をする重要さと、言葉の壁がある中で自分の勉強不足を痛感したことの2つについて「自分自身のための国際交流」を書きたいと思います。

まず1つ目に準備の重要さですが、これは現地に行く前の準備期間から感じていました。日本語授業にしても教会での歌にしても交流会にしても、前もった準備がいるということ、そして時間がないということはIWC28の方から聞いていました。しかし準備万端で現地に行くことができたかと思うとそうでなかったと感じます。もちろん万端の状態まで準備するのは難しいとは思いますが、当日慌てていて、子ども達を優先できず自分

達のことでは手がいっぱいになっていたことを思うと、もっと事前期間を逆算して詰めることができたのではないかということに反省しています。具体的にいうとアスラマでの交流会と、運動会、そして衛生班としての仕事です。交流会の練習はもちろんしていましたが、様々な状況を考えて対応策を考えることが出来なかったと思います。臨機応変に予定を変更できたことはありますが、チャブレンが言われていたように、当日、交流会は子ども達との交流である目的を忘れていて私達だけで進めていたと思います。運動会に関しては事前にやることを決めておらずプログラムに一貫性がありませんでした。そして衛生班の仕事に関しては紙芝居と未使用歯ブラシの件についてしか出来ませんでした。他にも手洗い指導や歯磨き指導があったのにも関わらず、出来たのは数回でした。これらのことから私は事前に準備をすることがいかに大切か、そして余裕をもって行動するしかないかダイレクトに当日生きてくることを身を持って体験し、自分自身の危機感の無さを感じました。

次に、書く言葉の壁のことはこのワークキャンプで最も強く感じたことです。それは私の英語力がいかに乏しいかです。インドネシア語で話すことが完璧にできなくても英語ができればコミュニケーションをとることは出来ます。しかしインドネシア語は挨拶程度しか話せないし、英語もうまく話せないし、英語を話せるスタッフに頼りきりで、自分で話すには辞書で調べて話すことしかできませんでした。コミュニケーションが取れないことによって、何を考えて意見を言っているのか、子ども達はどんな心境で生活しているのかなどが浅い理解でしか汲みとれませんでした。そのためチーム全員で意見を共有できずインドネシア学生は疎外感を感じていたと思います。もっと私が英語を話すことができたなら交流の仕方とも現地の人たちとの接し方も変わっていたかと思うと、私は自分の英語力の乏しさと勉強不足を恥ずかしく感じました。インドネシアの学生やアスラマの子ども達は英語を話すことができるし、しかも日本語を少しでも知りたいという意欲が彼らにはありました。日本に帰ってきてから、インドネシアの学生

は日本語を必死に勉強しているということを知って今とても焦燥感を感じています。私は、キャンプを通してコミュニケーションをとるために英語を勉強しなければならないという使命感に駆られました。そこで私はこれから英語を勉強しようと考えています。キャンプが終わってからでは遅いですが、現地に足を運び感じた焦燥感や使命感を社会に出るまでに得るべき知識として将来の自分のために活かすことができれば、このキャンプが私にとっての踏み台となるかなと思います。

以上の2つから言えることは準備にしても勉強不足にしても、早い時期から余裕と危機感を持って私自身をコントロールすることが自身の成長につながるかということです。また、私がそうすることによって周りの人が影響されて組織全体の行動と意識が変わっていれば促し役としての仕事は果たされていたと思います。そういった意味で私はIWC29の副隊長としてその役割ができなかったことに反省しています。この反省を社会に出るまでと出てからの糧にして、IWCの経験を私の将来に活かしていきたいと思います。

ここまで2つの自分の目標について書きましたが、すべてはIWC29期の目標を達成させるためです。タイトルにKebahagiaaanは達成できたのかと書きましたが達成できたと思います。なぜなら、私達が現地に行くことによって生まれた笑顔は子ども達を幸せにしたと思うからです。Kebahagiaaanというテーマは誰が幸せになれば達成になるのかは決まっておらず、それが子ども達なのか、私達なのか、あるいは関わったすべての人に対してなのか分かりませんが、私達ができることは小さなことだと私は考えます。なぜならある問題に直面した時、解決策を考えても私達の力ではどうにもできないことがあると知ったからです。現地でも懸念されていたごみ・ハエ問題や子どもを親元で育てられない問題がまさにそれでした。もちろん全ての問題が解決できないわけではないと思いますが、解決できない問題がある限り幸せになるのは難しいかもしれません。それでも問題がある中で、幸せそうに楽しそうに子ども達は過ごしていました。私はその問題がどうにか解

決されて子ども達がより一層の幸せを手に入れることを願っています。

このワークキャンプではたくさんの方のことを考えさせられました。現地の子どものことであつたり、私達IWC29のことであつたり、私自身のことであつたり、これからの課題であつたりと濃い18日間でした。そしてこの出会いと経験は一生忘れないと思います。参加してよかったと感じています。

## Berkat pertemuan

Suguru Miyashita

Saya ingin paling mengatakan agar sesuai dengan periode pelatihan dan periode pra-persiapan hingga yang 18 hari, itu adalah berkat orang-orang yang telah terlibat dengan orang-orang yang telah bertemu. Hal ini penuh dengan rasa syukur juga untuk mahasiswa dan staf dari orang dan orang tua.

Justru karena itu orang-orang seperti membeli Anda berpikir bahwa kita mampu belajar banyak hal. Hal ini kita yang pergi ke relawan lokal dan tujuan pelajaran dari budaya Jepang, tapi ada banyak yang bisa Anda meminta mereka untuk membantu atau menjadi studi secara terbalik melalui IWC.

Untuk pertama kalinya di luar negeri, kata-kata pertama, pertama kalinya orang-orang, IWC bagi saya itu hanya pertama kalinya itu. Masih memperdalam tujuan satu begitu banyak hubungan dengan "Saya ingin menjadi anak-anak bahagia", dan dan mengekspos diri, kadang-kadang berbenturan panas, itu bisa mengesankan bersama-sama, saya merasa sekali lagi menakjubkan keajaiban Na. Saat itu mungkin belum pernah melihat bahkan wajah jika ada keinginan untuk pergi ke Indonesia. Dan bertemu adalah kesempatan tetapi cukup

merasa Will bahkan bahkan tidak bisa dihindari. Itu membuat saya berpikir bahwa itu tidak harus berterima kasih benar-benar menghadapi berpikir begitu.

Pengalaman di IWC ini menjadi harta saya, saya pikir dampak besar pada masa depan kehidupan sekolah. Tentu saja jika ada kesempatan kami ingin pergi untuk menyapa semua lokal lagi. Tapi saya, yang sekarang menjadi anggota masyarakat mungkin tidak pergi begitu. Jika ada kemungkinan tinggi yang tidak dapat menyampaikan rasa terima kasih secara langsung, saya akan berusaha untuk mereka gelap sisa hidup saya. Karena itu karena saya pikir itu akan menjadi Nari saya rasa syukur bahwa "Terima kasih bertemu." Saya juga tidak tahu apa yang mengirim kehidupan Konosaki, tapi saya ingin bangga terhadap yang datang dari saya bahkan setelah bertahun-tahun sekarang yang membawa tanda bahwa waktu IWC29. Pengalaman ini saya pikir tidak menjadi sesuatu yang lebih berkilauan jika demikian.

Akhirnya saya ingin mengucapkan terima kasih kepada orang-orang yang memberi saya terlibat lagi ke panggung IWC29 untuk. Terima kasih semua!

## 海外でボランティアを経験して

社会学部 4回生 大本 航平 (こうπει)



今回、私はこの国際ワークキャンプ（以下IWC）のプログラムに参加させていただき、実

際インドネシアで生活をして、様々な事を経験・実感し、私自身の糧になりました。

#### 〈インドネシア学生について〉

インドネシアのホテルに到着し、これからの18日間一緒に行動を共にするインドネシア学生と出会いました。インドネシア学生は、暖かく優しく、笑顔が素敵な印象を受けました。インドネシア学生は、母国語のインドネシア語だけでなく英語も堪能だったし、日本語も有名なフレーズを知っていて驚きを多く感じました。また、母国が話せなくてもジェスチャーや身振り手振りでコミュニケーションを取ることが可能であったが、英語・インドネシア語とスムーズに会話できるレベルまであればインドネシア学生・子どもたちと様々なことを話せるのではないかと思いました。IWCのプログラムについては後術したい。

#### 〈プリンビンサリ村・アスラマ・ホームステイ先について〉

プリンビンサリ村に着くと、子どもたちが迎いれてくれました。どの子どもも笑顔でとてもアットホームな雰囲気を感じました。バリ舞踊や伝統楽器の音楽を子どもたちが披露し、初めて見るバリ舞踊や音楽に感動しました。ホームステイ先にIWCのメンバーが紹介されるときも子どもたちが案内をしていたので地域と深い関係があることにより村全体が暖かみを持っているような感じがしました。プリンビンサリ村住む多くの子どもたちは経済的困難で親元を離れてくらす子どもが集まる養護施設（第五アスラマ）でした。その環境の中でも子どもたちは、笑顔が暖かく、IWCメンバーの名前も直ぐに憶えていて、言葉が通じなくてもほっこりする気持ちがありました。第二アスラマに行った時にもバリ舞踊や伝統楽器の演奏のおもてなしがありました。演奏や舞踊を披露していたのは、小さい子どもたちで驚きました。楽器は、しっかり音を出し奏で表現したいましたし、舞踊は、表情やパフォーマンスが素晴らしく感動しました。ここまでの技量を習得し披露するためには相当な練習量がいると思いますが、日々

の練習をしっかりとこなしているのだと感じました。私が、吹奏楽部なので見習いたいところだと思いました。毎日どこかで人に会うと必ず挨拶をする習慣があると思いました。知らない人でも挨拶してくれたり、会釈をしてくれたりみんな笑顔で応えていました。朝だと集合場所に向かう時に笑顔で挨拶をしてくれるので1日幸せな気持ちになれると分かりました。日本とインドネシアの文化の違いだとは思いますが、日本でも挨拶をみんなのできるようになればいいなと思いました。子どもたちとも多く関われる機会があり、「交流会」「日本食パーティー」「遊ぶ」「ワーク」など色々ありました。遊びを通して、ある子どもとプリンビンサリ村の周りをジョギングしました。プリンビンサリ村の事、自分が何でこの児童養護施設に来たのかとかをジョギングをしながら教えてくれました。親元を離れて暮らしているから私たちのような大学生が来ると嬉しいみたいで私たちのことを家族だと思って接してくれていたみたいです。村の事も知ることが少しはできたと、全員ではないけど一人の子どもの事をしる機会が少しでもあった事は私自身の中で大きな存在になったと思いました。交流会、日本食パーティーでは、日本の文化を広め子どもたちに楽しんでもらえるようなプログラムでした。交流会は、事前に変更点も多くあったが周りの仲間が臨機応変に対応してくれたのでなんとか無事終えることができました。日本食パーティーは、日本食を作ってアスラマの子どもたち、ホストファミリーに日本食を食べてもらう企画でした。カレーを作ったんですけど、野菜の係であったり、煮込む係であったり、各班で協力してでき、インドネシア学生も一緒に作りみんなで一つの事に向かって作業していたので集中もあり、美味しいカレーになりました。ホストファミリーも喜んで食べられていましたし、子どもたちもおかわりをしてくれたのでカレーにして正解だと思いました。

また、イブのお手伝いもしました。あの環境の中で美味しい料理を作るのはすごいと思いましたし、色々なインドネシア料理も覚えることができました。

プリンビンサリ村でのおもてなしの後に、ホームステイ先が発表されました。その時に、ホームステイ先まで子どもたちが案内してくれる所が多く地域と密接している事が分かりました。が、私がホームステイさせていただく所はプリンビンサリ村（第五アスラマ）から遠く車で送っていただきました。ホームステイ先に着くと、ホストファミリー（イブ／パパ）が迎え入れてくれました。ホストファミリーは、笑顔で私たちを迎え入れてくださり不安が吹き飛びました。私自身の語学力が心配でしたが、ホストファミリーとの距離も縮めることができ、英語やインドネシア語でコミュニケーションが取れるようになっていました。朝ごはん（ピサングレン）も毎回用意してくれていて今日1日のやる気に繋がっていました。朝早くから内職の仕事があると仰っていたので1度早く起きて「イブ」と「パパ」のお手伝いをしました。ピサングレンの作り方を教えてもらったり、イブ・パパ・Febbyのお父さんと話せたりととても気持ちのいい朝でした。ホストファミリーの笑顔や心の暖かさから13日間不自由なく生活できたと思います。笑顔が素敵な家庭だと幸福感が増え毎日が楽しかったです。13日間ありがとうございます。ホームステイ先は、インドネシア学生のFebbyと一緒にでした。Febbyとは、18日間をずっと共にしてきました。空き時間に、Febbyにバイクでプリンビンサリ村を案内してもらい、インドネシアの景色や風景を観察できたし、村に住んでいる人が手を振ってくれて楽しくかつ貴重な経験ができたと思いました。分からない所をお互いに聞いたり、就寝前にインドネシア語をクイズ形式にして教えてもらったり、冗談を言える仲までになりました。プリンビンサリ村を出発し、ホテルに着きました。その日の夜が、キリスト教の礼拝の日で友だちや家族集まるから紹介をしたいと言われFebbyの家に行くことになりました。Febbyのご家族とも話すことができましたし、Febbyが日本語を学んでいた先生やシクラマさんにも会えてとてもとても貴重な経験になりました。その先生にFebbyの事をきいたり、日本の事を伝えられたりできたし、私の事を友だちだと思ってくれてるFebbyに感

謝したいです。18日間ありがとうございます。本当に、IWCのパズルのピースの1つだと思いました。本当にありがとうございます！

#### 〈日本語授業について〉

私たちは日本語授業を行いました。私の班は、中学校、高等学校、専門学校で授業をさせていただきました。どの学校も日本語を知っている生徒が多く授業がスムーズに進むことができたと思います。また、インドネシアの生徒たちは、笑顔が多かったし、知っている日本語で話しかけてくれてとても嬉しかったです。このプログラムが上手くいったのは、インドネシア学生のDeoと他のメンバーの協力があったからこそだと思います。本当に感謝の気持ちで一杯です。

#### 〈最後に〉

私は、このIWC29thに参加して様々なことを学びました。報連相の大切さ、語学力の大切さを改めて学びました。語学力は、就職をしてからも使うことが多いと思うし、ここで出会えたインドネシアの人々と話したいと思うし、海外に行く機会もあると思うのできちんと勉強しようと思いました。4回生で初の海外ボランティア就職活動の前に貴重な経験ができたことを光栄に思います。最後に、IWC29th、インドネシア学生、シクラマさん、フォルマン、イブ・パパ、インドネシアの人々本当にありがとうございます。この経験これからも自分の糧として生きていきたいです。

## Terima kasih

Kohei Omoto

Pertama di luar negeri itu menjadi pengalaman yang sangat baik. Saya berpikir bahwa hubungan yang diperdalam dengan mencari ke berbagai dan memiliki rekan IWC juga tujuan relawan di Indonesia untuk pergi ke sementara lokal di Jepang. Selain itu, mahasiswa Indonesia,

atau saya di kontak dengan kehangatan dan kebaikan untuk orang tidak tahu kami, bertemu di negara bahasa Inggris yang sempurna dari Indonesia sejauh ini, jika ada kesempatan untuk pergi Sekarang bahwa Anda memiliki teman saya ingin pergi ke. 18 hari, saya berterima kasih kepada semua orang yang terlibat di Indonesia. Terima kasih semua!

## 出会いに感謝

国際教養学部 3回生 芝山 みちる  
(しばピー)



インドネシアワークキャンプに参加することができて本当に良かったと思っています。このIWCに参加して私はたくさんの人に出会い、人と人との繋がりを感じ、いろんな優しさに触れることができました。出会えたすべての人、私に気づきを与えてくれた出来事、すべてのことに感謝します。

私は大学に入ったころから留学やボランティアに興味を持っていました。なので、留学の説明会には一回生の頃から参加していましたが、先の不安ばかりを考えてしまいなかなか行動できずにいました。なにもしないまま三回生になり、もうすぐ社会人という焦りから、大学生である今しかできないことをしたいという気持ちと、やっぱり海外に行きたいという気持ちができました。ある講義で、気づきが3つあったとしても、行動が0なら $3 \times 0 = 0$ だということを教えていただいて、本当にその通りだと思いました。今までの私の大学生活でたくさんの活動に参加する機会がありました。参加したほうが絶対に充実した大学生活を送れると気づいていながらも勇気がなく行動

に移せず、後悔しての繰り返しでした。そんな自分に嫌気がさし、気づきが無駄にしないように行動しなければならぬと思いました。人との繋がりを感じられるプログラムに魅力を感じ、IWCに参加することを決めました。

IWC29に参加する日本人学生20人に初めて会ったとき、みんなと仲良くなれるか不安でいっぱいでした。毎週金曜日の放課後にインドネシア語研修、毎週お昼休みに集まって日本語班や記録班などの班決め、Tシャツのデザイン、交流会のための歌やダンスの練習、募金活動などみんなで何度も顔を合わせているうちに同じ目標に向かって仲が深まりました。教会で歌う歌がうまく歌えなくてもめめた時もあったけど、そんな時まとめてくれる人がいればそれについていく人や協力する人もいて、人にはそれぞれ役割があるのだと学びました。私は、自分たちがやる歌やダンスの練習に必死で、現地に着いてから必要になるインドネシア語や英語の勉強をあまりしませんでした。目の前のことしか見えていなかったです。

現地に行ってホテルでインドネシア人学生と会ったとき、少ししか喋れない英語と指さし本を使ってコミュニケーションを取りました。一生懸命私の言っていることを理解しようとしてくれて、うれしかったのと同時にインドネシア語をもっと勉強しておけばよかったとやっぱり後悔しました。インドネシア人学生も同じチームだということは何度も聞いていたけれど、日本にいるときにはまだ実感がありませんでした。別れるときあんなに寂しい気持ちになるなんて思っていませんでした。会って、同じ作業をして教えあって、同じ18日間を過ごしているうちにチームのかけがえない存在になっていることに気づきました。夜のミーティングで日本人学生だけが残って、夜遅く帰ろうとしたら1時間前くらいに帰ったはずのインドネシア人学生が待っていてくれたことには驚きました。待っていてくれたことに理由なんかなくて、“友だちだから”それだけでした。常に日本人学生のことを気にかけてくれてインドネシア人学生からたくさんの優しさを感じました。

ホームステイ先ではイブが温かく迎えてくれま

した。パパは2年ほど前に亡くなったらしく、子どももデンパサールに住んでいるためイブひとりで暮らしていました。懐かしそうにパパの写真を見せてくれたイブはどこか寂しそうでした。お昼にワークや日本語プロジェクトをして、夜遅くまでアスラマに残ってホームステイ先に帰ると、着いた頃には疲れ切っていてすぐに部屋に入ってしまう、イブとコミュニケーションを取る時間をあまり取れなかったことを後悔しています。それでも、当たり前のように毎朝あたたかい甘い紅茶とピザ・ゴレンやお菓子などの朝ごはんを用意してくれたイブには感謝しています。

ブリビンサリ村ではホームステイ先に向かう道でもすれ違う人みんなが笑顔であいさつをしてくれてとてもうれしかったです。ワルンのイブと仲良くなり、またブリビンサリ村に来たら家に泊まっていいとも言ってくれました。私たちが村を離れる前日の離村式にも駆けつけてくれ、手紙とプレゼントをもらいました。今考えたらしてもらうばかりでした。優しく接してくれたブリビンサリ村の方々に感謝がいっぱいです。

アスラマで出会った子どもたちは、母親がいはいわけではなく70%は貧しい子どもたちです。子どもたちにはそれぞれ背景があり、バニユポ村という貧困村からきている子どももいます。バニユポ村には、子どもの部屋が豚小屋と一緒にだったり、一日三回ご飯を与えることのできない家もあります。兄弟が5人以上いて電気やトイレがなく、床が土であることなどが貧しいとされています。バニユポ村を訪れて、初めて本当の貧困を見た気がします。自分の目で見ないと、聞いた話や写真だけじゃ伝わらないものがあると思いました。インドネシアの児童養護施設の目的は、子どもたちを教育し自立させ収入を増やして貧困から脱出させることです。またアスラマではアフターケアとして、歌を歌ったりダンスをしたり、笑うことや幸せを大切にしています。

私たちが初めてアスラマに行った時、子どもたちやイブたちが笑顔で迎えてくれました。私たちがアスラマ内を見学するとき、嬉しそうに着いてきてくれる子や、手を握ってくれる子、元気に走

り回る子、寄り添って歩いてたくさん話を一生懸命してくれる子、みんなそれぞれ私たちを受け入れてくれました。入村式ではバリダンスや楽器を披露して楽しませてくれました。初めてバリダンスを見て、指の先まで動きがあってとてもきれいで感動しました。交流会もすごく楽しくて子どもたちの歌やダンスがかわいくて、この日のために練習してくれたのだと思うと嬉しくなりました。私たちのドラえもんやAKB48の踊りは思ったよりも盛り上がりなかったけど、交流会の雰囲気良かったです。みんな笑っていました。歌や踊りを順番通り、時間通りきっちりやるのも大事だけど、みんなが、子どもたちが楽しめるなら、その場の雰囲気に合わせるのも大事なことだと思います。子どもたちと遊んでいると、たまに寂しい表情をする子がいます。日本人学生におんぶしてもらっていた子どもが他の子どもと交代になったとき、もっとおんぶしてほしいそうでした。親と離れて暮らしていることを、こっちが忘れそうになるくらい普段明るい子どもたちだけど、すごく寂しい思いをしているのだろうと改めて感じました。その子とずっと遊びたい、傍にいたいと思いますが、アスラマには寂しい思いをしている子が一人だけでなく、たくさんいます。私たちと一緒にいる時間が、子どもたちにとって少しでもたのしいものになればいいなと願いました。

私たちが子どもたちと遊んでいる間もイブたちは毎日子どもたちのご飯と一緒に私たちのごはんを作ってくれていました。一度、玉ねぎの皮をむく手伝いをさせてもらったけど、量が多くて大変でした。イブたちは笑いながら楽しそうにやっていて毎日すごいと思ったし、感謝しました。

ムラヤでのワークの時も、イブたちが毎回の休憩に食べ物や飲み物を提供してくれて、暑い中でのワークも乗り切ることができました。ワークは雨や風を防ぐための塀作りで、私たちは石や砂を運びました。ムラヤの子どもたちも学校が終わると手伝ってくれて、楽しいワークになりました。ワーク中もお互いを気にかけて、「がんばって」と声を掛け合いました。ひとりじゃないと思うだけ

で頑張る力が湧いてきました。みんなでやるワークだから、自分で体力的に大丈夫だと思って誰か一人が頑張りすぎても駄目だし、休む時には休む大切さを知りました。ムラヤでのワーク最終日、塀は完成とまではいかなかったけど何もなかった時が想像できないくらい立派な塀ができていて感動しました。機械だとすぐにできる作業でも、ひとがーから何かを作るのはすごく時間がかかります。ひとりではできないことでも、みんながいて協力し合えばできるのだと実感しました。私たちだけではやり遂げることができなかったです。工事のひとや、手伝ってくれた子どもたち、イブたちがいたから、笑顔がたくさんあったから、楽しくワークできました。

インドネシアを離れるときは寂しかったです。楽しいときも苦しい時もいろんな感情を共有して、同じ時間を過ごした日本人学生、インドネシア人学生には本当に感謝しています。みんながいたから18日間楽しくて、たくさんの学びに気づくことができました。1人ではできない体験をこのメンバーで経験できたことをうれしく思います。

## Terima kasih

Michiru Shibayama

Saya pikir sangat baik bisa berpartisipasi dalam program IWC.

Saya bertemu dengan banyak orang di program IWC ini dan saya merasakan hubungan antar orang, mampu menyentuh berbagai kebaikan.

Semua orang yang saya temui, dan peristiwa yang memberi pemberitahuan kepada saya, saya ingin mengucapkan terima kasih kepada semua hal itu.

Saya sangat bersyukur, kepada anak - anak yang memberikan semangat dengan senyuman, orang - orang di desa Belimbingsari yang tiap kali saling bertukar salam dengan kita, Ibu

yang telah mempersiapkan sarapan untuk kita tiap pagi, seperti biasa the hangat manis, pisang goreng, dan permen setiap pagi.

Kami sendiri yang kerja tidak akan mampu menyelesaikannya, karena para pekerja dan anak - anak yang membantu, karena Ibu, dan ada banyak senyum, saya bisa bahagia bekerja. Kemudian, berbagai banyak emosi ketika menyenangkan bahkan menyakitkan menghabiskan waktu bersama siswa Jepang dan siswa Indonesia benar - benar sangat bersyukur.

Selama 18 hari bahagia karena semua orang banyak belajar. Satu hal yang saya senangi bersama semua orang merupakan hal yang tidak bisa dilupakan

## IWCでのたくさんの体験と出会い

国際教養学部 3回生 永本 愛理  
(えりぴい)



私はIWCに参加し、たくさんの事を体験し、今までの生活では気付けなかったことを学ぶことができました。IWCに参加できたこと、また関わっていただいたたくさんの方々本当に感謝しています。忘れることのない体験をすることができました。

### <きっかけ&事前学習>

私がIWCに参加しようと思ったきっかけは1年生の時から海外に行きたいという気持ちはありましたが、行動にうつす勇気がなく、3年生になっていました。3年生が最後のチャンスだと思い、

説明会に参加しました。IWCの活動はそれまで知らなく、海外でボランティアをするという事も今まではあまり考えたことがありませんでした。でも説明会で見た子ども達の笑顔や学生さん達の姿にとっても興味を持ちました。しかし不安も大きく、応募することもとても悩みましたが、今では本当に応募して良かったと思っています。参加できることが決まり、事前学習が始まりました。事前学習ではインドネシア語の授業や日本語プロジェクトの準備、交流会の練習などたくさんの事がありました。始めは、人見知りをすることや3年生が2人ということでもみんなと仲良くなれるのかなと心配で、準備を一緒に進めていく中でぶつかることもありましたが、徐々に仲も良くなっていきました。でも私は出発が近づくにつれて楽しみよりも不安が大きくなり、早く行きたいという気持ちと本当に複雑な気持ちでした。

#### <インドネシアに着いて&インドネシア学生との出会い>

いざインドネシアに行ってみると不安だったのが嘘のようにあつという間の18日間でした。日本とは違うことや日本と同じことなど様々で、驚きや楽しみがいっぱいの毎日でした。初日からインドネシア人学生と交流が始まり、自分の英語力の低さ、インドネシア語の勉強不足を痛感しました。でもお互い笑顔で、ジェスチャーなども含めて初日からホテルで日本語プロジェクトについて説明し、理解し合うことができました。インドネシア人学生の理解力の凄さには驚かされたと同時に自分も頑張らないといけないという気持ちが強まりました。それからの活動の中でも何度も助けてもらい、感謝の気持ちでいっぱいでした。習慣や文化は違っても、一緒に活動し、たくさん笑い合い、協力し合い、とても楽しく過ごすことができました。

#### <プリンピンサリ村&ホームステイ>

プリンピンサリ村での生活は初めてのホームステイで、アスラマの子ども達とも出会えて、たくさんの事を経験しました。ホームステイでは私は

日本人学生4人と一緒に、とても綺麗でワルン(お店)をしている大きなお家でした。パパ、イブとあまり最初は話せなかったけど、日にちが経つにつれて少しずつ話せるようになり、パパはバリ語を教えてくれたり、イブは毎朝おいしい朝食と温かい紅茶を用意してくれたり、とても嬉しかったです。おはようなどの挨拶をするだけでも嬉しく思ったし、イブは意味が分かっていなかったかもしれないけど、毎日日本語で「いってきます」と言う笑顔で手を振ってくれました。また、洗濯などする中で日本でいつもしてくれているお母さんに改めて感謝の気持ちが湧きました。

プリンピンサリ村の人達は本当に温かく、知らない人でもすれ違うときに笑顔で挨拶してくれたり、はじめは待つだけだったけど、どんどん自分からも挨拶するようになっていました。日本ではないことで、逆に変だと思われるかもしれないけど、こういう文化はとても良いと思いました。しかし、村の環境は道端にたくさんのごみが落ちていたり、たくさんハエがいたり、犬が放し飼いされていたりと問題もありました。でも村の小学生たちがゴミ拾いをしていたり、ハエを減らすために色々試したりと行動し、すぐに解決できなくても問題に取り組み、解決できていったら良いなと思いました。

#### <アスラマの子ども達&バニユボ村>

アスラマでは、たくさん子ども達と出会いました。とても人懐っこくて優しく、どうしてこんなに笑顔なのだろうと思うほど笑っていました。子ども達の名前を覚えるのに時間がかかってしまったけど、子ども達から名前を呼んでくれたり、話かけてくれることも多くて、徐々に仲良くなっていきました。一緒にバトミントンやバレーボールをして遊んだり、言葉が通じなくても楽しめました。毎回の食事でも食べるものは違ったけど、みんなと一緒にアスラマで食べて、食前のお祈りをするので今まで以上に食事や用意してくれる人たちに感謝の気持ちを持ちました。またアスラマの子ども達の背景を知っていく中で、バニユボ村を訪ねたことは大きな衝撃でした。今まで写真

や映像などで貧困について見たことはあったけど、実際に目の当りにして、貧困問題という今までは遠くに感じていたものが、身近に、またリアルに感じました。食事も十分に摂れず、生活も小さな家に大勢の家族が住んでいて、牛や鳥もブドウ畑の中で飼われていて、子ども達も十分な教育が受けられる環境ではありませんでした。しかし村の人たちは作業しながらも笑顔で私たちを見て挨拶してくれました。アスラマにはこのような環境から来た子がいて、家族と離れて寂しいはずなのに笑顔で、貧困を抜け出すために一生懸命勉強を頑張っているということを改めて知り、子ども達からたくさんのことを学びました。自分の日本での生活や過ごし方、今までの考え方、また自分に何かできることがあるのかなど色々なことを考えるきっかけになりました。

#### <ワーク>

このプログラムの大きな目的であった第5アスラマの塀をつくるというワークでは、毎回トラックの荷台に乗り、移動しました。作業は石やブロックを運んだり、土を運んだり、バケツリレーなどをしました。男女の差や体力の差などからどのようにワークを進めていくのが良いか考え、試しながら進めていきました。みんなのことを考え合ったり、ワーク中に声をかけて励まし合ったり、支え合ってワークを進めていけたと思います。第5アスラマの子ども達とも出会えて、作業を手伝ってくれて、バケツリレーは会話しながらバケツを渡し合って、本当にみんなで協力してワークをしていると感じることができました。石を持ちやすいように割ってくれたり、一緒に塀をつくってくださった作業員さん、子ども達、みんなでつくることができて良かったです。

#### <日本語プロジェクト&交流会、教会訪問>

私は日本語班で日本語プロジェクトのためにいろいろお表やかるたなどたくさん準備してきました。でも子ども達は楽しんでくれるか、理解してくれるかなどはじめての高校での授業の前はとても心配でした。しかし日本語を結構知っていてく

れて、思っていた以上にスムーズに授業を進めることができたし、私たちも学生たちもととても楽しめました。終わった後は毎回良かったところ、改善した方がいいところを話し合って、小学校、看護学校と日本語プロジェクトを成功することができました。

交流会も事前学習の頃からたくさん練習し、準備してきました。アスラマの子ども達もバリダンスや可愛いダンスを披露してくれて、見ていてとても笑顔になりました。私たちもダンスや歌、ゲームなどをし、一緒に子ども達が歌ってくれたり、ゲームを楽しんでくれたり、反省点もありましたが交流することができました。

教会訪問では日曜日に教会を訪れ、お祈りし、私たちは歌を歌いました。何度も日本から練習してきましたが、ハプニングがあったり、事前に立ち位置が変わるといふこともありました。しかし何度か歌う場所を与えてもらい、温かく聞いてくださってみんなで歌うことができて良かったです。また体験したことがなかった教会でのお祈りなどインドネシアの文化や宗教についての考え方を知り、体験できて良かったです。

#### <ミーティング&振り返り>

何かある度にアスラマでミーティングをし、他の人の考えを知ることができて、自分の考えも話して、もっと良くするためにはどうすればよいかをみんなで考えました。このミーティングのお陰で仲間もどんどん深まったように思います。最後のエヴァリュエーションに向けての振り返りも最初は大変で聞かれても、すぐに答えられなかったけど、する度にみんなが変わっていきました。そして発表に向けて班ごとで考え、みんなで相談し合い、先生たちに助けをもらいながら英文も完成させることができました。

#### <最後に…>

私がIWCに参加して改めて大切だと感じたことは、人との出会いと行動することの大切さ、笑顔の大切さです。参加したからこそ出会えた人達がたくさんいて、インドネシアにも繋がりを持て

て、本当にあの時応募して、行動して良かったと思いました。不安だけを考えて行動にうつせなかった今までがもったいないと感じました。そして、笑顔はこのインドネシアでの18日間においてかかせなかったものでした。まずは子ども達の笑顔からたくさん学びました。笑顔が言語の違いに関係なくコミュニケーションにおいて大きなものだということ、今回IWC29期がテーマにしていた“Kebahagiaan” = 幸せ に繋がることも改めて感じました。

また、今までの生活が当たり前ではないということと、いつも支えてくれている家族に対する感謝を感じました。これからも日本で自分にできることは何かということを中心に行動していき、今回の経験を将来に繋げていきたいと思います。そして、また今回出会った人達に会いにインドネシアに行きたいです。その時に少しでも幸せが増えていることを心から願っています。最後にもう一度、支えてくれた方々、一緒に活動してくれた方々、メンバーに本当に感謝します。ありがとうございました。

## Saya baik untuk dapat berpartisipasi dalam IWC

Eri Nagamoto

Saya berpikir bahwa ber partisipasi dalam IWC itu benar-benar baik. Pada mulanya merupakan kecemasan besar, tapi itu adalah 18 hari terbaik. Pertama-tama, bahwa banyak kegiatan dengan mahasiswa Indonesia dengan budaya dan bahasa yang berbeda, ada banyak kesulitan, untuk bekerja sama, tapi saya bisa belajar banyak hal yang lebih sulit. Anda dapat memikirkan dan mempertimbangkan berbagai hal, dan orang lain akan memberitahu, dan saya piker setelah bekerja bersama-sama, akan benar-benar menyenangkan bahwa kita telah menjadi teman. Kemudian untuk terlibat

dengan anak-anak di Asurama mengubah cara berpikir saya menjadi sampai sekarang. Berbagai lingkungan terpenuhi anak yang berketer belakang, tetapi dalam penampilan sangat bersanakat saya menjadi sangat memaksa untuk tersenyum. Kami juga berterima kasih kepada Ibu yang ramah dan relah mempersiapkan makanan setiap hari. Dan juga kegiatan utama di IWC ini yaitu pembuatan pagar kamimampu kulakukannya berkat bantuan banyak orang seperti, anak-anak Asrama, Ibu, dan anggota staf. Selain itu, anak-anak dari orang sekolah dan siswa bekerja dengan kami untuk membantu Program Jepang, bahwa kita mampu mekakukan homestay dan berkat banyak orang di desa Burinbinsari yang lembut. Terima kasih banyak. Hal ini penuh kcapan syukur. Jangan lupa untuk mengucap syukur, dan bahwa anda telah belajar tentang Jepang, saya ingin terus bertindak untuk itu.

## 成長させてくれたIWC

国際教養学部 2回生 石橋 朔 (はじぴい)



私にとってこの国際ワークキャンプ（以下、IWC）にまつわる全てのことが初めての経験となりました。私達はインドネシアにてボランティア活動を行ったのですが、そもそも私がこのIWCに参加した大きな一因となるのが、自分自身そして自分の価値観を大きく変えたいと思ったことでした。率直に言うと、このプログラムを知るまでボランティアに全く興味がありませんでした。し

かし、私はインドネシア語の講義を受講しているのですが、その授業の際に第27回のIWCに参加されていた先輩からこのプログラムの存在を知りました。その方はIWCに参加して人生観が変わったとまでおっしゃっていて、実際にその後インドネシアで日本語教師になるために、現地の教育実習を受けに飛び立っていきました。そのような先輩の姿を見て、話を聞いて、人生の目標を打ち立ててしまうような魅力を持つそんなインドネシアにも行ってみたいと強く思いこのプログラムに応募しました。そして無事参加することが決定したのですが、私達にとって最大といっても過言ではない壁が立ち塞がりました。チーム間のコミュニケーション問題です。全員がなかなかコミュニケーションを上手く取れず、しおりを作るしおり班、記録班など複数あったのですが、各班の進捗状況が連絡されず連携することができませんでした。その原因は報告・連絡・相談、いわゆる「報連相」が成っていなかったからでした。この時私は、「今、日本人の間でもコミュニケーション出来ていないのに、これから出発して日本語もおそらく通じないであろう現地の学生と本当に意思疎通が図ることができ、うまくやっていけるのだろうか。」ととても心配していました。そして、私の個人的なことです。今まで人と話すことが苦手で、恥ずかしながら人との関わりを避けてきたので、このプログラムでメンバーと深く関わろうとすればするほど、空回りして自分自身のモチベーション低下を招いてしまいました。その結果、プログラムを辞退しようと思ったこともありました。「報連相」はチーム活動において重要な要素であるとメンバー全員が頭で理解しながら、実際にその場に立ってみると、班としても個人としても何から手を付ければわからず、周囲を見回して瞬時に的確な行動をとるのがいかに難しいことなのか身を以て学びました。しかし、このようなことがまだインドネシアへ出発する前の日本にいる時点で気付くことが出来たことは幸いなことだったかもしれません。現地では、一度インドネシアの学生や施設のスタッフ、引率教職員の方々にスケジュールの変更点を伝え忘れるという失態

を犯してしまいました。しかし、日本での経験もありすぐに対処することが出来ました。「報連相」が改善されたことによりチーム全体が潤滑していききました。

現地でのボランティアは、プリンピンサリ村の第5アスラマの施設の塀を作るための砂や石を運ぶことと施設の子ども達と遊んだりすることでした。前述したように、私は自分自身を変えたいと思いこのプログラムに参加しましたが、子ども達と遊ぶ中で私自身の中に矛盾が生じてしまいました。子どもたちのためのボランティアなのに自分自身のことを考えていいのだろうか。もっと純粋に子ども達のために、果てはインドネシアの人々のためになることを考え、実行していくべきなのではないかと考えるようになりました。そのように考え方を改めると、まず周囲に対しての気配りができるようになりました。ワークの時には、より積極的に自ら進んで仕事ができるようになりました。

そして、いわゆる貧困村と言われているバニユポ村へ訪れた際には、村の現状を目の当たりにして私たちが日本で当たり前であると思って行っていたことが、いかに贅沢なことであるかと自覚すると共に、バニユポ村に限ったことではありませんが、世界中にある貧困村と言われている村を私達はどのようなことで支援できるのか。また、その支援は本当に意味のある支援であるのか、自己満足になっていないかと考えると、貧富の差を解消するには私たち1人ずつの力ではどうしようもないということが身に染みてわかり、同時に私たちの無力さを痛感しました。しかし、私達が日本に帰ってきて、出来ることは現地で見えてきたことを誰かに伝えていくことだと思います。現状を変えるためにはまず、現状を知ってもらうことが重要です。1人だけの力は無力でも、IWCのメンバー全員が第30期のIWCメンバー、親や友達などの身近な存在からインドネシアの現状を伝えて知ってもらい、そこからさらに情報が拡散されれば多くの人々に知ってもらえるので、何か少しでも変化が起きるかもしれません。確実性も少なく、

とても地道なやり方ではありますが、少しでもバニユボ村を始めとする貧困村の人々が救われ、貧困の連鎖から抜け出せればいいと思います。

自分自身が変わることができるきっかけになればいいと思い参加したIWCですがこんなにも自分にとって多様な考え方が生まれたことは、この先の長い人生でとても大きな財産になると思います。貧困村で感じたようにどれだけ自分たちが整った環境で生活していたか。どれだけ周囲の人達に支えられ、自分1人では何もできないかよくわかりました。

確かに、私達が貧困村に対し出来ることは小さく少ないことかもしれませんが、ボランティアと同じように実際に行動を起こそうとする決心が一番大事だと思います。このIWCで貧困問題を実感できたことが、日本に住んでいたころの自分では実感することのできないかけがえのない体験でした。

このメンバーで18日間過ごし考え、ぶつかり辛い思いもたくさんしましたし、何度も辞退したいと思いましたが、プログラムが終了してみて本当にこのメンバーでよかったと心から思います。先輩方も優しく接していただけ、本当に終わってほしくないと思いましたが、出会いがあれば別れもあり、この4ヶ月を支えてくれた仲間達、インドネシアで暖かく接して下さった方々、引率教職員の皆様、本当に心から感謝しています。また、このIWCで学んだ様々なことを生かし、これからの人生を謳歌できるよう楽しみ、少しでもインドネシアの子ども達を救うことができるよう、今度は自分が支えることができるように成長したいです。

18日間ありがとうございました。

Terima kasih untuk semua pengalaman dan orang-orang yang di Bari

Hajime Ishibashi

Saya pertama kali mengalami banyak hal dalam IWC ini. Dari pengalaman itu, Perasaan berterima kasih lahir di dalam saya.

Pertama-tama orang dari fakultas, termasuk Pendeta yang sudah mendukung, Saya Harap Beliau tetap mendukung dimasa muda saya.

Orang Desa Belimbingsari yang telah menerima kami (Orang asing) dengan sangat hangat, dan selalu memberi kami sapaan dan senyum setiap kami bertemu, Sepulang kami dari kerja lelah kami tetap. Disambut dengan sapaan dan senyuman yang indah dari Bapa dan ibu, sampai kami tertidur. Dan saya ucapkan Terima kasih juga buat mereka yang telah menyiapkan sarapan dan makanan buat kami di Asrama. Ekspresi anak Asrama yang selalu cerah dan ceria yang dengan gerakan tubuhnya selalu mencoba menyampaikan sesuatu kepada kami yang kurang mengerti bahasa Indonesia.

Dan di asrama yang telah mempersilakan kami melakukan kegiatan bersama anak-anak.

Dan di tempat kerja, saya ingin mengucapkan terima kasih untuk widya asih 5 yang telah menyediakan makanan dan minuman buat kami saat kami beraktivitas disana dan kami meminta maaf apabila kami 24 mahasiswa-mahasiswi anggota IWC melakukan hal yang tidak berkenan saat kami bekerja dan beraktivitas di Belimbingsari dan di melaya terima kasih atas perhatian dan bimbingannya.

Sekali lagi saya ucapkan banyak terima kasih untuk kami semua.

Hormat kami dari Universitas Momoyamagakuin, Terima kasih.

## たくさんの思い出と感謝

経営学部 2回生 井須 奈々絵 (ななピィ)



IWCに参加したきっかけは、大学の入学前から海外の文化などに興味があり、大学に入学したら外国へ行って日本以外の文化を実際に生活して体験をしたり、たくさんの人と出会いコミュニケーションをとりたいと思っていました。しかし1回生のときは初めての1人暮らしや大学生活に余裕が持てなかったり、外国へ行ってうまくコミュニケーションを取れるのかなど不安もあり海外へ行くことを諦めてしまいました。2回生になって大学の生活にもなれて余裕を持てるようになり、海外へ行って日本以外の文化に触れたり、たくさんの方を経験したいという以前からの思いを実現するために海外へ行こうと決心しました。大学の留学制度はどんな種類があるのかを調べていた時にIWCの存在を知りました。IWCの活動はホームステイをして、インドネシアの児童養護施設に行き子どもたちと触れ合ったり、ワークをしたり、また日本語授業をしたりとたくさんのプログラムがありました。IWCの話聞いた時は異文化に触れながらたくさんの方と関わることができ、団体でのボランティア活動ができる機会はあまり経験できることではなく大学生のうちにはかたできないことだと思い参加を希望しました。

事前研修では、インドネシア語の勉強、インドネシアの基礎知識など出発前に学んでおかなければならないことをたくさん学びました。事前研修で学んだことはインドネシアに着いて大切な学習だったと感じました。また今年はインドネシアナイトがあったのでインドネシアナイトで披露するダンスや歌を練習し、同時進行で交流会の練習もありたくさんおぼえることができました。空き時間

には集まれるメンバーは集まって練習したり、練習が続いて大変でしたがそのおかげでみんなと一緒にいる時間が増え仲をふかめることができました。日本語授業の練習は班のメンバーと話し合い自分たちが進行しやすいようにアレンジしたり授業の時間が余らないように最悪の事態を考えてたくさんの方の対策も考えながら進めていきましたが、現地の子どもたちが私達の説明で理解してくれるのか、楽しんでくれるのかと不安もありました。また私はピアノを小さいころに習っていたので協会で披露する歌の伴奏を連弾でひくことになりました。私達が弾く曲は想像以上に難しく練習時間も少なかったので出発ギリギリでやっと2人であわすことができ、本番でも演奏がとまることなく弾けたのであきらめず練習を続けてよかったなと思いました。

6時間半のフライトを終えインドネシア、バリ島につきホテルでインドネシア学生と対面しました。初めてあった時は緊張してなにを話したらいいかわからず戸惑いましたが自己紹介などをしたり、コミュニケーションをとることができました。しかしこの時、バリ島にきて初めて言葉が伝わらないもどかしさを感じました。日本語の授業の説明をするときも日本語が伝わらないので知っている英語やジェスチャーを使って説明したりとなんとか伝えることができましたがうまく伝わっていないことは他の班で理解しているインドネシア学生に説明してもらったりしてもらいました。言葉が通じない中でどのようにしたらコミュニケーションがとれるのかを初日から考えさせられました。

2日目からプリンピンサリ村へ移動し12日間ホームステイをさせてもらいました。ホームステイ先のイブは優しい笑顔で迎え入れてくれ、おいしい朝食をだしてくれとても感謝しています。またホームステイ先での暮らしでは日本ではお湯でシャワーをしますが、プリンピンサリではマンディーという水浴びをしました。また部屋には通気口があいていて部屋の中に入りやす時にはトカゲが入ってきたりと、日本とは違う習慣がたくさんあり、初めは戸惑いましたが現地に行ったからこそ体験

でき、知れたことなので貴重な経験になりました。プリンピンサリ村の子どもたちはとても人懐っこく子供たちは私に伝わるようにわかりやすい言葉を選んだりしてコミュニケーションをとってくれました。子どもたちは経済的な理由で親と暮らすことができないのですがいつも明るくて元気なので、親元を離れていることを私から忘れさせるほどでした。アスラマでは、子どもたちが自分たちで掃除、洗濯をしていて、小さい子の面倒は年上の子が面倒を見ていました。そんな光景を見ると、私が今まで恵まれた環境で育っていて、それでもまだ欲がある自分が恥ずかしく思いました。また子どもたちのために私達ができることは小さなことでもいいから行動したいと思いました。さらに言葉が喋れなくてもジェスチャーを使ったり、知っている単語で話したりしてコミュニケーションをとることは大切だと実感しました。初め子供たちと接したとき言葉が通じず、なにを伝えているのかもわからずあまり子供たちとコミュニケーションをとることができませんでした。でもこのままではいけないと思い、今まで習ったインドネシア語をもう一度勉強したり、一緒にあそんだり子供たちと自分から行動することを意識して接しました。すると言葉が通じないけれど子供たちがたくさん寄ってきて仲良くなることができました。毎日子どもたちと遊ぶことが楽しく空き時間があれば子どもたちと遊び、日にちが経つにつれて子どもたちとの仲も深まりました。子どもたちとの別れの時はとても寂しく子どもたちに「泣かないで」と言われましたが、1人の子供が泣いていて私も泣いてしまいました。それほど子供たちとの別れがつかなく、かけがえのない出会いになりました。私は子どもたちからたくさんの元気と笑顔を与えてもらい毎日の癒やしでもありました。インドネシアでは子供たちから与えてもらう事だけだったので、今度は私が子どもたちに何か与える側になりたいです。そのためには自分自身成長して子どもたちにできることを考えていきたいと思います。また、アスラマの子どもたちだけでなく、貧困村についても考え、一人でも多くの人が貧困のループから抜け出せるためには何

を行動すればいいか、今からできることを実践し地域の問題の解決も考えていきたいです。私がいまできることはゴミを出さないことなどとてもちっぽけなことしかできませんがそれでも貧困問題にすこしでも関わることができるのなら実践していきたいです。

毎日のワークでは私たちは塀づくりができませんので、塀づくりは現地の職人さんに任せ、私たちは砂運びや石をはこんだりしました。ワークが始まるころは体力もありスムーズに作業を行っていましたが、だんだん疲れがでてきて辛いということもありました。しかしにみんなで「がんばれ！」など声を掛け合ったり、ムラヤの子供たちと一緒にバケツリレーを行ったり、臨機応変に休憩の時間を考えたりとつらいワークもみんなのおかげでがんばることができました。ムラヤの子供たちもたくさん手伝ってくれて塀を完成することができ、これから活用されていくことがとてもうれしいです。

高校、小学校、看護学校で日本語授業をやりました。去年のIWCの方からゲームが盛り上がると聞いていたので私たちの班はたくさんのゲームをしようと考えていました。インドネシア学生にゲームの説明をしてそれをインドネシア語で説明する文章を書いてもらったりしました。また私たちが説明する部分のインドネシア語の発音を教えてもらったり、インドネシア学生にたくさん助けられました。授業では私たちの想像より盛り上がってくれて日本語や日本語のゲームをしてもらえたので良かったです。しかし、小学校の授業では椅子を動かしてはいけないということで予定していたフルーツバスケットができず、時間が余ってしまうと心配しましたが、班の皆と話し合いほかのプログラムを入れ込んだりしました。このように学校によってその場の雰囲気や子供たちの様子を見て臨機応変に行動することができました。

私はIWCに参加してたくさんのことを学び、経験することができました。英語をもっと勉強したいと思うきっかけも参加して芽生えたことです。ジェスチャーや単語だけでは伝わらない場面がたくさんありアスラマの子供たちやインドネシア学

生に自分の言いたいことを言葉で伝えたいと何度も思いました。IWCではできませんでしたが英語を勉強してこれからは伝えたいことを伝えられるようになりたいです。さらに、現地に行ったからこそ知ったこともあります。交通量の多さ、子供たちはいつも裸足で行動することなど日本では経験できないことだらけでした。またプリンピンスリに慣れてきたころチャブレンにけじめをつけること、視野をもっと広げることと言われました。その日から自分の周りの事だけでなく注意力を外へ広げるようになりたくさんの事に目を向けるようになり、自分のことだけ考えるのではなく子供たちの事など広い視野を持つことができました。

IWCのメンバーがいたからこそたくさんのプログラムをやり遂げることができました。意見のぶつかり合いなどあったけれどみんなから刺激をもらい成長することができました。また、隊長、副隊長には皆をまとめてくれて感謝しています。注意をしてくれたおかげでチームワークがより良いものになっていたと思います。

事後研修からたくさんの方々に支えてもらいました現地に行ってもプリンピンスリの方々や子供たち、イブ、ムラヤも方々などたくさんの人たちに支えられました。皆さんの支えがあったからこそバリ島での毎日の活動がスムーズに笑顔で行うことができました。たくさんの人と出会い、支えてもらえたことに感謝しています。バリ島で出会った人々ははととても大切な存在でありもう一度行って会いに行きたいと思っています。IWCで学んだことはかけがえのない経験となりました。感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

## Terima kasih

Nanae Isu

Saya bisa belajar banyak hal saat pengalaman bergabung IWC. Banwa ini adalah kesempatan saya sebagai pemula untuk lebih lagi ikut belajar bahasa Inggris. Anda juga bisa memiliki

perspektif yang luas dan bukan hanya memikirkan diri sendiri dan banyak hal untuk dilihat.

Kami anggota IWC telah bisa melakukan banyak program. Semua orang saling menstimulasi untuk bisa menumbuhkan pendapat dari diri masing – masing.

Berangkat dari pelatihan kami mendapat dukungan dari mantan anggota, dan saat datang ke Belimbingsari banyak dukungan dari orang – orang di Belimbingsari, anak – anak, Ibu, dan orang – orang dari Melaya. Saya juga tidak bisa berbicara Bahasa Inggris dan Indonesia. Namun, seperti yang anda lihat, anda mencoba berkomunikasi dengan saya dan itu sangat membantu saya. Kami telah mendapat dukungan dari semua orang dari Bali sehingga kegiatan sehari – hari menjadi lancar dan dilakukan dengan senyuman. Saya berterima kasih karena bertemu orang yang mendukung saya. Orang yang saya temui di Bali sangat penting. Saya pikir saya ingin pergi lagi untuk melihat – melihat. Belajar di IWC adalah pengalaman yang sangat berharga. Itu diisi dengan rasa syukur. Terima kasih banyak.

## この夏学んだこと

国際教養学部 2回生 奥野 なつみ  
(なっぴい)



はじめに

私がこのワークキャンプに参加しようと思った

理由は、学生時代にしかできないような経験がしたいと思ったからでした。私は1回生のとき、学校、バイトの繰り返しの毎日を送っていたのですが、このままじゃ時間ももたないと感じ何か夏休みを利用して経験できないかと学校でしている海外研修などの説明会などに足を運びました。そこで、値段や子供とたくさん触れ合えるといった内容から、このワークキャンプに参加を決めました。

まず大変だったのは事前研修です。インドネシア語の授業、班決め、日本語授業の練習、歌、ダンス…とやるのがいっぱいでした。何をしていたか分からず、このままで本当にインドネシアに行っても大丈夫なのかと不安になることもありましたが、みんなで一生懸命取り組み準備を進めることができました。自分から意見をだすのが苦手でしたが、他力本願だった私にとって、自分の意見を伝える大切さを感じることができた期間でもありました。

#### アスラマの子供たち

アスラマの子供たちは毎日三食食べることが出来ず、家に電気が通っていないような貧しい家出身の子供たちです。会う前はどんな子供たちだろうと少し不安だったのですが、あった瞬間すごく元気な子供たちでした。みんなとても人懐っこく、言葉が通じない私たちにも笑顔で知っている日本語や英語で話しかけてくれました。言葉が通じなくても伝える姿勢が大切だと思い、日本から持って来ていた指さし本や絵などを使って一生懸命コミュニケーションをとりました。毎日一緒にいると名前を覚えてくれて、一気に距離が縮まりまわっていき、もともと子供が好きだったこともあって一緒に遊んでいる時間が一番の癒しでした。子供たちのパワーに圧倒され、バレーや縄跳び、追いかっこをした次の日は筋肉痛になるほどでした。

8月26日に子供たちの出身地の一つであるパニユボ村に訪問しました。パニユボ村は借地であるブドウ畑の中にあり、そこに暮らしている人々は給料の7割を地主に渡しているため貧しく、水も

食料も十分でないという状態です。訪問してみても驚いたのは民家です。本当にこの家に人が何人も住んでいるのかと疑うような環境でした。特にマンディをするところはほぼ屋外というような状態でした。実際に訪れてみて、アスラマと一緒に遊んでいるだけじゃ分からなかった子供たちの生い立ちを知ると同時に、私の知らないところで現実にこんな生活を送っている人もいるのだと知ることができました。メディアを通して知ることと、この訪問で感じた貧困の深刻さは全くの別物で、他人事のように思っていた貧困問題を身近にリアルに感じました。百聞は一見に如かずといいますが、この言葉通り実際に見て知ることの大切さを知ることが出来ました。

#### ホームステイ先での生活

ホームステイ先のイブ、パパはとてもいい人たちでした。イブは毎日私たちが出かける前に朝ご飯とおいしい紅茶を用意してくれ、毎日笑顔で送り出してくれました。パパはバリ語やバリの文化を教えてくれました。私のホームステイ先は家の隣にワルンがあったので、インドネシアのお菓子やインスタントラーメンを買って部屋で食べたりして過ごしました。ホームステイ先では人生初の水のマンディを経験したのですが、お湯のシャワーと湯船になれてしまっている私には驚きでした。しかし少し経つとマンディの文化にも慣れ初め、日に日に水ということの抵抗がなくなってきている自分にも驚きました。これまで日本の文化を基準に他の国の文化に優劣をつけていましたが、人と同じように文化もそれぞれで尊重しあうべきだと考え方が変わりました。これはテレビで見たり、話を聞いたりするだけじゃ気付かなかったことだと思いますし、実際生活してみて分かることだと思います。洗濯も初めて自分ですべて手洗いでした。これが結構の重労働で絞るのも一苦労だったので機械の便利さに気付かされました。自分の家をはなれてみて毎日どれほどのものに頼って生きているか気付くことができました。ミーティングなどで遅くまでアスラマにいることが多く、たくさんコミュニケーションをとること

はできませんでしたが、家族のように温かく見守っていただいたホームステイ先の家族には本当に感謝しています。

## 日本語授業

小学校、高校、看護学校で日本語授業をしました。授業といってもかるたやフルーツバスケットといったゲーム感覚のものですが、生徒達の年代によってゲームをかえてみたり、みんなの反応を見ながら工夫して進めていきました。どの学校でも2時間ほど時間をもらっての授業だったので、思わぬ時間に生徒達の休憩時間が入ったり、ゲームが思っていたより早く終わってしまったりと時間配分に少し戸惑ってしまいました。どうしても細かい説明はインドネシア語が必要になるので、インドネシアの学生のデリーにはたくさん助けられました。この助けがなければできなかったと思います。生徒の子ども達はとてもフレンドリーで、明るく授業も楽しそうに参加してくれたのでとても盛り上がりました。

この日本語授業プログラムはほとんど班行動だったのですが、私は班長という立場でした。班長という人をまとめるようなことはしたことがなく、初めての経験だったので班長らしいこともできず、上手く物事を進めることができなかったのも班のみんなには迷惑をかけたと思います。しかしこの経験のおかげで、何をすれば一番スムーズに進むか、どうすればもっとよくなるかと自分で考える事が前より出来るようになり、自分なりに責任を持つということについて考えることができました。

## ワーク

今年のワークは第五アスラマで行われました。雨季の川が氾濫しないための護岸工事でした。私達が砂や石を運び、現地の職人さんが堀をつくる作業をしてくれました。他にもムラヤの子供たちが学校が終わると手伝いに来てくれたので助かりました。ワーク中は日本語で「ガンバッテリー」と掛け声をかけあったり、全員でパケツリレーをしたりして、子供たちと恋バナをしたりしながら、

暑い中笑顔で頑張りました。体力的なことも考えて休憩もたくさんとったのですが、その度にアスラマのイブが飲み物やおやつを用意してくれていたのもすごく励みになりました。砂や石を運び終わり、最後の作業は職人の方に任せただけで完成形は見れないと思っていたのですが堀が完成した後、記録班として見に行かせてもらいました。行ってみると長くて高い堀が出来ていて感動しました。子供たちの為に何か形に残るものが完成し、改めてこのワークに参加できたことを誇りに思うことができました。

## 最後に

私はこのワークキャンプの参加において、多くのことを学ぶことができました。インドネシアというこれまで馴染みのなかった土地で色んな人と出会い、考え方や文化の違いに戸惑うこともありましたが、それがきっかけで自分の視野の狭さに気付くことが出来ましたし、世界の広さを改めて感じる事ができました。インドネシア学生に自分の思っている事を伝えたいときや、色んな人とコミュニケーションをとる上でもっと自分に語学力があったらと何回も思ったので、英語学習の大切さを知れたことも今回のワークキャンプのおかげです。

初めての長期間の団体行動で、意見がぶつかりたりすることもありましたがプログラムをより良くするための通り道だったように思います。自分だけの意見だけでなく周りの意見を取り入れることの柔軟さが身に付きました。役割分担された中で自分のやるべきことを責任をもってすること、そして情報を伝え合うことで団体行動がスムーズにいくことも今回学びました。

ボランティアということで人のために何が出来るだろう、どうすれば役に立てるだろうと考え行動すると同時に気付くことも多く何より自分の成長に繋がりました。

今回のワークキャンプは本当に色んな方々に支えられて無事終わることができました。アスラマの方々、IWCメンバー、先生方、ホームステイ先の家族、自分の家族…と数え切れませんが、関

わってくださった皆さんに本当に感謝しています。ありがとうございました。

## Terima kasih

Natsumi Okuno

Saya mendapat banyak pengalaman yang tidak bisa saya temukan di Jepang. Berkomunikasi dengan berbagai macam orang membuat cara pandang saya bertumbuh. Saya berterima kasih kepada orang-orang di desa Belimbingsari yang telah menyambut kami, Baoak dan Ibu homestay, anak-anak yang telah berkata untuk selalu senyum dan bahagia, dan Ibu dari Asrama yang telah berkata untuk selalu senyum dan bahagia, dan Ibu dari Asrama yang telah membuat nasi setiap hari, dum yang telah mendukung kami. Dan saya ingin mengirim ucapan terima kasih kepada anggota IWC yang saling mendukung untuk bekerja sama. Akhirnya. Kepada orang-orang di yayasan telah memberi kami kesempatan bagus bugas ini terima kasih banyupo.

## 体験による成長

国際教養学部 2 回生 奥村 真弘 (びろピィ)



私はインドネシアで多くの体験をしました。例えば、私達が泊まらせてもらったホームステイではお風呂ではなくお湯のでない水のシャワーでした。シャワーを浴びることをマンディーというそ

うです。他にも道路には3人乗りのバイクが多く走っていて日本とは比べほどにならない交通渋滞でした。このようにインドネシアの文化に触れりして今まで経験をしたことのない体験が多くありました。私が国際ワークキャンプに参加した理由は子供のために何かしてあげたいという気持ちと自分自身を成長させたいと思っていたからです。そんな中で私にとって心に残り自分を成長させてくれた体験を四つ挙げようと思います。

### ① 日本食

私たちは子供達、そして私達がお世話になっているホームステイの方々や関係者の皆様へお礼にカレーを作りました。最初A、B、C、Dの班で野菜やお肉を切る役割を決めて進めていました。日本人学生が、ナイフを使ったことのないインドネシア学生をサポートしながら一緒に切ったりして協力することでとても順調に進んでいました。そして焼いたり煮込んだりする時は、皆が周りを見て他の人を思いやり協力して完成させようと思っていたので班の分担にしていませんでした。しかし特定の人はずっと仕事をして何を手伝えればいいのか分からない人や参加しない人ができませんでした。私たち日本食班は強制的に全員を班に分担せざるを得なくなりました。

結果的には班に分担し効率良く進めることはできましたが、協力することに意味があるプログラムだと思っていたので今後少し不安が残りました。しかしカレーを作り終えそれぞれのホームステイの方々とカレーを食べ、子供と交流して皆が笑顔で食事をしている姿、そして最後の後片付けの時に皆が全員で協力している姿を見たこの時に日本食と言うプログラムは成功したのだと感じました。一人ではできない事を仲間とすることにより、周りを見て相手の事を思いやる大切さと協力する大切さを知りました。

### ② 交流会

交流会とはアスラマの子供達と私達IWC29が交流することに意味のあるプログラムでした。日本人学生もインドネシア学生も歌とゲームそして

ダンスを披露する事になっていましたが、私達は準備不足で交流会をその場凌ぎで終わらそうとしていました。そしてここまで大切にしてきた報告、連絡、相談も曖昧のまま進めてしまいました。私は交流班の人に頼られていましたがその期待には応えることができず結果的には自分達だけ盛り上がり子供達は置いていかれている状態でした。子供達にとって思い出に残るものにできなかったと私は後悔しました。そして子供達に100%の状態に挑むことができなかつたことと交流班の人達にも役に立つことができず申し訳ない気持ちになりました。この体験は、自分の弱さと不甲斐なさを突きつけられる結果となりました。これまでの自分がどれほど甘い考えだったのかを実感させられるものとなりました。のちに私にとってこの失敗は自分を一歩成長させてくれる非常に大切な体験だと気づかされました。今後は後から後悔しないように自分の考えの甘さを見つめなおし何事も自分の全力を出していきたいと思ひます。

### ③ 小、高、専門学校での授業

私達はインドネシアの小中高、専門学校を訪れ学生に日本を少しでも知ってもらうために、あいいうえお表や日本に関するクイズそしてゲームを行いました。そして自分達の班が日本でやってきた授業プログラムの進め方、現地で合流したインドネシア学生と発音練習などこれまでの努力を最初に見てもらったのは高校生でした。私はとても緊張しましたが自分の班の仲間たちによりサポートしてもらい、私達の授業したクラスは多くの笑顔に包まれ終わることができました。

次に授業をしたのは小学校でした。私は高校でうまくできたのが自分を自信過剰にしてしまいさらに自分が国際ワークキャンプに参加した目的を見失いつつあり不安の中にいました。自分自身がこのような状況にいる中で小学校の授業が始まりました。授業のプログラムの中の盛り上げるメインと言っても良いカラーバスケットがあったのですが、椅子の取り合いは子供にとって危険性が高いため小学校の先生に許可を取ることができませんでした。本来小学校の時に入れるはずではなかつた折り紙を変わりに入れましたがメインを張るにはあまりにも盛り上がりにかけていて暇そうにしている子供も目立つ姿が私の目に焼き付けられました。折り紙を教えている最中に退屈そうな子供が出ているのに気付いていながら私は椅子を使わなくても変わりになるもの、例えばシールを座る数だけ地面に張り代用することなど他の方法がある事を分かっていながら口には出さず他のメンバーに任せきりにしていました。私は今まで何事も人に任せることにより自分から逃げていたのだと思ひます。交流会での自分の考えの甘さと今回の事での人任せで自分の考えを主張しないことは一歩踏み出さなければ自分を成長させることはできないのだと気づきました。自分を成長させるためには自分から逃げず立ち向かう必要があると心から感じることができました。私はこの日同じ失敗をしないためにも自分が何のためにこの場所に来たのかを改めて考え直しました。

次に授業をした専門学校では私にとって成長をぶつける場所でもありました。カラーバスケットの椅子が足りなくて全員が座れることができないという状況でしたが違うプログラムを行っている間に隣の教室で授業しているC班と話し合い椅子を借りスムーズにプログラムを実行することができました。私は積極的に行動することにより前回の失敗を免れました。クラスの人も一緒にここまで頑張ってきた班の仲間たちも笑顔で最後の授業を終えることができました。私はこれまでの失敗が自分に考える時間を与えてくれ成長させてくれたのだと思ひます。

次に授業をした専門学校では私にとって成長をぶつける場所でもありました。カラーバスケットの椅子が足りなくて全員が座れることができないという状況でしたが違うプログラムを行っている間に隣の教室で授業しているC班と話し合い椅子を借りスムーズにプログラムを実行することができました。私は積極的に行動することにより前回の失敗を免れました。クラスの人も一緒にここまで頑張ってきた班の仲間たちも笑顔で最後の授業を終えることができました。私はこれまでの失敗が自分に考える時間を与えてくれ成長させてくれたのだと思ひます。

### ④ ゴミ拾い、イブの手伝い

私達が住んだホームステイからアスラムの児童養護施設までの道にはゴミが多く落ちていました。私はゴミ拾いなど一度も経験したことがありませんでした。日本ではポイ捨てをしたことも何度もありましたが、いつも町は綺麗でした。私は今回初めてゴミ拾いをしていつも町が綺麗な理由は掃除してくれている人がいるからだと分かりました。そしてイブの手伝いでは朝の4時半に児童養護施設に行きましたがすでにイブは起きていて

料理を作っている最中でした。とてもハードな日々を過ごしていて、私は一日経験させてもらっただけで疲労困憊してしまい、イブのホスピタリティとバイタリティに心打たれました。この二つはやらないといけなかったわけではなく自分から挑戦してみようと踏み出したことに意味がありました。この体験は私に挑戦しないと知ることができない事を教えてくれました。

最後に総括として私が国際ワークキャンプを通して学んだことは上記に記載しましたように、1、「協力することの重要性」2、「自身のすべてに対する考えの甘さ」3、「積極性」4、「チャレンジするポジティブな精神」です。私は心に残る4つの体験での成長を述べましたが、まだまだ自分を成長させることができると思っています。その場所にはないと感じられない体験が多くある事を知りました。今回の国際ワークキャンプをきっかけにして今後私は多くの事にチャレンジしてみようと思います。チャレンジする事により経験や新たな出会いによって自分を成長させることができると思いました。そして将来自分の経験を世界中の子供達に話して笑顔と希望を与えることが私の夢となりました。

## Terima kasih

Masahiro Okumura

Aku punya dukungan saya untuk banyak orang untuk berpartisipasi dalam saat ini IWC. Keluarga dan guru dan homestay Hawa dan Bapa dengan kami menonton menghangatkan kita setiap hari, saya bersyukur tulus untuk Hawa dan anak-anak kita memberi saya keberanian dan tersenyum setiap hari Asurama dengan kami untuk membuat setiap hari memasak. Saya belajar banyak dari hal-hal seperti kemampuan untuk perasaan dan tantangan saya pikir orang itu. Justru karena berpartisipasi dalam IWC29. Saya bisa bertemu

sesama penting Anda telah menghabiskan bersama-sama ketika waktu dan menyenangkan menyakitkan untuk berpartisipasi dalam setiap perasaan pada tahun yang sama. Saya ingin berterima kasih pertemuan ini

## IWC29thによって得られたもの

国際教養学部 2回生 芥子 桃佳 (ももパイ)



インドネシアワークキャンプに参加し現地での活動を終え、本当に様々な体験をすることが出来ました。言葉が通じない中で人々と関わる戸惑いがあったけれども、子供達やプリンビンサリ村の人々からたくさんの笑顔に向けて貰い、人の為になりたいと思う気持ちを得ることが出来、改めてこのプログラムに参加できてよかったなと思いました。私は、昨年カナダに半年間大学のプログラムを利用し留学していました。その時に母国語が通じない中ででの生活で現地の人々にとても親切にしてもらい、日本に帰国後、今度は私がその時の感謝の気持ちを何かの形で返していきたいと思ったのがこのプログラムに参加したきっかけです。

私たちが今回インドネシアに行った一番の目的のワーク活動、塀作りでは、大変体力的に厳しい事ではあったけれど、子供達やメンバー全員、先生方、イブたちとお互いに励まし合いながら活動出来ました。全員が相手の事も考え、どのような方法が効率良く、又、負担にならないかを相談していたことは周りの事を真剣に考えているということに繋がっていたと思います。たくさん意見を言い合えるという体験が大学生活では少ないので毎日の小さなミーティングだったとしても新鮮な気持ちに成れました。そして、厳しい仕事内容の

時でも子供達やメンバーのみんなと会話する機会が増え、バケツリレーは大勢人がいなければ出来ない事だしワーク中の濃い思い出です。このような体験もIWCに参加しないと出来ない事だったと思いました。

小学校、中学校、高等学校、看護学校で日本語を教える授業をする活動もしました。将来英語の教師になりたいと思っている私にとってはとても喜ばしい活動内容でした。私は日本語班になり学校訪問の準備を現地を訪れる約3か月前から取り組みました。ひらがなでの名札作り、何種類ものゲーム。一番初めの高校を訪れるまでは、インドネシア人学生が私達のサポートをしてくれるとしても、その為には英語でたくさんスケジュールなどを説明しなければならない。日本語がわからない生徒たちをまとめられるのか、時間配分通りに授業を進めることは出来るのだろうか。そして第一に盛り上がりには欠けないだろうか。まだ現地についてから間もなく環境や生活リズムを理解するのに必死だったという事もあるのだろうけど前日になって今までになかったたくさん不安が芽生えました。朝食を食べている時からずっととても緊張していました。しかし、心配とは反対に生徒たちは本当に純粋でやさしい子たちばかりで、一生懸命用意したカルタでは全員が本気で参加してくれたし、私達自身も小学校低学年以来のフルーツバスケットでもクラス中が全力で参加してくれたので久しぶりのゲームで楽しむことが出来ました。ほかの学校でも同様に生徒みなとても元気がよく体力に少し自信があった私でもへとへとになるぐらいの盛り上がりでした。日本から日本語班でたくさん案を出し合い準備していった甲斐もあり、大成功に終わる事が出来この経験は私にとって本当に思い出に残るものになりました。

バニユポ村というとても貧困村とされているところにも訪れる機会を頂きました。先生方から少し話を伺ってから訪れたにも関わらず、想像できない生活でした。後日のミーティングで「日本にはこのような貧困とされている村はないのか？」とインドネシア人学生に尋ねられ、日本はどうなのだろうか、日本全国で同じような状況の場所は

あるのかと恥ずかしながらも初めて考えました。このように日本の事を客観的に考える事が出来たことにとも有難みを感じました。そしてまた、このバニユポ村に私達から何か出来る事を見つけ協力できないだろうかと強く思いました。次回のIWCの活動で何かバニユポ村での活動も視野に入れてもらえればと願います。

生活面では、プリンビンサリ村の生活と日本の生活習慣や環境とはかけ離れていて、香辛料の強い料理は少し合わず、想像していた以上の虫の多さでした。ミーゴレンといった焼き飯のような食べ物は食べる場所によって味の濃さが違い、5つの場所でそれぞれ違ったミーゴレンを体験しました。バナナを揚げたピサン・ゴレンというデザートに似たものはとても美味しくたくさん頂きました。バナナを揚げるといふ発想は日本では耳にした事もなかったので、初めは先入観たっぷりのまま匂いを確かめたり試食したりと様々なインドネシア料理を短い期間で体験しました。そしてハエが本当に多くて、日本では想像の出来ないほどでした。しかしこのこともまた先生と共に毎日ハエ除けを何種類かのパターンを試してくれている人たちがいて本当にみんなの為を思っている気持ちが伝わりました。そしてこの中でも一番印象に強いのはトイレです。インドネシアの文化の一つとして、水洗トイレではなく桶で水を汲み流すという方法やトイレトペーパーを使わずに手でふくといった方法があります。自分の中ではインドネシアのトイレの習慣だと分かってはいるものやはり18日間乗り切れるか始め不安でした。けれど、子供たちの純粋さや笑顔、ホームステイ先の人たちにやさしくして頂いたおかげでたくましく生活する事が出来ました。子供達は人見知りせず全員が自分たちから話しかけてくれたり、私の片言なインドネシア語も聞き取ってくれたり、そして中にはまだ小学生なのに英語がとても上手な子どももいてたくさんお話しすることが出来、子供達との関わりがとても可愛く楽しいことでした。そして毎日のこのような中でたくさんのインドネシアの文化はもちろん言語もたくさん覚えることが出来ました。約4か月前からインド

ネシア語の勉強を始めていたけれどなかなか覚えられず、覚えていたとしてもいざ話すとなると忘れてしまう、という事が初めはやはりありました。でも、毎日話しかけてきてくれる同じ言葉、何度か教えてもらった言葉は自然と頭に入り、改めて聞いて覚えるという事を実感しました。インドネシアの方は本当に親切でワーク先に向かう途中にトラックから外を覗いている私達に「スラムパギー」などとニコニコした笑みで挨拶して下さったり、道中ですれ違っても「どこから来たの?」と話しかけて下さったりしました。とてもフレンドリーでとても親切な方たちばかりでした。豊かな生活は設備の整った施設などが在ったほうが良いけれども、インドネシアの人々のように他人にも親切に出来ると、みんな穏やかで自然と笑顔で暮らせるのだなと感じました。そしてホストファミリーも本当に親切で朝出かける時も、少し帰りが遅くなった時も笑顔で出迎えてくれそのことも毎日、元気の励みになりました。ホストファミリーと過ごせる自由時間には、海やダム、教会など車で有名地に連れていってくれました。海の前でジャンプして写真を撮ったり、途中で車の中から猿に餌をあげたりとインドネシアでの生活だけでなく刺激的な体験までもさせて貰い、ホストファミリーには感謝しかありません。何よりいつでも笑顔でたくさん話しかけてきてくれるという事が本当に嬉しいことでした。少しではあったけれども本当のバリ島、プリンビンサリ村の生活は日本にいる限りでは決して経験しないことであり、旅行でバリ島に訪れたとしても体験することは難しい事だったろうと感じました。実際に現地の人と生活したからこそ体験出来た事がたくさんあったと思いました。

最後に、今回IWCに参加し人々の温かみにたくさん触れ自分自身の成長にもつなげることの出来た体験でした。本当に18日間はあっという間でした。この経験で改めて英語やインドネシアのように母国語の日本語以外の言語に囲まれながら生活をするという事が本当に楽しく、大好きなことなのだと実感しました。自分自身の成長にも繋がりました。このワークキャンプに参加できたこと

は私の人生の中でも貴重なものになりました。この経験を活かし、自分の将来に繋げていきたいです。プリンビンサリ村に再び訪れた時にたくさんの人々ともっともっと会話を楽しめるように語学の勉強に励むことから始めていきたいです。これからの活動が止まることなく続き、たくさんの学生が私たちのような経験を出来る事を願っています。IWC29thに関わってくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

## Terima kasih

Momoka Keshi

Setelah saya menyelesaikan program Camp Kerja Indonesia, saya mendapatkan banyak pengalaman

Sebelumnya saya khawatir untuk terlibat dengan orang yang tidak dapat berbahasa Jepang.

Namun ternyata saya mendapatkan banyak senyuman dari orang-orang yang tinggal di Blimbingsari dan saya juga dapat berkomunikasi dengan mereka.

Sebagai hasilnya, saya merasa ingin menjadi berguna bagi orang lain.

Juga mengapresiasi kebaikan orang lain.

Terkadang pekerjaan yang dilakukan sangat berat, tetapi anak - anak, anggota dari IWC, Ibu, dan guru-guru yang ada sangat berkooperasi satu sama lain sehingga saya dapat bekerja dengan senyuman.

Hal itu sangat berkesan untuk kami.

Saya sangat senang dapat mengikuti program ini dan berhubungan dengan orang-orang Bali.

Saya sungguh sangat mengapresiasi segalanya. Terimakasih banyak.

Suatu hari saya ingin pergi ke Blimbingsari lagi.

## 財産を得た夏

国際教養学部 2回生 倉部 拓実 (たくピィ)



### <初めに…>

初めになぜ私がIWCに参加したいと思ったかを説明したいと思います。私の家庭はかなり複雑でした。母子家庭に弟は入退院と幼いころから1人で留守番することがかなりありました。またそのためか日本の母子家庭の制度、貧困問題、格差社会問題などに深い関心がありました。またこんな家庭で育ちましたが家族3人で行った些細な家族旅行をととても幸せに感じ将来は些細なことで幸せにできる人間になりたいと思っていました。さらにボランティアにもとても関心がありました。IWCの活動が貧困地帯にある孤児院での活動と知り自分の育った環境と似ているのかと想像し、興味がありぜひ参加したいと思いました。しかし私自身初めてのボランティアでした。そのため申し込むか本当に悩みました。最後は1度しかない大学生活だと思い申し込ませていただき参加させてもらいました。

### <インドネシアへ行く前>

事前研修や事前準備はとても大変でした。授業は毎週金曜日の5限にあり主にインドネシアの文化や言語の教えてもらい少しでもインドネシアの知識を増やそうと必死でした。特に文化の違い、例えば左手は不浄のものとされ食事のとき、握手などで左手は使ってはいけないと知ったときは本当に日本の文化とは異なる場所だと思いました。また文化の違いなどで現地の人に迷惑をかけないかととても不安でした。健康管理では感染症などを防ぐためにたくさんの予防接種をしました。そのため予防接種の副作用で腕がずっと痛かった時

期もありました。募金活動ではなぜか実施する日のほとんどが雨だったのでみんなで傘を差しながらの募金活動になりました。そして、今年のIWCではインドネシアナイトという桃山学院大学のインドネシア留学生とイベントでダンスや歌を発表するということがありました。ダンスやインドネシアで有名な歌を1つずつ出そうとなりダンスと歌の2つを覚えるために個人での練習、空き時間がある人や土曜日に集まれる人で集まり練習しました。しかし私自身ダンスをするのが初めてでなかなかうまく踊ることができずに悔しくて1人で練習しましたがなかなかうまくいきませんでした。そんなときインドネシアの留学生がマンツーマンで私に教えてくれ少しずつ形になるようになりました。そして本番の数日前にメンズに伝えられたのが衣装はスカートのためすね毛をすべて剃るということでした。本番の前日1人でさみしくすね毛を剃ったのは本当に切なくなりました。本番は初めてのスカートにそわそわしながら踊り歌いました。自分の中ではうまく踊れてはいないと思っていただけ見てくれた人が笑顔で拍手をくれたのでよかったと思いました。インドネシアに行く前に日本の養護施設を見学させてもらいました。そこにいる子ども達は主に家族から虐待を受け生活が困難だと判断され保護され預けられている子ども達です。そんな子ども達が集まり生活している場所を初めて見たとき驚きました。食事の仕方は学校の食堂のような形で、建物の中は病院のような形だったり、おこずかいの渡し方が各養護施設決められていたりしますが今回見学させていただいた施設は子供と施設職員との交渉で決まる形でした。家族がいる中で育ってきた僕には知らない世界でした。職員さんと話す中でその人のやりがいは「施設を出た子供が結婚し子どもとその家族で会いに来てくれるときは本当にうれしくてこの仕事でよかったと思えます」と聞き私は本当に素敵なことだと思いました。そしてインドネシアへ行く当日スーツケースのカギをなくしそれを空港で気づき母に予備を持ってきてもらいました。この時たくさんの人に迷惑をかけた本心に情けないと思いました。また確認や身の回りの管

理の大切さを改めて実感しました。

#### <インドネシア学生>

まずインドネシアについてすぐにインドネシア学生と看護師さんと合流しました。一緒にこれからインドネシアで同じことをするのにやっていけるか仲良くなれるのかそんな不安を抱えながら一緒に夕食を迎えました。しかしそんな不安は意味がなく食事をする時のテーブルでインドネシア学生と一緒になり気さくに話しかけてくれ日本語も少し話してくれたりあいさつ程度しかできないインドネシア語で話してみたりとすぐに仲良くなりました。そしてインドネシア学生と話していくうちに彼らもいろいろな思いで参加していること、その問題をどうにかしたいと思う強い気持ちなども英語やジェスチャーで伝えてもらい理解し考えさせられました。国や文化が違ってアスラマの子ども達のために何か力になりたいと思った人の思いはあまり変わらないものだと感じました。また、どのインドネシア学生も流暢に英語を話していたので私も見習わなければならないと思いました。そして英語を流暢に話せばいろんな場面で役立ったと思うと本当に英語を学び発音などの練習をしないといけないと感じました。

#### <ホストファミリー>

ホームステイ先のイブ、パパは英語を少し話せる方たちでした。そのおかげでコミュニケーションは非常に取りやすかったです。いつも話す内容はその日何があったか、次の日には何をするか、そして学校で学んでいること、私の夢、ホストファミリーの子どもの話、趣味、仕事、アスラマのこと、たくさん話をしました。「本当の息子のように思う」と言われ私も本当の両親のように思えました。そのため自分の家のように使いなさいと言われ最初は緊張や変に遠慮をしていましたがすぐに自然体で過ごせるようになりました。健康に日本に帰ってくることができたのはイブやパパがとてもいい人だったことが大きいと思うと感謝の気持ちでいっぱいになります。またインドネシアを訪れたら必ず顔をだして少しでもインドネシア

語で話したいと思っています。そしてイブやパパもしくはその子どもが日本を訪れた時はたくさん案内やおもてなしをしたいと思っています。

#### <アスラマの子ども達>

アスラマの子ども達を一言でいうととても元気でした。1時間走り回っても、縄跳びしてもバトミントンしても私が辞めようというまでやめません。だから子供の様子を見て水を飲ませたり、休憩をはさんだりして体を壊さないように配慮しながら遊ぶのは大変でした。また1人の子とお互いの家族について話していたときに聞いたのは「私は今幸せ、だからさみしくない」という言葉でした。私は笑顔になることしかできませんでした。アスラマの子たちに比べるとちっぽけなものかもしれないが、母子家庭という環境の中で1人きりでさみしい思いもたくさんしたからです。その子たちが私より長い期間親から離れてどれだけつらい思いをしてそれを乗り越えて今の言葉があるんだと思ひ何も答えることができませんでした。

#### <ワーク>

今年のワークは壁作りでした。主な作業は岩やレンガ、砂を運ぶ作業でした。すべてが手作業で重いものを運ぶのに女の子と男の子で体力の差がもちろんあり、休憩回しやできるだけ楽な仕事は女の子にしてもらうなどすることで体力の差が響かないようにみんなで考えてやることができました。またいかに効率よくするかを考えバケツリレーや班ごとにポジションを考え負担を最小限でできたのではないかと思います。作業中アスラマの子どもがよく手伝ってくれました。一緒に作業をしてみんなで1つのことをしているのだと思うとうれしく、この子たちのために何かしたいと思うと作業にも力を入れることができました。反省としてはワークがしんどいからと言ってワークに入るまでにダラダラしてしまい、ワークと休憩のメリハリをつけることができないときがあったことでした。結果壁は完成しましたが、メリハリがつけることができなかったときがあったのは本当に自分が情けないと思いました。初めからメ

リハリをつけて行動していたらもっと有意義なものになったのではないかと思うと後悔が残ります。

#### <交流会と日本食パーティー>

交流会ではたくさんの反省がありました。僕自身交流班をさせていただき、全然力になれなかったと思っています。まず、アスラマの子ども達、インドネシアの学生、日本の学生この3つのグループでの発表でした。まずどのグループからするのか情報交換や確認をできず様々な人に迷惑をかけてしまいました。よく言えば周りが見えていなかった。悪く言えば甘く見ていたことだと思います。何とかなるだろうそんな気持ちがどこかにあってそのせいで情報交換や確認を怠ってしまいました。たくさんの人に迷惑や困惑を与えてしまいました。アスラマの子ども達のためにする出し物が自分たちだけのものになり相手へ伝え楽しんでもらい交流するものではなく一方的に伝えそこで満足する自己満足で終わるようなものになってしまいました。交流会後の夜1人で反省をして何がダメだったのか考えると日本での事前準備の少なさ、情報交換の少なさ、誰にも相談せずに決めたこと、そして何より自分のことしか考えていなかったことでした。何もかもが足りないと思いました。そしてその時考えたことが「この1つの体で日本に帰るまでたくさん子どもと遊んだりふざけたりして楽しんでもらおう」と決めました。そして次の日からたくさん子ども達と鬼ごっこやサッカー、バトミントン、バレーボールなど服が汗でびちゃびちゃになるまで遊びました。

日本食パーティーではカレーを作りました。各班が担当の具材を切ったり各班順番に具材を炒めたり、煮込んだりしました。私は人参を切る担当で人参は日本の人参よりも固くとても切りにくく形もまばらでした。しかし煮込むと形が崩れいつものカレーに入っているような人参になりました。またカレーの具を炒めたり煮込んだりを大きな鍋でしました。大きな鍋に火を通すには大きな火が必須でとても暑い中の料理でした。毎日そこで料理をしているアスラマのイブは本当に大変だ

と思いました。また僕たちのために仕事を増やしておいしい食事を作ってもらい本当にありがたいと思いました。

#### <インドネシアの学校訪問>

インドネシアの学校に3回訪問させてもらい授業をさせていただきました。授業の前日にインドネシア学生に授業の内容やゲームのルールを伝え本番ではインドネシアの学生にたくさん助けられました。そのおかげでスムーズに進行ができました。しかし初めの授業は盛り上がりすぎて時間を超えてしまいました。タイムマネジメントをきちんとしないといけないと思いました。また前の授業で盛り上がらなかったものを無くし盛り上がったものの時間を延ばしたりしました。そうすることで初めよりより良いものになったと思います。

#### <バニユポ村>

バニユポ村で見たもの感じたものすべてが本当にリアルな貧困でした。初めに家に行くまでの道のりはブドウ畑を通らないといけませんでした。そして家に着くと色々見させていただきました。まず、キッチンがガスコンロではなく日本でいう釜戸でした。体を洗う場所では外で水をためるための桶はコケだらけでした。その時自分がとても情けないものだと感じました。インドネシアに行く前に貧困の生活レベルを聞いて、たまにテレビで見る特集をみてそれで知り理解したつもりでいた自分ちっぽけだなと思いました。生で見えて感じ。それはそれほどまでに想像と違ったからです。またこれ以上にひどいところもたくさんあると聞き自分は何を知り理解しているのか、その知識は表面上だけじゃないかと思いました。この貧困問題はすぐに解決できる問題ではない。さらに1大学で解決できるものでもない、今後調べて長期的な計画で支援している団体の手助けをしていきたいと思っています。

### <アスラマについての印象など>

アスラマと行く前に少し教えてもらった日本の養護施設とは違いアスラマでは貧困を抜け出すために学び技術を手にするためにアスラマに子どもたちがいる。そしておこずかいなどもなく服は寄付による古着、また学校などでかかるものはアスラマで支給することになっている。ホストファミリーはアスラマのことをどう思っているかと尋ねたとき「アスラマは宗教で判断せずに受け入れていて素晴らしい施設」とほめていた。さらにアスラマの子どもとプリンピンサリンの子どもは仲良く遊んだりしていると聞き本当に素晴らしいことだと思いました。

### <最後に>

今回体験したこと、見たこと、聞いたことすべてが僕の財産となると確信しています。分かったつもりで理解していなかったことや、自分の勝手な思い込みで確認や情報交換をせずに交流会でたくさんの迷惑をかけたことで情報の共有や相手に分かりやすく伝えることの大切さ。後悔や反省、気が付いたこと、自分本位から少しは相手の立場になることなどたくさんたくさんありました。1つ1つが私の財産となりました。

最後になりますが、インドネシアに行くまで、また現地でもサポートしてくれた教職員、食事を作ってくださったイブたち、ホームステイさせてくれたイブ、パパ、このプログラムに関わり力を貸してくれた方々、そしてIWC29期のみなさん、本当に感謝しています。ありがとうございました。

## Terima kasih

Takumi Kurabe

Pertama - tama saya pikir masyarakat sangat baik dan ramah.

Jika anda mengatakan itu dan Anda merasa begitu, itu adalah masyarakat Blinbingsari.

Perjalanan dari homestay ke Asrama Banyak orang mengajak saya berbicara dengan salam dari Jepang. Di Jepang saat ini budaya tersebut hampir tidak ada Ini menjadi kejutan dan perasaan yang hangat. Kemudian, pada ibu dan ayah, saya diurus seperti mereka mengurus anak-anak mereka sendiri.

Di Asrama Kami mempunyai banyak pengalaman berharga. Sebagai contoh, Kata hati adalah untuk memimpin tanpa melalui ucapan. Saya tidak berbicara Indonesia dan anak-anak tidak berbicara bahasa Jepang. Dengan membuat tim sepak bola dan banyak bermain Itu bisa membuat saya menjadi berteman dengan anak-anak.

Di Indonesia ada banyak kenangan yang baik. Tapi, Anjing di indonesia tidak seperti di Jepang, dan budaya yang berbeda juga ada. Dan anjing-anjing itu saya pikir sangat menakutkan saat menggonggong kepada kami. Tapi, itu juga saya pikir pengalaman yang baik.

Mahasiswa Indonesia adalah orang-orang yang sangat baik. Meskipun saya telah membuat banyak masalah. Tapi mereka tetap ramah kepadaku.

Lalu Pengalaman di Indonesia sangat berharga untuk saya. Untuk mengetahui banyak hal, Untuk belajar, bereksperimen, berpikir, itu menjadi hal yang tak terlupakan, Ini menjadi kenangan seumur hidup. Dalam hal ini untuk semua orang yang terlibat dalam IWC29 saya ingin mengatakan terima kasih

## インドネシアの文化および生活について

経済学部 2回生 佐藤 匡 (まさピィ)



日本からインドネシアについてまず感じたことが日本とは違い宗教観が日常生活や建物に強く根付いているということを見て取れました。日本ではおおよその人物が宗教とは無縁であります。また、宗教というものに関して距離を取っている人も多いように感じました。しかし、インドネシアでは自宅の玄関の窓口に宗教の模様を示していることや自宅の家具などにそれを付け足している家庭も数多く見られることができました。また、インドネシアの学生の免許書、日本語プロジェクトで訪問したクラスの出席名簿のようなものにも自分の名前の横に宗教の記載がありました。これらのようにインドネシアでは宗教が生活に深く溶け込んでおり宗教に関する知識や理解が大変見て取ることができました。

また、インドネシアの文化や生活にインドネシア人の性格が大きくかかわっていると感じました。インドネシアの学生やホームステイ先の家族との会話は話しているとこちらまで笑顔になりました。インドネシアの人々の大まか性格はおおらかであるといえるでしょう。そのことがこちらまで笑顔にする暖かさを産んでいるのではないのでしょうか。しかし、一方で時間などにルーズな一面も持ち合わせています。だが、日本人の視点からだとマイナス面にとらえてしまうかもしれないがインドネシアの学生などに聞いたところインドネシアでは時間におおらかだということからマイナス方面とみるのではなくインドネシアという国の特色であるともいえるだろう。

次はインドネシアの食事やトイレについて書いていきたい。

インドネシアでの食事について考えたことはスパイスがふんだんに使われているということである。日本人が辛くて食べられない辛さのものでも汗一つかかないで食べていることから日常から毎日頃辛いものを口にしていうことがわかる。村のワルン犬肉が最初に食べたインドネシア人向けに作られたものであった。犬肉がワルンといわれる日本でいうコンビニのようなところに普通に売っていることにも驚いたが何よりもその辛さにまず驚かせた。またお菓子についても、ほんのり甘いようなお菓子ではなくしっかりした甘さを感じるお菓子が多くあまじょっぱいようなお菓子は見るができなかった。また観光地にいった時のことだがレストランなどではフォークとスプーンを使って食べており、村に滞在しているときもフォークとスプーンを使っていたが外で食べている人は手で食べていることを確認できた。

インドネシアの紙幣について説明したい。

インドネシアの紙幣はお札でいえば100000Rpから1000Rpまでの数種類に分かれており日々のレートによって異なるが大体日本円から100分の1と考えておけば問題はなかった。日本に比べると物価が安く村のワルンやコンビニでは500mlのジュースなどが日本円でいう50円で売っていたり、上で述べた犬肉も50円で売られていた。しかし日本人から見れば物価が低いのかもしれないが現地の住民視点で考えてみればこれは異なっており、日本人の給料を20万と考えたときにインドネシアの人は1万円前後であるときいた。このことから現地の住民からすれば給料と物価のつり合いが取れていないように考えられた。またインドネシアの紙幣は銀行や両替で下したばかりでなければ汚れていたりしわがついていることが多々見られた。インドネシアの学生に聞いたところ市場で使われることが多いらしくそのために素早い交換が行われるため紙幣が汚れる場合が多いのだと聞いた。また村のワルンなどで買い物をした際にほったくられたなどの話をよく聞いたが実際ほったくられることもあったのだろうが、自身が感じたことは数種類のを購入した際にきりのよくおつり

が出にくい金額にしていることも多々あった。つまり値札のついてない商品などは店主の考えによって金額の変動が起こるため個人経営のお店では値下げ交渉が頻繁に起きる。例えば日本での事前研修では値下げ交渉を7割からしてよいと教えられていたが実際には5割未満にできた場合もあり、場所や値段を考えたうえで値下げ交渉をすれば効果的であることが考えられた。

インドネシアというよりもその村や宗教でのごとなのかもしれないが生活と文化で欠かせないのがマンディだろう。マンディというのは日本でいうシャワーであるがシャワーを取り付けている家もあるが現地の人は風呂桶のようなものがありそこに水をためており桶を使って洗い流す。また現地の習慣や宗教により日に数回マンディを行う。また私が住ませていただいていた家ではマンディの場所とトイレの場所が共有されておりトイレを流す際にはマンディに使用する水を使用して水をながす。トイレは都会や一般の家にも洋式のトイレが広まっている気がするが、車移動での休憩場や家のトイレなどはインドネシア洋式のトイレがいまだに多くインドネシアの水道管の太さが細いためトイレトペーパーなどが流れないため注意が必要であった。

滞在した村や車から道路を見た感想やインドネシアの学生が大きな問題点と言っていたようにゴミ問題がいろいろな場所で見取れた。例えば日本のように道にゴミ箱などが設置されておらず村でも数年前のゴミが放置されている現状であった。私が考えたのは公共の場所などにゴミ箱がないもしくは少ないため道の端などに捨てるため一度捨てる则そこにゴミが集まってしまうということと、バスや車からのゴミ捨てが一番のゴミの問題であると感じた。

これは村での狭い範囲でのごとだが小学生や中学生くらいの子どもが中型などの大きいバイクに乗っておりインドネシアの学生に聞くとお金でライセンスを買えるため禁止されているにもかかわらず乗っている子ども達が多いとのことだった。またインドネシアでは国道など都会の道では車よりもバイクのほうが多く2人乗りや3人乗り

をしている人がとても多く見え日本とは違った光景が見え新鮮な気持ちとなった。

またインドネシアの学生との会話の中でどのように日本語を学んだのかという話題になったとき日本の漫画、アニメのことが話に出てきた。インドネシアでは日本の漫画やアニメが流行しておりインドネシアの子ども達の間でも流行っていました。特に流行っていたのがNARUTOでありデパートの書店などでは日本の漫画がコーナーになって置いてあり、大きいコーナーとしてNARUTOやコナンなどから少し昔の漫画まで数多くの日本の漫画が置かれていた。このことから語学の練習だけでなくインドネシアの人々に幅広く愛されていることがわかった。

インドネシアでは時間がゆっくり進んでいるような充実していながらゆったりした日々を過ごすことができた。それはインドネシアの人々の性格からくるものも大きいと考えられる、またスマホやゲームから離れることで普段は気にしないような事であったり、人との繋がりや関係性を普段以上に考えられた。普段と違う環境で異なった人間関係で生活する事で客観的に物事をみる。視野の広がりを感じる充実した日々を過ごすことができた。

インドネシアワークキャンプに関わった引率教職員の方々事務職員の皆さまホームステイの皆さま等々私達にこのような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

これらインドネシアで学んだ経験や知識をこれからの将来で役立てこのIWCを本当の意味で実りのあるものであったと言えるように行動したい。

Terima kasih

Masashi Sato

Saya bisa bertemu banyak orang dan mendapatkan ilmu serta pengalaman.

Ibu dan bapak yg berada di homestay saya

memberikan saya tempat tinggal, jadi saya bisa beraktifitas dengan baik.

Mereka juga mengajarkan saya bahasa Indonesia yang mudah dimengerti. Ketika saya menuju asrama, mereka selalu memberikan senyum yang indah. Minggu terakhir saya dan teman-teman mengunjungi Dam dan gereja bersama bapak. Terima kasih kepada keluarga angkat saya.

Saya ingin mengucapkan terima kasih yang sebesar-besarnya kepada anak-anak dan staff yang berada di asrama. Saya tidak bisa berkomunikasi dalam bahasa Indonesia kepada anak-anak, tetapi mereka mencoba untuk berbicara menggunakan bahasa tubuh. Senyuman mereka juga memberikan kami semangat yang kuat dan perasaan percaya diri. Mereka membantu pekerjaan kami sesudah pulang sekolah. Ibu di asrama memasak makanan untuk anak-anak, selain itu mereka juga memasakkan makanan untuk kami selama kegiatan berlangsung.

Kami berbagi waktu yang menyenangkan dan kesulitan semua bersama-sama. Saya telah mempelajari suatu hal sangat penting dari mereka. Jadi saya ingin mengucapkan “terima kasih” kepada semua member IWC

Saya bisa menghabiskan banyak waktu menyenangkan di Indonesia. Saya tidak pernah melupakan menghabiskan 18 hari disana. Menghabiskan waktu 18 hari disana adalah ingatan yang penting.

Terima kasih untuk semuanya

## ワークキャンプでの日々

経営学部 2 回生 林 周 (あまぴい)



### <はじめに>

僕は、ボランティアなど誰かのためになる人の役に立つ活動をしたと思ってきました。そのため、大学に入学してすぐに国際ボランティアサークルに入りました。そこで、実際にボランティアに行ってきた先輩の話聞いて、まだまだ自分の知らないことがあると感じました。より、人のために自分にできることはないかと考えるようになり、国際ワークキャンプに申し込みました。僕にとって、これが初めてのボランティアでした。

### <出発～到着>

関西国際空港からデンバサールの空港には、飛行機で約7時間かかりました。飛行機が着陸をして窓から外にある空港の建物を見ると実際に外国に来たんだなと感じることができました。また、それと同時にこれからワークキャンプが始まることへの期待と18日間という今までに経験したことのない長さの海外滞在への不安な気持ちもありました。空港からホテルに向かうために車に乗ると、インドネシアの車は日本と同じ右ハンドルでした。また、日本車の多さにも驚きました。ホテルに着いて、初めて4人のインドネシア学生と会いました。夕食の時に、各テーブルに1人のインドネシア学生と日本人学生を混ぜて座ることになりました。僕のテーブルは、フェビという学生でした。緊張もあり、話が途切れてしまい、沈黙する間もあり、スムーズに上手く会話ができませんでした。自分の英語力の無さを痛感し、英語ができないことでコミュニケーションを取れないことを情けなく感じました。フェビが日本語をできるこ

とで、何とか会話になりました。夕食の後は、日本語授業のための打ち合わせをしました。

#### <プリンピンサリ>

プリンピンサリには、デンパサールから車で3時間かかります。そのため、途中でトイレ休憩をしました。トイレは、インドネシア式でトイレットペーパーがなく、横に水槽と桶がありました。もちろん、水洗では無いので用を足した後は自分で桶に水を汲み流さなければいけません。この時が初めてのインドネシア式トイレでした。これを見て、この先のトイレが不安になりました。プリンピンサリ村に着くと、アスラマの子ども達の歓迎を受けました。プリンピンサリは、十字路を中心にできている村です。キリスト教の村なので、各家の入口には、十字架がかけてあります。プリンピンサリ村には、教会、小学校、プール、いくつものワルンがあります。そして、何より僕達の活動の拠点でもあったアスラマもあります。通りは、アスファルトで足元が悪いこともなく過ごしやすい村でした。僕は、よくワルンを利用していました。ワルンでは、アイスクリームやジュース、水、お菓子を買っていました。商品の中に、日本でもおなじみの「ポカリスウェット」、「ヤクルト」、「熱さまシート」も売っていましたが、まさか売っているとは思いませんでした。あるワルンには、犬肉料理が売っていて、人生で初めて食べました。香辛料で辛いものの、臭みは無くおいしかったです。日本では食べることができないと思うので貴重な体験になりました。フリータイムには、メンバーの何人かと一緒にプールに入りました。プールの水がしょっぱく僕達は驚きました。

#### <ホームステイ>

パパ、イブ、ディシーという女の子がいる家庭がホームステイ先でした。初めてのホームステイでした。貸してもらった部屋はダブルベットでした。そのため、最初見た瞬間笑ってしまいました。男同士で寝ることに違和感がありました。でも、ほかのホームステイ先も同じだったので、安心し

ました。トイレやシャワーは部屋についていました。トイレは洋式で聞いていた話と違ったので、1番の心配がなくなり喜ばしい限りでした。シャワーは水しか出ず、慣れるまでは大変でした。洗濯物を毎日手洗いするのは初めてでした。洗濯の仕方が面白かったのか、イブと近所の人達の話のネタになっていて、恥ずかしかったです。朝には紅茶を出してくれ、洗濯物を畳んでくれたりと、とても親切で、優しいホストファミリーでした。言葉の壁もあり、あまり会話をする事ができなかったのが心残りです。ホームステイをしたことで、すべてしてくれている親のありがたみや、洗濯機などがある便利さを痛感しました。

#### <ワーク>

ワークは、プリンピンサリ村からムラヤにある第5アスラマに移動しての作業でした。第5アスラマまでは、トラックの荷台に乗っての移動でした。走行中は、道路脇の木の枝や葉が当たる可能性があるのが気が抜けません。最初は楽しく感じましたが、後半は勘弁してくれという気持ちでした。今回僕達が行うワークは、塀造りでした。塀造りは、素人ではできないため職人さんにしてもらい、僕達の役割は塀用の石や砂の運搬でした。毎回効率のいいワークの方法を考えながら作業することができ、メンバー同士がお互いを気遣いながら進めていくことができたと思います。ムラヤの子供たちは時間があれば手伝ってくれ、子ども達がいるかないかではワークの進行スピードや効率が変わってくるのでとても感謝しています。肉体的にも精神的にも助けられました。休憩時間には、インドネシアのおやつが用意されていておいしいものが多く力になりました。ワークでは、メンバー全員が同じ目標に向かって同じ作業をすることで士気が高まり、最後までやり遂げることができたと思います。最後の日は、完成したうれしさと終わった達成感がありました。終わりというのは、帰国の日が迫ってきていることでもあり寂しい気持ちにもなりました。

## <日本語プロジェクト>

僕は、A班なので高校、中学校、看護学校に行くことになりました。僕たちの班は、授業では日本人の学生が英語で説明しインドネシアの学生がインドネシア語で説明することにしました。1番目に高校に行きました。初めて生徒に授業をすることでとても緊張しました。授業は、予定していたことをすべてやりきることができました。クラス全員が楽しんでくれていたように感じました。時間が少し余ったことが残念でした。次に行った中学校の時には、1度経験しているので臨機応変にやる順番を変えたり時間調節ができたと思います。しかし、上手くクラス全員を楽しませて参加してもらうことができませんでした。看護学校では、前の2回の経験を活かして上手くやり遂げることができたと感じます。これらの授業では、インドネシアの学生の助けがなければできなかったと思います。細かい説明や、盛り上げなど授業の進行で必要なことをやってくれました。感謝してもしきれません。教室で前に立ち授業をしたことは、自分と言語が違う人に物事を伝えるむずかしさや相手にどのようにすれば理解してもらえるかという相手の立場に立つ大切さを学びました。この経験は、教育現場だけでなく社会や日常生活でも必要なことだと感じました。

## <最後に>

IWCに参加して、インドネシアという日本以外の国で18日間過ごしたことは、日本にはない文化や習慣を体験する機会になり、相手への理解や自分の世界観の広がり、学んだことも多かったと思えました。また、普段なに不自由なく暮らしている自分がどれだけ恵まれているか考えさせられることが多くありました。ご飯を食べてお湯でお風呂に入りスイッチを押せば電気がつくことが当たり前だと何も考えずにやってきましたが、そうではない地域に今回行って自分の目で見たことで、そのことを忘れてはいけないと思います。

## Terima kasih dan syukur

Amane Hayashi

Hal dan homestay untuk menghabiskan 18 hari di luar negeri bagi saya, adalah pengalaman pertama. Jadi, ada sedikit cemas dalam kehidupan lokasi hal dan 18 hari untuk tinggal.

Namun, sebenarnya saya bertemu dengan keluarga angkat yang diurus dan saya tiba di Burinbinsari, diminta kecemasan untuk memandu dalam perasaan ruang telah menghilang dalam sekejap. Jika Anda bangun setiap hari, saya mendapat teh hangat sebelum pergi ke Asurama. Percepatan gula adalah teh paling lezat sampai indah sekarang. Di pagi hari, saya sangat senang karena suhu rendah. Juga, itu adalah penuh rasa syukur saya harus Anda bahkan selama pembersihan seperti tinggal di dalam ruangan bertanya dilipat laundry. Jika tidak ada keluarga angkat, saya merasa bahwa itu tidak menghabiskan bahagia selama 18 hari. Aku, adalah penyesalan bahwa Anda tidak melakukan apa-apa demi begitu banyak meskipun keluarga tuan membantu saya.

Dalam Asurama, beras Eve memasak setiap hari itu tidak bermasalah lezat. Selain itu, seperti permen yang saya telah keluar pada saat pekerjaan istirahat, saya mengambil lelah. Itu menggantung dalam pekerjaan, saya pikir itu karena ada dukungan dari Hawa, yang memberi saya nasi lezat setiap hari. Hawa kami, kami bersyukur benar.

Mahasiswa Indonesia, diminta untuk membantu pada saat kelas Jepang, ada sering Anda mendapatkan untuk memberitahu kami tentang Indonesia. Secara khusus, kami mampu untuk mengalami bahwa Anda tidak dapat mengalami jika tidak ada mahasiswa Indonesia seperti makanan membeli dari adalah bahwa

dan warung makan daging anjing. Saya bisa pengalaman seperti itu, saya berpikir bahwa itu adalah berkat mahasiswa Indonesia.

Dengan cara ini, justru karena ada orang dari dukungan sekitar bermacam-macam, itu adalah pengalaman yang berharga, saya merasa bahwa kami mampu menghabiskan keras selama 18 hari. Dan, dari diri mereka bisa hidup, saya telah belajar itu karena ada banyak dukungan dari seluruh. Saya ingin menjadi lupa hal ini.

## インドネシアワークキャンプを通して

国際教養学部 1回生 岩永 周子 (ちかピィ)



私は、大学に入ったらいろいろな国に行ったり、いろいろなことに挑戦してみたいと思っていました。そんな時に、私はこのインドネシアワークキャンプがあるということを知り、応募してみようと思いました。海外ボランティアに興味があった友達の影響で、私も海外でボランティアをやってみたいと思ったのがきっかけです。また、日本や先進国の国々とは違い、これから発展していく発展途上国であるインドネシアは、どんなところが発展途上国とされているのか、自分の目で確かめ、実際にその生活を体験したいと思ったからです。事前研修では、先生方が話されたインドネシアでの生活の話聞いて、想像するととても不安になり、18日間生活していけるのか不安になりました。また、日本ではそんなに気にしていなかった病気にならないかということも不安でした。

インドネシアでは、車よりバイクが多く、バイクも2人から4人もの人が同時に乗っていたり、

反対車線を堂々と運転していたり、車間距離もほとんどなく、いつか事故しないかひやひやしました。ホテルまでの道のりは、サークルKや、日本の自動車の看板がたくさんありました。実際、インドネシアで走っている車を見ると、その多くは日本のメーカーの車がほとんどでした。また、ほとんどの店や建物には赤と白の国旗を模した旗のようなものが飾られていました。街の方の建物は、高いビルなどがなく、木よりも低い建物が多くみられました。プリビンサリ村などは、ヤシの実がなる木がたくさん立っていました。プリビンサリ村での生活は、シャワーは、お湯が出なくて、水でシャワーを浴びていました。はじめは慣れなかったシャワーもだんだん慣れてくることができました。が、日本では水道をひねって温度調節をすると、お湯が出てくることのありがたさを実感しました。また、私のホストファミリーの家では、洗濯機があり、ホストファミリーが使っていたことだったので使わせてもらっていましたが、一度、手洗いでシャツを洗う機会があり、手洗いの大変さを知ることができました。インドネシアの環境は、デング熱についての注意を聞いていたので、たくさん蚊が飛んでいるのだと思っていましたが、ほとんど蚊はいなくて、その代り、ハエとありがたくさん家の中にいました。心配していたインドネシアの料理は、時に辛いときもありましたが、とくに辛くなく、食べることができました。インドネシアの人は、朝が早く、夜も早かったので、ホストファミリーとは、あまり話すことができませんでしたが、朝私たちが活動に行くときや、帰ってきたときには、いつも笑顔であいさつをしてくれました。また、フリータイムの日にホストファザーがドライブに連れて行ってくれました。

私たちのプログラムの中には小中学校、高校、看護学校に行って日本語の授業をするというプログラムがありました。私たちは、インドネシア語で日本語を説明することになっていたのですが、インドネシア語の指導や、私たちの説明不足をインドネシア学生のフォローによってとても助けられました。今回は、ゲームを通して日本語にふれてもら

うような感じだったけれど、授業で日本語を勉強していることがわかりました。私は、いろんな国に、日本語を学ぼうとしている人がいるので、日本語教員となって、日本語を学ぼうとしている人たちの手助けになればいいなと少し自分の将来について考えることができました。世界にはたくさんの国があるなかで、日本に興味や関心を持ってくれているというのはとても誇りに思いました。だから、私も日本人として、ある程度の日本人としての知識や常識をわきまえておこうと思います。

ワークでは、第五アスラマの雨季時のために壁を作りました。実際に作ってくださったのは、職人の方々でしたが、私たちも、その壁づくりのために、石やブロックを地道に目的地まで運んだり、バケツリレーをしたりして手伝いました。石やブロックを運ぶために何度もスタート地点から目的地まで運ぶのは、とても疲れましたが、日本人学生もインドネシア学生もお互いに励まし合い、また、アスラマの子供たちが学校帰りに、一緒にワークを手伝ってくれて、辛くて苦しいときも乗り越えることができました。作業をしながら、たくさんのアスラマの子供たちと話すことができました。石を積み上げて作ってくれたのは、職人の方々だったけど、完成した壁をみて、一つ一つの石やコンクリートの部分には自分たちが暑い中頑張った証だと思うとうれしくなったと同時に、雨季の時期に、この壁が雨季のときに役に立ってくればいいなと思います。アスラマの子ども達は、とても明るくて、いつも笑顔で接してくれました。言葉がお互いに通じないことが多かったけれど、ジェスチャーで話したり、なんとなく伝わってきたりしてとても不思議に感じました。アスラマにいる子ども達は、みんなが協力して生活しているのだと感じました。そんな子ども達がどんなところからきているのか、知る機会がありました。兄弟が多かったり、電気やトイレがなかったり、床が土でできていたりなどのある程度の条件があり、そこから選ばれてきているとわかりました。正直、日本でくらしている私たちには、電気やトイレがなかったりするの、あまり見たことがあり

ません。次に、私たちは、アスラマに来ている子ども達の出身村を訪れる機会がありました。ここでは、本当にブドウ畑の中にトイレやマンディをする場所があり、そこには電気がありませんでした。バリには、いろんなところに犬がいます。ここでも犬が飼われていましたが、その犬はがりに痩せこけていて、本当にかわいそうだと思ってしまいました。どうして、その村が、貧困から抜け出せないのかというのは、ブドウ農園は、地主から借りているために、収穫してから、土地代を払う義務があり、その税金が高くて、それを払うのに必死で、ブドウ農園をしている人たちはその悪循環から抜け出せないということでした。それを聞いて、昔の日本の年貢の制度のようにも思えました。実際住んでいる人の家を見て、自分の生活を振り返ると、多々反省する点があるように思います。無駄なものを買ったり、食べ物を賞味期限切れにしてしまったり、世界には食べ物に困っているひとたちがたくさんいる中でそんなふうにしてはいけないと思いました。毎日、その日に食べることに必死になって暮らしては教育を受けることもできず、また地主の元で過酷な生活を送らないといけません。そんな生活を防ぐために、アスラマに行って教育を受けることで、そこからの悪循環を抜け出し、成功すれば、違う道が開けるようになるのだということで、教育の大切さを学びました。私達は、小学校から中学校までは義務教育を受けるけれど、その後は、みんなが行くから高校に行く人が多いし、大学もみんなが行くから行くという人も多いと思うから、もっとしっかり目的を持つべきだと思いました。アスラマで今暮らしている子供たちには、しっかり勉強して、大きくなった時に、子ども達の家族を助けてほしいなと思います。

ブリピンサリ村を離れて、観光地にも行き、インドネシアの有名なところを周ることができました。観光地では、たくさんの外国人の人がいました。市場などでは、初めて値下げ交渉をしたりしました。また自由行動では、買い物をするときや、どこかに行くときに、インドネシアの学生にたくさん助けられました。18日間ともにすごした

インドネシアの学生とは、初めて会ったとき、緊張していたし、仲良くなれるかとても不安だったけれど、インドネシアの学生がとてもフレンドリーで、おもしろくて、すぐに仲良くなれることができました。プリピンサリ村を離れてから、あと数日しか一緒にいられないと思うととても悲しくなりました。本当に、こんなにも仲良くなれて、今でもインドネシアの学生とは連絡を取り合っています。インドネシアの学生と出会えてよかったです。

私達のワークキャンプは、本当にいろんな人たちに支えてもらっていました。行くまでにインドネシアに行くまでの事務的なことをしてくださった方々、インドネシア語を教えてくださいました先生、また、現地については、インドネシア学生と日本の学生がわかるように通訳をしてくれたり、プリピンサリで私たちの食事を作ってくれたイブ、いつも笑顔で見送ったり、迎えてくれたホストファミリー、いつも私たちを見守って下さった引率の先生方など、私達が一つ一つ行動するたびに、いろんな人たちに支えられていました。また、事前研修から、インドネシアでの18日間、一緒に過ごしてきたIWCのメンバーにも感謝しています。

本当にお世話になった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、このワークキャンプを通じて、自分から気づいて動くことや、一歩勇気を出して、何かをすることは失敗したり、悪い結果になったり悪い方に考えてばかりで、消極的だったけれど、積極的に行動することで、新しく自分を成長することができたと思います。一方で、インドネシアの人たちと関わることで、自分の英語力のなさ、コミュニケーション力のなさを痛感しました。もしも、もっと英語力があり、コミュニケーション力があったのなら、もっと多くのことを知ることができたのではないかと思います。これからの大学生活で、もっと英語力をあげたいと思います。また、アスラマのいるような子供たちのために、自分がなにかできることがあるなら、少しでも協力していきたいと思いました。このIWCの活動で学ん

だこと、体験したことを直接、これからの大学生活に取り入れていくことは難しいかもしれないけれど、でも、学んだこと、体験したことはこれからも忘れずに、私のなかに閉じ込めておこうと思います。最後に、周りの人たちが、インドネシアは楽しかった？と聞いてきて、楽しかったと言えるけれど、楽しかったという一言ではまとめられない、本当に貴重な体験、濃い時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Chikako Iwanaga

Saya bisa bertemu banyak orang dan mendapatkan ilmu serta pengalaman.

Ibu dan bapak yg berada di homestay saya memberikan saya tempat tinggal, jadi saya bisa beraktifitas dengan baik.

Mereka juga mengajarkan saya bahasa Indonesia yang mudah dimengerti. Ketika saya menuju asrama, mereka selalu memberikan senyum yang indah. Minggu terakhir saya dan teman-teman mengunjungi Dam dan gereja bersama bapak. Terima kasih kepada keluarga angkat saya.

Saya ingin mengucapkan terima kasih yang sebesar-besarnya kepada anak-anak dan staff yang berada di asrama. Saya tidak bisa berkomunikasi dalam bahasa Indonesia kepada anak-anak, tetapi mereka mencoba untuk berbicara menggunakan bahasa tubuh. Senyuman mereka juga memberikan kami semangat yang kuat dan perasaan percaya diri. Mereka membantu pekerjaan kami sesudah pulang sekolah. Ibu di asrama memasak makanan untuk anak-anak, selain itu mereka juga memasak makanan untuk kami selama kegiatan berlangsung.

Kami berbagi waktu yang menyenangkan dan

kesulitan semua bersama-sama. Saya telah mempelajari suatu hal sangat penting dari mereka. Jadi saya ingin mengucapkan "terima kasih" kepada semua member IWC

Saya bisa menghabiskan banyak waktu menyenangkan di Indonesia. Saya tidak pernah melupakan menghabiskan 18 hari disana. Menghabiskan waktu 18 hari disana adalah ingatan yang penting.

Terima kasih untuk semuanya

## インドネシアでの体験

経営学部 1 回生 西川 誠一郎 (セーピー)



私は今回の第29回国際ワークキャンプで日本には出来ない多くの体験してそれによって多くの経験を得ることができました。それは次の通りです。

### (事前準備)

インドネシアに出発する前の事前準備では初め私はほとんどの人が初対面なので気を使ってしまう所もありましたが準備や授業をこなしていき出発する日が近づくにつれそれもなくなっていきました。私達は毎週金曜日の週に一回、事前研修ということでチャペル横の部屋に集まりインドネシア語の授業を受けたり去年のIWC28の人達から話を聞いたりしました。また現地でのいろいろなプログラムを成功させるために交流班、日本語班、衛星班、しおり班、記録班、日本食班の5つの班に分かれてそれぞれ作業をしました。私は現地の子供たちとの交流を目的として開催される交流会のプログラムなどを考える交流班に所属しま

した。交流会のプログラムを考える時一番に考えたことはどうやったら現地の子供達に喜んでもらえるかを第一に考えてプログラムを考えました。しかし子どもの人数やどのくらいの広さでどのような場所なのかなどが現地に行かないとわからない状況だったので考えるのにとっても苦戦した。私はこの時交流班の仕事ができてるかできてないかで言うと出来て無い方に入ると思います。私はこの時もっと積極的に取り組めばよかったととても後悔しています。そして8月の初めに私達は一泊二日で事前合宿しました。事前合宿ではダンスや歌などの最後の仕上げをしたほかに最後には児童養護施設に行き施設の見学や施設の人の話をききました。この体験があったため日本とインドネシアの児童養護施設の違いなどがわかって非常に良かったです。

出発する前、私は初めて行く異国の地で自分たちの考えたプログラムが本当に成功するのかと不安を持ちながらインドネシアに出発しました。

### (プリンピンサリ村)

私たちはインドネシアに到着してホテルで一泊してからプリンピンサリに向けて出発しました。それほど大きな渋滞に巻き込まれることなく4時間ぐらいで無事到着しました。プリンピンサリに到着すると多くの子ども達がダンスや楽器の演奏で出迎えてくれました。現地にいるほとんどの時間をプリンピンサリで過ごし、その間子ども達と一緒にいろいろな遊びをしましたが一番思い出に残っているのがサッカーをしたことです。夕方5時から夕食の時間まで汗だくになりながら大人げないぐらい全力でやりましたが結局一度も勝つことができませんでしたがとても楽しくほぼ毎日していました。その他にもバドミントンやバレーなどいろいろな遊びをしました。子ども達とは言葉では深くコミュニケーションをとることは出来ませんが言葉の壁を乗り越えて通じ合えたと思います。町の人達はとても明るく私たちが挨拶をすると必ず返してくれました。私は今まで挨拶をされたら返していたが自分からするとゆうことはあまりなかったのですがいざ自分から挨拶すると

とても気分がすがすがしく、とてもいい気分になることを知り、挨拶の大切さを知りました。今後は私も村の人達を見習って自分から積極的に挨拶をしたいです。

ホームステイ先のイブとパパもとても優しくミーティングなどで夜遅く帰ってきてても笑顔で出迎えてくれたりしてくれ私の疲れを和らげてくれました。また毎朝私たちの朝ごはんがないと思ってるのかあるのを知っていて技と出してくれてるのかはわかりませんがわざわざ毎朝朝ご飯を作ってくれました。私達が現地での洗濯やシャワーのやり方を間違っただけで風呂場を荒らしても怒らず優しく正しい方法を教えてくれました。リビングで話す時も日本語の本を持ってきて必死に私たちとコミュニケーションを取ろうとしてくれました。私達がホームステイしてる間も本当の息子のようにしてくれました。私はそんなイブとパパが大好きです。

#### (日本語授業)

私は、小学校、高校、専門学校の3つの場所で日本語の授業をしました。日本にいてる時から授業を成功させるため何回も打ち合わせや練習をしました。その打ち合わせした情報を現地のインドネシアの学生に伝えることが一番大変でした。インドネシアの学生とのおもなコミュニケーション方法は英語でしたが今まで英語をしっかりと勉強していなかったのであまりうまくコミュニケーションをとることができませんでした。何とか伝えることができたのですがとても苦労しました。出発前私は、インドネシアの学生たちとのコミュニケーションは英語が話せなくてもジェスチャーでどうかなるものだと思っていました。しかし実際大事な所を伝えるときに英語は必要不可欠なもので私はこの時初めて英語が本当に大切なものだと身に染みて実感しました。このようなことがあって私は、本当に日本語の授業は成功するのかと不安でいっぱいですが日本語班の人達がしっかり準備してくれていたのとインドネシアの学生のサポートがあったおかげで授業はうまくいきました。また一回一回の授業でダメだったところを修正

し、次の授業を行ったので数をこなすうちにどんどんいい授業になっていきました。現地の学校の子も達は明るく授業にも積極的に参加してくれたおかげでとても盛り上がりスムーズに授業進めることができ、またとてもフレンドリーで短い時間にも関わらずとても仲良くなることもできました。すべての授業を終えてみると授業を始める前は自分達のインドネシア語の説明が上手く伝わるのか時間通りにしっかり終われるかなどの多くの問題がありましたが状況に応じて臨機応変に対応できたのでとてもよかったです。

#### (ワーク)

今回のワークでの目的は第5アスラマで壁を作ることを目的としてワークを行いました。主な作業は石や砂やブロックの運搬でした。現地はとても暑く長時間の作業は危険なため休憩を多く取ったり休憩をとる人と作業する人を班で分けて常に作業が止まらない状況にしたり作業中はメンバー同士励まし合うなどいろいろ工夫して作業しました。また学校が終えた子ども達が手伝ってくれとても作業を早く進めることができました。

ワークはとてもしんどかったです。現地の子ども達のためだと思えばしんどい作業もすぐに終わっていきました。

#### (交流会、日本食)

交流会は交流班のリーダーを中心に日本にいるときからしっかりと準備してきました。しかし予定外のことがたくさん起こってしまったために変更をせざるを得ないところが出てきましたがそれでも自分達ができることは精一杯し、みんなでゲームをしたり日本で練習してきたダンスや歌を披露し、子ども達に喜んでもらおうと必死にみんなで頑張りました。

その他にもアスラマの子ども達やホームステイ先の人達に日本食であるカレーをみんなで作ってふるまいました。カレーはホームステイ先の人達と一緒に食べるのでこの間にあまり時間がなくてコミュニケーションをとれていなかったイブやパパとコミュニケーションを取れてとてもいい時間

を過ごすことができました。

(バニユポ村)

私達は車で一時間かけてバニユポ村という村を訪れた。そこは一面がブドウ畑でその中に家があるという状況の村でした。その村では食事は一日にトウモロコシのおかゆのようなものを二回食べればらい方だったり水も十分でない村だと私は聞いてとても衝撃をうけました。しかしいざ村の中に入っていくともっと衝撃を受けました。キッチンはとても料理ができるような状態でなくまたトイレもこれが本当にトイレなのかと思う状態でありました。私は初めてみた目の前の景色にとっても驚きました。そして今まで自分がとても恵まれていたんだと感じました。今回私がバニユポ村を訪問して思ったことは多分今の日本ではこのような貧困村の状況を知っている人は少ないはずです。この村の現状をもっと多くの人にしてもらうため私達がいろいろな方法で伝えていかなければいけないと思いました。それがとても大切なことだと私は考えました。

(最後に)

私はインドネシアにいる18日間でも充実した毎日であつとゆう間に過ぎていきました。私はこの体験をする前はボランティア活動にしか興味はありませんでしたがこの体験をした後にもっといろいろな国の文化や習慣または現状などを見てみたいと感じるようにもなりました。またインドネシアにいるときに大切と感じた英語力、挨拶の大切さは今後努力していきます。このインドネシアワークキャンプで過ごした18日間の経験を無駄にせず自分の将来の夢や今後の生活面に生かしていきたいです。最後にお世話になった先生、スタッフの方々、インドネシアの学生、現地の方々本当にありがとうございました。私は体験をこれから何十年たっても忘れることはありません。本当にありがとうございました。

## Terima kasih

Seiichiro Nishikawa

Aku harus banyak terima kasih untuk berpartisipasi dalam 29 kamp Lokakarya Internasional kali ini. Homestay Eve dan Bapa selalu anak di pagi hari dengan atau saya untuk membersihkan beras dan ruang Asurama Anda memberi saya mendukung kehidupan di Indonesia saya selalu menyembuhkan saya dan saya bermain dengan senyum Ini memberi saya. Asurama Hawa yang memberi saya selalu memenuhi perut saya untuk membuat nasi lezat untuk kita. Miwa Ishii memberi saya juga dirawat ketika aku sakit. Juga, itu memberi saya mendukung lebih besar dalam semangat pesawat. Dengan cara ini saya bisa menghabiskan 18 hari di Indonesia saat sedang didukung oleh banyak orang. Untuk banyak orang yang telah mendukung saya, saya akan berterima kasih dan penghargaan.

## 異文化での体験・経験

国際教養学部 1回生 牧野 拓弥 (たくピィ)



<はじめに>

このインターナショナルワークキャンプ（以下、IWC）というプログラムに参加しようと思ったきっかけは、海外に行ったことがなくただ海外に行きたいという考えだけだった。

高校の時は部活中心の生活を送っていたので大学では様々な経験をしようと考えていて、海外に

行けるならどのプログラムでもいいと思っていた。

でも入学してから学内にIWCのプログラムのポスターがあったりしてとても目立っていたのでこれにしようという思いで参加した。

#### <事前研修>

5月にIWC29が結成した。最初は、2回生が多く馴染めるか不安だった。けど親睦会をしたり一緒に授業を受けたりしているうちに馴染んでいき、このメンバーで協力していくんだという思いになった。事前研修は様々なことをした。由比さんのインドネシア語の授業やインドネシアナイトや現地で行う日本食パーティーの事前調理実習や学内合宿などをした。由比さんの授業はとても大変だった。毎回宿題が出て、内容がインドネシア語で文を作ったり暗記して自己紹介をしたりするものだった。インドネシアナイトは留学生と協力してダンス、歌をした。昼休みや5限終わりなどの時間を使ってダンスや歌の練習をした。事前調理実習はカレーを作り、各班に分かれて調理した。合宿は1泊2日行い、1日目は日本語の授業の確認と物品の作成や唄、ダンスの練習をした。2日目は児童養護施設の見学に行った。そこで、施設内の子どもたちと直接触れ合い施設の職員の方から話を聞き、児童養護施設とはどういったところなのかを知った。事前に多くのことをし、しっかり準備をして現地に行った。

#### <プリンビンサリ村とアスラマの子どもたち>

プリサロンホテルで1泊して次の日の朝からバスでプリンビンサリ村に向かった。移動時間は4時間ほどかかった。着いた途端にアスラマの子どもたちが、お花を首にかけてくれたり楽器を演奏してバリの伝統的な踊りを披露してくれたりして華やかに歓迎してくれた。そのときにもらった果実の入ったフルーツジュースがとても甘くおいしかった。

歓迎会の終わったあと第2アスラマ内の見学とホームステイ先に挨拶に行った。アスラマ内は、思っていた以上に広く想像と違った。アスラマ内

には、家畜があったり畑があったりため池のようなものもあって、そこで野菜を育てたり豚を育てていたりしていた。ゴールは壊れていたがバスケット場やブランコ、グラウンドがあって、無いと思っていたので驚いた。壊れていても子どもたちが楽しそうに遊んでいるのを見ると、遊び場には変わらないんだなと思いました。

次にホームステイ先に挨拶に行った。そのときも子どもたちが一緒について来てくれて案内をしてくれた。最初に行ったホームステイ先で、4人で行って多すぎるという理由で追い返されて泊まるどころがなくどうしようか困っているときにアスラマの人たちが助けてくれてホームステイ先を探してくれた。3か所回ってやっと見つかった。そのホームステイ先のホストファミリーは快く受け入れてくれてとてもうれしかった。プリンビンサリ村の人たちはとても親切だった。

アスラマいる子どもたちはほとんどが親と離れて暮らしていた。アスラマに子どもたちが来る理由を聞いて事前研修で行った日本の児童養護施設のことを思い出し、日本と海外の違いを知った。日本は、親の虐待・育児放棄などを受けて施設に入る子どもたちが多くアスラマの子どもたちは例外もあると思うが、ほとんどはお金がなくご飯が食べられなかったり学校に行けないという理由であった。子どもたちのバックヤードの写真をスイクラマさんが見せてくれて説明してくれた。そのときに聞いた内容はとても考えることが多かった。財団が貧困村に訪れて調査し、子どもたちを連れて来る。そのときに条件があり、家がない・電気がない・トイレがないということだった。子どもも親側は女の子より男の子を行かせたがるらしい。親側の理由は、男の子は跡継ぎなどの理由で教育を受けさせたくて、女の子は早く結婚させるということだった。でも施設側は、半分ずつ男女平等で選んでいるという話を聞いた。子どもたちが親と会えるのが年に4回ほどしかなく、ほかの島からきている子はあんまり会えないということも聞いた。子どもたちもやっぱり親と会いたいと言っていた。

### <ワーク・護岸工事>

作業した場所は第5アスラマのムラヤで護岸工事を行った。最初の作業は石運びと砂運びの作業だった。とても量が多く、ムラヤの子どもたちと協力してバケツリレーなどもして作業した。バケツリレーは連携して行ったため子どもたちと話す機会が多くなって仲良くもなれた。作業中はとても暑く何回も休憩を挟み、作業を行った。作業が早かったせいか滞在中に壁が完成した。早くに完成できたのは、みんなで楽しく協力しながらできた結果ではないかと思う。

### <日本語の授業>

小学校・高校・看護学校の3つで日本語の授業を行った。授業といっても自己紹介を日本語でするぐらいのことで、あとはかるたやカラーバスケットなどのゲームをした。各学校に行ってみると子どもたちが日本語であいさつをしてきて驚いた。なぜ日本語を知っているのかと聞くと日本語の授業があるらしくて、それで知っていると言われ最初に50音の発音したときも出来るって言われた。じゃんけん列車、カラーバスケット、かるた、告白ゲームなどのゲームをしてとても盛り上がり大成功した。

今回で授業の大変さを知ることができた。説明であったり理解出来ない子にわかりやすく説明したり参加していない子に興味を持たせたり、とても難しかった。でも子どもたちは楽しそうにしていたのでやりがいがあったとてもよかった。授業内容の説明は自分たちでインドネシア語で言い、伝わらなかったところはインドネシア学生に助けてもらいながらした。発音の練習や内容の打ち合わせなどは前日にしっかりして、インドネシア学生と確認をしながらした。それでミスも少なく臨機応変に進めることができしっかりと打ち合わせの大切さを知ることができた。

### <貧困村・バニユボ村>

9日目にバニユボ村という貧困村に訪問した。そこは、ブドウ農園の中にあり1つの家に3家族が住んでいる家もあった。牛や犬、ニワトリ、豚

がたくさんいてどの家族のものなのかもわからない状態であった。トイレやマンディーする場所には苔が生えていたり、外にあるにもかかわらず壁があつてないような状態であったりしていて衛生的にも良くないんじゃないかと思った。

訪問して思ったことは貧困村と聞くと可哀想と思う人が大半であるが、それは貧困村と呼ばれている人たちの生活より裕福な生活をしているからであつて、その村に住んでいる人たちは今の生活しか知らないから今の生活が当たり前と思つていると思うのでその人たちに可哀想と言つたり思つたりすることは失礼にあたると思つた。でも貧困村があつてどういった生活を送っているのかを知ることが大切なことだと思つた。訪問して新しいことを知れて実際に見て考えることができたのが1番よかったことではないかと思う。

### <まとめ>

今回このプログラムに参加したことはとても良かったとだと思つし、考えさせられることが多かったので自分なりに少し成長があつたと思う。たくさんなことを経験、体験しそれによって考え、悩んだりもした。でもそれ以上に普段日本に居てできないこと、感じる事ができない貴重な体験ができとても有意義な夏休みになった。

自分たちにできることは限られていて、大それたことはできないが人のために何かを成し遂げることは大切なことであつて自分自身成長できるものである。このプログラムは参加して悪いものは何一つなく、協力とは何か貧困とは何か国際交流とは何かを知れるものであつたので参加して良かったと思う。次の参加を考えている人がいるのなら積極的に参加してこれからもIWCを続けてほしい。

最後に、このプログラムで成長できたことをIWC29メンバー、引率教職員の方々、現地の方々感謝しています。

## Pengetahuan adalah kekuatan

Takuya Makino

Pertama, saya ingin mengatakan bahwa berpartisipasi dalam program IWC adalah pengalaman yang sangat berarti bagi saya.

Sepanjang pengalaman, sudut pandang saya terhadap dunia menjadi lebih luas.

Saya juga ingin mengucapkan terima kasih kepada Ibu, Babak, dan anak-anak dari Panti Asuhan Widhya Asih, keluarga angkat saya, dan Yayasan Widhya Asih selama saya melakukan perjalanan dan berkegiatan di Indonesia.

Saya tidak pernah memiliki pengalaman seperti ini sebelumnya dalam hidup saya, dan dengan berbicara dan tinggal bersama mereka, saya sangat merasakan betapa pentingnya "komunikasi".

Ibu memasak untuk kita, dan Bapak memperkenalkan keluarga mereka kepada kita.

Saya memang belum pernah bertemu dengan keluarga angkat saya dalam kehidupan saya, dan ketika saya tiba di tempat mereka, mereka menyambut saya dengan sambutan yang hangat.

Saya mengucapkan terimakasih kepada Yayasan Widhya Asih karena melalui program ini saya mendapatkan pengalaman yang berharga dan tak terlupakan.

## 豊かということ

経済学部 1回生 増田 俊輔 (しゅんぴい)



私はこのプログラムを入学案内に入っていたパンフレットで知りました。今までボランティアに興味を持っていませんでした。両親から「あなたも人のためになることをしなさい」といわれたことと夏休みにどのような形でも海外に行けるかもと不純な気持ちから参加しました。インドネシアといえばバリ島、観光地といったことしか知りませんでした。

私は人見知りで人に話しかけることが苦手です。何も知らない、何もわからないことが不安でインドネシアに出発するまでの事前研修には全部参加しました。最初は話を聞いているだけでした。戸惑いは大きかったかもしれません。事前研修は次から次へと予定があり、恥ずかしいなどと言ってもらえないのが現状でいつからか私なりに頑張ろう、楽しもうという気持ちが湧いてきました私の足りない多くの部分を仲間が補ってくれている心地よさと心強さを感じ私にも何かできると感じていました。しかしながら出発が近づくにつれて私は役に立てるのか環境になれるのかやはり不安になりました。

インドネシアに着いたとき日本とは違う異国において感じました。「さあ、頑張ろう」とスーツケースをぐっと握りました。

入村式が行われるムラヤへはトラックの荷台に立って乗るスタイルでした。自然を感じ、風に吹かれ気持ちよかったです。入村式の後村の方々による楽器の演奏や子供たちの踊りを私は観光気分でも過ごしました。原色の布で着飾った彼女たちはとても美しく魅力的でした。観光気分もここまで式の後、児童養護施設周辺に壁を建設するボラン

ティアワークが始まりました。ワークでは隊長、副隊長が厳しい日差しの下、時間配分を決めこまめに休憩をはさみ作業を進めるので誰も体調を崩しませんでした。砂を運ぶ作業を最初は一人ひとり運んでいました。途中からバケツリレーに変更することで体力温存でしんどいけれど楽しくワークすることができました。またお互いに「頑張れ」「ファイト」など声を掛け合うことでやる気を維持したままワークを進めることができました。一致団結して取り組んでいる充実感を味わうワークでした。時々、ふうーと気を抜きたくなる厳しい日差しの下ワークも10日ほどで壁の設置作業も順調に進み記念碑ができた時にはここに参加できていることに充実と喜びを味わいました。一人より仲間と共に過ごす充実感でした。

アスラマの子供たちはもとより、その周りの人々は皆、明るくフレンドリーでした。ホームステイ先からアスラマまでの道中、すれ違う人々も皆笑顔で挨拶してくれます。私がおどこのだれかも知らないだろうに、みんな家族のように声をかけてくれました。時には日本語で挨拶してくださる方もあり最初はビックリでしたが翌日には豊かな気分になったのを覚えています。アスラマの子供たちも大きな声で挨拶してくれますし遠くからでも大きく手を振ってくれます。日本にいるときの私は知らない人に自分から挨拶することなどありませんでした。近所の顔見知りの人たちでさえ軽く頭を下げるくらいでした。私がお世話になったホームステイ先のイブやババもまだ暗い早い朝でも家族と同じようにおはようとあったかい紅茶を用意し、出かける私たちを送り出してくださいました。インドネシアに来て笑顔で挨拶することの大切さと当たり前のように笑顔で暮らせる彼らの心の豊かさを感じました

アスラマの子供たちの朝は早く、各自でそれぞれに1日の用意を始めます。毎食後、子供たちは当番制でお皿やコップを片付けます。自分たちができることは自分たちです。これも将来自立するための教育なのです。私も一緒に片づけをしましたがこの時ばかりは私よりアスラマの子供たちのほうが手際よかったです。

夕方の空いた時間にアスラマの子供たちにサッカーをしようと誘われました。私たちより小さな子供たちは皆素足。日本人対アスラマの子供たちで試合を開始しました。私は余裕で勝ると軽く考えていました。しかしアスラマの子供たちのボールさばきはとてもうまくなかなかボールを奪えません。手も足も出ず1度も勝つことができませんでした。アスラマの子供たちの身体能力に驚かされました。それは12日の運動会でも同じでした。昼から夕方までぶっ通しでたくさんの子供たちとサッカー、縄跳び、バドミントン、バレー、をしました。子供たちは休憩などしません。はずかしながら私は体力がなくなるとバテバテだというのにです。少し休んでいると子供たちは遊ぼうと誘ってきます。中でも一番しんどかったのはだれが考えたのか子供をおんぶしての縄跳びでした子供を背中に乗せながらの縄跳びは初めてで足はガクガク腰も痛かったです。でも背中に乗っていた子ども達は皆楽しそうでしんどい以上にうれしかったです。縄跳びを終え座っていると私の後ろに来て黙って私の肩をもんでくれました。それはそれは気持ちのいい肩もみでした。ここでもまた彼のやさしさにハヤされ、豊ってなんだろうと考え始めました。

アスラマの子ども達はいつも笑顔いっぱいです。笑顔とともに優しさも持ち合わせています。時には喧嘩もするし泣くこともあります。アスラマで暮らす子ども達の背景は様々です。アスラマで暮らす理由も自分なりに理解しています。さみしさや心細さを奥のほうに隠し元気で明るい彼らに何かしてあげたいと強く感じました。

アスラマで暮らす子ども達の出身地の1つであるバニユポ村に訪れた時、私の顔はゆがんでいたと思います。出発前に貧困村であることからどのような生活か想像しました。しかし実際のバニユポ村は私の想像などはるかに超え現実として受け入れられないままでした。そこは雨が少なく深刻な水不足で、ほかの町から週に2回しか送られてこない生計のために少量の水で育つブドウの栽培をしているもののたわわに実った日本のブドウ畑とは違うものでした。ブドウ畑をぬけると人々が

住む家がありました。風呂も外でした。ドラム缶にためられた水こんな環境で17人家族が暮らしているのです。子ども達は小学校までしか通っていません。正直、蛇口をひねれば温かいお湯が出てふかふかの布団で寝ることが当たり前な生活の私には半日も持たないと思います。しかし何かが違うのです。パニユポ村の子供たちもアスラマに暮らす子供たちとなんら変わらない屈託のない笑顔なのです。彼らはパニユポ村で助け合い自分たちの力でしっかりと生きているのだと感じました。貧困や衛生面の改善は必要であるがものがあることだけが生きていくうえで豊かだとは言えないと思いました。うまく伝えられませんがこの笑顔で私たちを迎えてくれる彼らは心豊かであるように見えました。私の親も「あんたたちが笑ってられるようにとばかり思って頑張るね」とよく言います。日本にいてもパニユポ村のような貧困村のことをネットや書物で知ることはできます。しかし現地に行ったことで感じ触れることで今の私の生活が全く別の豊かさだと知ることができました。何の疑いもなく当たり前のように大学生活を送る私のようにパニユポ村の子供たちも平等に教育を受け大人になり社会人になるように環境を整えるための今回の米粒ほどのボランティアがきっと実を結ぶと信じています。そのためにも1人でも多くの子供が教育を受けることが大切なのです。

私は中、高、看護学校で日本語の授業を行いました。日本語班が内容や時間配分を決めてくれました。事前研修中にみんなで集まれる時間が少なく正直インドネシアの子ども達の前でうまく授業ができるか不安でした。初めての授業はとても緊張しました。始まってしまうとインドネシアの子ども達は元気でノリがよくあいうえお表の時などはそれはそれは大きな声を出してくれました。カルタやカラーバスケットも本当に楽しそうでも一緒に楽しい時間を過ごしました。ワークを手伝ってくれる子ども達もいて彼らの明るさが大きかったです。しかし数人の積極的に参加してくれない子もいました。その姿は自分に少し似ていました。何度か声をかけましたが時間が短く思い

通りに行きませんでした。きっと来年シャイな彼らも日本語授業を楽しむ姿が見られと思います。そのためにも私が参加したIWCの活動が続くことを望みます。

こんな未熟な私にも子供たちは寄ってきてくれます。毎日笑顔の彼らと過ごした時間はとても楽しかったです。彼らとの別れがさみしいと感じたのは私にとって初めてのことでした。

私の住む町にも育成園という養護施設があります。同級生にもその施設で暮らした友がいます。どんな事情でそこに暮らすことになったかは聞いたことがありません。彼は人にやさしくいつもここにこ笑っています。集団生活で身に着けた彼の魅力です。アスラマの子供たちも人にやさしく心豊かな大人になると私は思います。私も彼らに恥じないように日本の暮らしの中で次に進む道を探します人見知りがましになったかは定かではありませんが今の自分に少しの笑顔をプラスしていこうと思います。

## Terima kasih

Shunsuke Masuda

Terima kasih saya malu untuk orang tua “Apa yang bias diharapkan untuk seseorang” dan yang menyelesaikan IWC partisipasi. Tepat kami juga merasa senang bahwa anda bertemu dengan rekan-rekan yang telah mendukung negara saya yang tidak tahu bahkan meninggalkan. Membersihkan kamar hangat dan menyambut saya adalah ayah homestay, adalah hidup tanpa ibu apa yang cacat. Burinbinsari orang telah disambut dengan senyum yang sehat asurama dengan saya ingin memiliki lebih banyak dan lebih bersama-sama. Orang-orang yang telah baik hati didukung oleh local, berkat guru dan yang dipimpin. Juga, anda telah bermimpi melihat anak-anak suatu hari nanti asurama. Akan

terus menantang sehingga untuk membiasakan diri dengan malu ada orang dewasa untuk anak-anak asurama juga untuk itu. Yang telah berpartisipasi dalam IWC kemungkinan akan kebanggaan saya. Kami ingin mengucapkan terima kasih semua orang. Terima kasih semua.

## 《参加学生のレポート》

Gede Indeo Mario A



Good morning all IWC 29<sup>th</sup> members. Ogenki desu ka ? ☺

On behalf of IWC 29<sup>th</sup> group member, I will Share about what I feel when I was join in IWC 29<sup>th</sup> in Belimbing sari, Melaya and Denpasar from 18<sup>th</sup> of August- 4<sup>th</sup> of September 2015

First time I met with Japanese gakusei in Hotel Puri sharon I feel very nervous, Because I can't speak Japanese well and never communication with people from another country Before. I was surprised because Japanese gakusei very friendly with Indonesian gakusei, and that make me little by little becoming accustomed with new people from another country, and than when we went to Blimbing sari in the Bus, I sit with Japanese gakusei for the first one hour I don't communicated with Japanese gakusei, but Japanese gakusei very friendly they try to communicated with me with Japanese language and gesture, and then I dare to communicated them with English, and then we

arrival in Widya asih children home, we all Japanese gakusei and Indonesian gakusei very surprished because all the children accost IWC Members with beautiful smile and gesture, with Hug, laugh and joke. And then they with their pleasure droped all IWC Members go to the guest house near Widya asih children home, I was very happy

Thursday Morning all Japanese gakusei and Indonesian gakusei preparing for the first work in Widya asih 5 Melaya, first time we arrival in Melaya, We were greeted with Gong music the traditional music from Bali and Balinese dance and then we doing our first job to make a wall in Widya asih Melaya, we carries sand and many stones, and we were greted with each other with in japanese language "GANBATTE GANBATTE MINASAN" its mean keep spirit all. And then after work all IWC 29<sup>th</sup> members look so tired but we were all happy because happiness is our theme in IWC 29<sup>th</sup>.

Next we had teaching in Senior high school, before we went to senior high school we were got nervous, But with our spirit and our motivation everything is going well, and the second we devided into two groups A han with B han. Went to junior high school in Melaya, and then C han and D han went to primary school in Blimbing sari we were very happy when we teaching for the second times, we are so proud, because we can share our knowledge for the children

And the times goes very fast and finnaly we had to separated, although we cant communicated very well with each other, we are all very sad when we must separated with Japanese gakusei, I miss you so much guys, never say good bye, and you're all always will be my Brothers and my sisters forever, See you again, Domo arigatogozaimasu, Tooomoodachii forever hahahaha

## Made Febby Wijaya



Personally I really like all the activities carried out in the 29th IWC. When I first met with Japanese students I think it will be difficult to close and make friends with them. But it turns out the Japanese students are very friendly and gregarious. In Blimbingsari, I live in the Mr. Rai Wartono Family Home with Kouhei, Masashi and Takuya, and I was rooming with Kouhei. Many things that we talked together while at the homestay. From the conversation we studied together, in which Japanese students studying Indonesian and I learned Japanese. Almost every day in the afternoon we playing together, such as soccer, volleyball, jumping rope and etc. Japanese students are very happy to play with children in Widhya Asih 2 and Widhya Asih 5 home children. It shows how they concerned for children. We also volunteered to help build a wall in Widhya Asih 5. At work we supported each other, and children had come to help. We also taught at several schools in Melaya and Blimbingsari. We teach Japanese language, origami, and playing traditional Japanese games. Very nice to see students enthusiastic and their interest in Japanese language and culture. We also together made of Japanese cuisine that is Kare Raisu, it was so delicious. Japanese students also like the food of Indonesia. On the night of our familiarity with each other and dance showcasing our each culture and together we sing Hari Ini Harinya Tuhgan, and Laskar Pelangi. It truly touched our hearts

when we visited the village Banyupoh. In this village there are still many people who are poor and needy. And we hope to be able to do something useful for them. On Sunday we attend church in Blimbingsari and Ambyarsari. And we sang a song of praise I Will Follow Him. Currently farewell party with a host family and children in Widhya Asih 2, a touching moment and we will always remember. Finally after returning from our Blimbingsari village, we travelled to Tanah Lot, Ubud, Matahari and Kuta. We had fun and spend time together, until finally we parted.

For me to follow IWC 29th is a very valuable experience. This activity should be retained because it gives me a lot of benefits, such as:

First, here I get a chance to practice my Japanese language skills directly to the Japanese. The experience of learning to speak directly to the Japanese people better than just sit, look, listen, and record in the class.

Secondly, when the Japanese students come to Bali they bring their culture as well. So I can get to know the unique Japanese culture without go to Japan. Initially I was very surprised with the cultural differences that are owned by the Japanese and Indonesian. But eventually I came to understand and learn to mutual tolerance between cultures. There is a Japanese culture that is very good for me to follow, such as the culture time. During the IWC 29th to turn me into a disciplined person, I learned to appreciate the time. Japanese people also do not like wasted food. It taught me to always be grateful and not leaving food.

Third, the very spirit of Japanese students in helping childrens who live in institutions, voluntary work and teach Japanese to Indonesian Students. It taught me to have a sense of caring for others and foster a feeling of compassion for poor people.

Toughest problem I face is a communication problem. I can not speak Japanese fluently, so it sometimes causes misunderstanding between students of Japan and Indonesia. However I remain grateful because we are still able to communicate by using a little Japanese, sign language and English. We were still able to joke and help each other.

For my future these activities to provide motivation and open my heart and mind. I'm even more motivated to learn Japanese and English. I want to be able to communicate with the people of Japan, so that we can understand and someday maybe we can work together to help our poor brothers or children in other orphans who desperately need our help.

I hope IWC activities can continue to be implemented and after we return from the IWC may we still passion to serve others.

Bruno Kosten



Good morning all IWC 29<sup>th</sup> members. Minasan, Ogenki desu ka ? Ganbatte kudasai. ☺

On behalf of IWC 29<sup>th</sup> group member, I would like to Share about what I learned in this program. 18 days we've been carrying out our activities for IWC 29<sup>th</sup>. Love, Life and Laugh all in one with happiness. Greetings are an important thing in many places in the world and the key for making friendship with each other. I was surprised when I met with

you all and I was surprised when receiving greetings from you all. Your smile makes me very happy. also I was really surprised because Japanese students and Japanese Staffs respect local customs and culture, respect with the children at Asrama and respect with students and teachers at school.

During the work camp Indonesian students and Japanese students live and do activities together in a pleasant atmosphere with various projects such as education and renovation in Melaya. In those programs, I had conversation with each other and Japanese students learned many new Indonesian words. Although I couldn't communicate with Japanese language very well. From these experience and knowledge, have given me valuable occasion that I have to be more respect and having deep understanding of each culture differences.

I should tackle everything positively and always smile. 24 students and staffs of 29<sup>th</sup> could improve the good team work and could complete our work. However, there are so many problems during the work camp such as we had language problem and we had a slow adaptation. When we were doing various programs, we often had confusion between Japanese students and Indonesian students or among children in Widhya Asih 5 children home, Melaya. For example, when we carrying sands and stones by relaying buckets, work management or work procedure was not communicate well. But we solve that problem by our self without ignoring or refusing each other. When we went to senior high school in Melaya for teaching Japanese language, we had reflection meetings in which Japanese and Indonesian students exchanged opinions. By that way I learned flexibility thought and new ideas. We are the member of the IWC 29<sup>th</sup>, shared a happy time and a tough time all

together. Also, we were helping and cheering each other.

Finally, I would like to thank you to everyone. Thank very much for all your kindness and attention during the work camp. And on behalf of Indonesian students I would like to say, we do apologize if we do something wrong with Japanese students and staff. Keep up our relationship. See you again. I LOVE YOU ALL. Kind regards: BRUNO KOSTEN.

Ni Kadek Dearly Yuliantari



Moshi-moshi Minnasan,

O genki desu ka ? Watashi no namae wa Dearly desu.

That was my introduction to use Japanese language.

Firstly, I am very grateful to have been given the chance to participate in this work camp activity and I am very glad to met with friends from Osaka-Jepang. Thank you for 17 days we have spent together, many knowledge and experience that I got. Of course, during this work camp activities take place there are ups and downs we have experienced but that all we can go through and make us mutually reinforcing in the sense of kinship. I still remember the first time we met, I feel shy and hesitant. I personally feel scared when you

encounter because previously I have never met with the Japanese and I will be together with you for 17 days but over time I have started to feel comfortable and already think of you as family. Many activities that we have done together, such as carries some rocks and sands, to teach students at school, playing with children in Widya Asih children home, meeting and much more. Laugh together adorn our day and make us more excited to perform any activity.

In accordance with the theme of this year's work camp which is "KEBAHAGIAAN" , of course your arrival in the village Blimbingsari give joy to everyone. Their smile still I remember until this day, it's all because of your affection towards them. A memory that always sticks in my heart that when we work in Melaya we always encourage each other and make me feel excited at that time. Work feels lighter because we work with a cheerful heart and spirit.

During this work camp activities take place I was always getting into trouble, the problem is that I am not good at speaking Japanese. So when I want to say something to them I can only say it in English. There sometimes I really feel sad because of using the English language, and sometimes I am embarrassed with myself. But I am very happy because they can understand and respect if I'm not too clever Japanese language and I am grateful they can speak English too. Day more days have passed, until the time comes when we are Indonesian students parted with Japanese students. A very sad day because it had to split up but I believe that separation is not the end of everything but our initial step to improve each of our lives. We have jointly

learned from this work camp activities, and I hope we together are always grateful for every life we face. Although this work camp is over does not mean our friendship ended anyway. I hope our friendship continues intertwined and I'm sure someday we will meet again.

Arigatou gozaimasu Minnasan,  
Mata ne, ...

#### Forman Suprandata



"Kebahagiaan (Happiness)" was become the official theme of 29th IWC this year. And this theme has a very strong reason which it hoped through this International Work Camp, it would convey a positive impact to everyone, especially to the children that after finishing their education in children home could achieved the truly happiness in their future. Every year, students from St. Andrew University joined into the camp, work together with students from Undhira in Widhya Asih Melaya and Blimbingsari. It is also a part of my happiness that I feel personally and everyone at Widhya Asih Bali Foundation, because until now the relationship between Widhya Asih and St. Andrew may continue. Due to assist and bring the mission to change the other person, not something simple we can do. This is not an easy thing. I believe the

students who came here, spent almost 17 days working in unfamiliar place, certainly feel the same way. So many constraints experienced that sometimes makes them almost gave up, disappointed, mixed together. But again I say that their passion is so strong, as it possible to change fatigue, disappointment into happiness.

Every year, there are always new things. New faces, characters, and spirit bring different color of each year international work camp. Behind it, I also saw problems that were different from the previous year, which appears in the middle of togetherness among students. I considered this as a natural thing could happen and I took lessons from it. One important thing that I noticed that it is important to be transparent one to another. When facing a problem, students were taught to express what the weaknesses of his team were, without blaming others. The impact is very positive, besides they know each other's weaknesses, they also become brave to share and express their opinions in front of friends to another. In addition they will be able to find solutions to solve those problems.

This year was the 29th IWC, and I am very excited and enthusiastic to be able to join again in following years. That was the happiness that I feel. And may the spirit of what has been taken by the 29th IWC participants are able to provide great impact and motivation to everyone who involved in it, better myself, staff, students, and most importantly to children. Thank you. See you at the 30th IWC. どうも有り難う御座いました。

第29回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 学生預り金精算書

単位:円

収入の部		支出の部			
<b>参加徴収金</b>		<b>¥3,600,000</b>	<b>旅費</b> (ガルーダ・オリエントホリデー・ジャパン株式会社支払分)	<b>@87,240 × 20</b>	<b>¥1,744,800</b>
(内 訳)			(内 訳)	内訳' @69,000 × 20	
学生負担	@ ¥ 150,000 × 20 ¥3,000,000		航空運賃69,000円 開空施設使用料 3,040円 燃料サーチャージ 13,000円 インドネシア空港料 2,200円	内訳' @18,240 × 20	
(内 訳)			<b>現地での宿泊、食費、交通費その他</b> (YAYASAN WIDHYA ASHIIH 支払 学生負担分)		
参加補助金	@ ¥ 30,000 × 20 ¥600,000		<b>ブリンピンサリ村支出分</b>	<b>約@11,147 × 20</b>	<b>¥222,940</b>
			食事代8/19~8/31) 交通費 8/20~8/30・ムラヤへ向かうトラック、8/22・バニェボ村訪問時、 8/22.28.31・市場へ買い出し時 その他 日本食用食材等 ワーク用くわ・軍手、ブラカード、日用品、日本語授業教材作成消耗品(シール、マジック等)、薬類		
			<b>デンパサール支出分</b>	<b>約@6,642 × 20</b>	<b>¥132,840</b>
			タナロット寺院入場料、駐車代(9/1)、昼食代(9/1、9/3)、日本食パーティ用調理器具等(8/21)、楽器、ワーク用くわ、パロンダンス鑑賞(9/2)、バス・トラックレンタル代(8/18~9/3)		
			<b>ディアナブラ・ホテル支出分</b>	<b>約@8,965 × 20</b>	<b>¥179,300</b>
			(3泊宿泊費、夕食3含む)		
			(消耗品)ユニフォーム(ホーム入り)	<b>@3,067 × 20</b>	<b>¥61,340</b>
			(消耗品)速乾Tシャツ(オリジナルプリント入り)	<b>@2,000 × 20</b>	<b>¥40,000</b>
			(損害保険料)特別プログラム調理実習時の保険(7/17 学生負担)	<b>@27 × 20</b>	<b>¥540</b>
			<b>剰余金(返却予定)</b>		<b>¥1,218,240</b>
<b>合 計</b>		<b>¥3,600,000</b>	<b>合 計</b>		<b>¥3,600,000</b>

# 第30回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第30回国際ワークキャンプ(インドネシア)の参加者を募集する予定です。

## 【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以來実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しつつ、学生たちが協力し合って立案、計画、練習、実行して、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

また、このプログラムは、事前の学習と準備から始まります。現地では、児童養護施設の子どもたち、インドネシアの学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動をしていきます。そして帰国後では、事後研修・報告書作成・報告会の開催などを行い、このプログラムを通して、学生たちは多くの経験を経ています。観光客がほとんど行くことのないプリンビンサリという村において、現地の人々と触れ合いながら実生活の中で、本当の意味でのバリの歴史や文化に触れることのできる、総合的な体験型学習です。

## 【期間】2016年8月24日～9月10日の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、ウディア・アシ(意味:愛と知恵の家)第2アスラマ(意味:児童養護施設)

【ワーク内容】プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事等補助のボランティア等

【主催】桃山学院大学、バリ・プロテスタント・キリスト教会

【共催】ディアナ・プラ大学

【注意事項】金曜日5限にインドネシア語クラスやインドネシア文化クラスを開講しますので、スケジュールを空けておくことが必須となります。  
履修登録の必要はありません

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修-国際ワークキャンプ」)

## 【参加自己負担金】【約150,000円の予定】

〈上記は、教育後援会からの援助金3万円を含む額です。その他に日本学生支援機構より、奨学金支給の可能性(7万円)があります(前年度支給実績は12人中12人)。  
なお、為替レート、燃油サーチャージの変動等により参加自己負担金額が変更される場合があります。〉

※パスポート取得、予防接種等に関する費用、海外旅行保険代金は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明会にお越し下さい(4月8・9・11・12日頃を予定しています)。

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

国際ワークキャンプ報告編集委員

高岡 大毅  
大口 麗王  
岩田 莉菜  
廣澤 真子  
宮下 捷  
大本 航平  
芝山 みちる  
永本 愛理  
石橋 朔  
井須 奈々絵  
奥野 なつみ  
奥村 真弘  
芥子 桃佳  
倉部 拓実  
佐藤 匡  
林 周  
岩永 周子  
西川 誠一郎  
牧野 拓弥  
増田 俊輔

第29回 国際ワークキャンプ（インドネシア）報告書

発行日：2015年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ実行委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131（代）

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360（代）



桃山学院大学  
St. Andrew's University